

平成30年度 国際子ども図書館

児童文学連続講座講義

絵本と📖  
子ども  
の  
原点を👤  
見つめる

—子どもの成長発達と絵本

2019年9月

国立国会図書館 国際子ども図書館

## 『平成30年度児童文学連続講座講義録』の刊行に際して

国際子ども図書館では、国立の児童書専門図書館として、児童サービスに従事している図書館員等の方々を対象に、国内外の児童書・児童文学に関する幅広い知識のかん養に資するため、平成16年度からほぼ毎年度、「児童文学連続講座」を開講しています。平成29年度までの過去13回の連続講座では、初回テーマ「ファンタジーの誕生と発展」を始めとして、児童文学に関わる多様なテーマを取り上げてきました。これまでの児童文学連続講座の概要及び講義録については、当館ホームページにも掲載しております。詳しくは、次のURLを御参照ください (<http://www.kodomo.go.jp/study/chair/outline/index.html>)。

平成30年度の児童文学連続講座は、「絵本と子どもの原点を見つめる一子どもの成長発達と絵本」と題し、平成30年11月5日及び6日に実施しました。企画に当たっては、平成28年4月から平成31年3月まで当館客員調査員を委嘱していた石井光恵先生（日本女子大学教授）に監修をお願いしました。

急速な情報化を始めとする時代の変化に伴い、現代では絵本も多様化しています。一方で、絵本が子どもに新しい世界との出会いをもたらすものであることを考えれば、絵本の「核」となる部分には、子どもの成長発達に応じた内容が求められるという点は、いつの時代にも変わらないといえるでしょう。今回の連続講座では、子どもの成長発達に応じて絵本がどのように受容されるのかをキーポイントに、「子どもが身近な世界を認識する手助けとなる絵本」、「絵本を手渡す大人の役割」、「自然界に興味を持つきっかけを作る科学絵本」、「絵本の読みあいがもたらすもの」の四つのテーマについて、専門家の方々を講師としてお話を伺いました。なお、国際子ども図書館における絵本と子どもをつなぐ取組についても、当館職員が紹介しました。

本書は、各講師の語り口をそのままに記録した講義録です。各講義録には、講義で使用したレジュメと、講義で紹介された資料のリストを併せて収録しました。様々な御事情から受講することができなかつた方、受講した内容を再確認して研究を深めたい方など多くの方々に、本講義録を御参照いただければ幸いです。今回の連続講座が、子どもたちに絵本を手渡す上での新たな視点を得るきっかけとなることを願っています。

末尾ながら、監修及び講師をお引き受けくださった石井光恵先生、そして講師をお引き受けくださった秋田喜代美先生、真鍋真先生、村中李衣先生に厚く御礼申し上げます。

令和元年9月

国立国会図書館国際子ども図書館長

寺 倉 憲 一

## 凡例

- 本書は、平成30年11月5日及び6日に国際子ども図書館で開催した「国際子ども図書館児童文学連続講座—国際子ども図書館所蔵資料を使って」（総合テーマ：絵本と子どもの原点を見つめる—子どもの成長発達と絵本）を基に編集した講義録です。
- 各講師の「レジュメ」、「紹介資料リスト」も併せて掲載しました。「レジュメ」は講義本文の前に、「紹介資料リスト」は講義本文の末尾に掲載しています。それぞれ刊行に際し、必要に応じて改訂を行っていますので、講義当日に配布したものと異なる場合があります。
- 「紹介資料リスト」は、講義の中で紹介された資料のリストです。原則として国立国会図書館の所蔵資料の書誌情報を掲載しています。国立国会図書館に所蔵のない資料については、「国立国会図書館サーチ」等の書誌情報を参照しました。
- 「紹介資料リスト」の「請求記号」の項には、国際子ども図書館の請求記号を記載しました。国際子ども図書館が所蔵しない場合は、国立国会図書館東京本館の請求記号を記載し、（東京本館）と付記しました（所蔵状況：令和元年7月現在）。
- 本講義録におけるインターネット情報の最終アクセス日は、令和元年7月1日です。
- 講師の肩書きは連続講座当時のものです。
- 講義等の記録・配布資料等における意見にわたる部分は、講師等の個人的な見解であり、国立国会図書館の見解ではありません。

平成 30 年度国立国会図書館国際子ども図書館児童文学連続講座講義録

「絵本と子どもの原点を見つめる一子どもの成長発達と絵本」

目 次

『平成 30 年度児童文学連続講座講義録』の刊行に際して	寺倉 憲一	……………	1
凡例		……………	2
講座概要		……………	4
講師略歴		……………	5
はじめに	石井 光恵	……………	6
子どもと文化を架け渡す絵本	石井 光恵	……………	8
自然と自然史に興味をもつきっかけを作ってくれる絵本	真鍋 真	……………	31
子どもの発達と絵本・読書	秋田喜代美	……………	50
絵本を読みあい育ちあう	村中 李衣	……………	65
絵本と子どもをつなぐ国際子ども図書館の実践	福島 清裕	……………	82
おわりに	石井 光恵	……………	91

## 講 座 概 要

平成 30 年度国立国会図書館国際子ども図書館児童文学連続講座—国際子ども図書館所蔵資料を使って  
総合テーマ「絵本と子どもの原点を見つめる—子どもの成長発達と絵本」

○講義日程 平成 30 年 11 月 5 日（月）～6 日（火）

	内 容	講 師
11 月 5 日	開講、諸注意、講師紹介	
	はじめに	石井 光恵 (日本女子大学教授、 国立国会図書館客員調査員)
	子どもと文化を架け渡す絵本	石井 光恵
	自然と自然史に興味をもつきっかけを作ってくれる絵本	真鍋 真 (国立科学博物館標本資料センター センター長)
	絵本と子どもをつなぐ国際子ども図書館の実践	福島 清裕 (国立国会図書館国際子ども図書館 児童サービス課主査)
	館内見学	
11 月 6 日	子どもの発達と絵本・読書	秋田 喜代美 (東京大学大学院教授)
	絵本を読みあい育ちあう	村中 李衣 (ノートルダム清心女子大学教授)
	おわりに	石井 光恵
	受講者交流及び監修者コメント・質疑応答	
	閉講	

## 講師略歴 (五十音順、敬称略)

### 秋田 喜代美 (あきた きよみ)

東京大学大学院教育学研究科博士課程修了。博士(教育学)。立教大学文学部助教授等を経て、現在は東京大学大学院教育学研究科教授。同附属発達保育実践政策学センター・センター長。日本保育学会会長(2009-2016)、日本読書学会会長(2011-2013)、NPO ブックスタート理事(2000-現在)。

著書 『絵本で子育て』(共著)、『読書の発達心理学』、『読書の発達過程』等

監修 『本屋って何?』、『図書館のすべてがわかる本』、『こころを育てるおはなし101』等

### 石井 光恵 (いしい みつえ)

日本女子大学大学院家政学研究科修士課程修了、現在は日本女子大学家政学部児童学科教授。絵本専門士養成講座講師。絵本学会理事、同学会事務局長を歴任。日本保育学会、日本児童文学学会、絵本学会等所属。国立国会図書館客員調査員(2016-2019)。

著書 『保育で大活躍!絵本から広がるあそび大集合』(共著)、『幼児が夢中になって聞く!絵本の読み聞かせと活用アイデア 68—季節・行事編—』(共著)等

編著書 『絵本学講座2 絵本の受容』、『ベーシック絵本入門』(共編著)、『絵本の事典』(共編著)

### 真鍋 真 (まなべ まこと)

英国ブリストル大学にてPh.D.(理学)を取得。現在、国立科学博物館標本資料センター・センター長。日本古生物学会会長。子ども向けの図鑑の監修等を数多く手がけている。

著書 『深読み!絵本「せいめいのれきし」』、『恐竜博士のめまぐるしくも愉快的な日常』等

監修 『せいめいのれきし 改訂版』、『羽毛恐竜』、『とりになったきょうりゅうのはなし 改訂版』、『恐竜(学研の図鑑LIVE)』、『さがそう!マイゴノサウルス』等

### 村中 李衣 (むらなか りえ)

日本女子大学大学院家政学研究科児童学専攻修士課程修了。現在はノートルダム清心女子大学人間生活学部児童学科教授。児童文学作品の創作を続ける一方で小児病棟や刑務所等で絵本を介したコミュニケーションの可能性について調査研究を続けている。

著書 『絵本の読みあいからみえてくるもの』、『子どもと絵本を読みあう』、『よるのとしょかんだいぼうけん』、『かあさんのしっぽっぽ』、『マネキンさんがきた』等

## はじめに

### 石井 光恵

---

本日はたくさんの方においでいただきまして、ありがとうございます。

今年度は、昨年度に続き2年連続で絵本についての講座です。今年度もたくさんのお申し込みがありまして、絵本への関心の高さをひしひしと感じ、大変うれしく思っております。

昨年度は絵本の芸術性を扱いましたが、今年度はがらりと変えて、「絵本と子どもの原点を見つける—子どもの成長発達と絵本」をテーマにお送りします。

本講座の概要に、「メディア・コミュニケーションの優勢な現在、絵本も実に多様化してきています。」と書きました。ここ10年ほど、人工知能(AI)の開発や発展、普及の影響で、複数のものの中でインタラクティブにやり取りをしながら何かをするという傾向が、様々なメディアでとても強まっています。絵本も例外ではありません。絵本から声がする—絵本から読者に指示が出て、そして読者は絵本に関わり、その絵本が完結する—という手法が出てきています。このような絵本は海外で始まり、日本でもたくさん出ています。広い意味での仕掛け絵本といいませんか。絵本は実に多様化し、どんどん進化、発展しており、読み手の「こういうものが読みたい」というニーズが、この多様化を後押ししています。

そのような中であって今回は、子どもの成長発達と絵本との関係を「絵本の核」として認識し続ける、という姿勢をもう一回確認しておこうという思いを込め、この講座を企画しました。

絵本はいつの時代でも、子どもに新しい世界との出会いや、驚きや喜びの経験をもたらします。最近では、必ずしも子ども向けではない絵本もありますが、それでも多くの絵本は、読者として子

どもたちを想定しています。子どもの成長発達と絵本というテーマは、古くて新しいテーマで、絵本の原点に戻るテーマでもあろうかと思えます。

一方で絵本の発展というのは、大人の関心抜きにはあり得ません。なぜなら、絵本は大人が作り、大人が買い、大人が子どもたちに手渡すものだからです。大人の関わりなしには、絵本は子どもたちの手には渡りません。そのため、大人の関心に沿った、大人の鑑賞に堪える絵本というものも、当然ながら出てきます。それも絵本を多様化させ、発展させていく一つの原動力となっていることは否めません。

しかしながらやはり、絵本は子どもの成長発達にとって重要なものであり、子どもの成長発達との関係を抜きにして絵本は成り立ちません。これもまた、事実であります。「そんな当たり前のことを」と思われるかもしれませんが、この問題は常に問い返していくことが重要であろうと思えます。

本講座では、子どもの成長発達に応じて絵本はどのように受容されるかをキーポイントに、この世界に産み落とされ成長して大人になっていく子どもと、その成長発達の手助けをする絵本、そしてそれを手渡す大人の役割を考えようと思えます。物語絵本のみならず、自然界に興味を持つきっかけを作ってくれる科学絵本や、絵本を読みあう場が何をもちたらすかにも迫りたいと思えます。

一日目は私と、国立科学博物館の真鍋真先生の講義です。

私の講義では、「子どもと文化を架け渡す絵本」をテーマに扱います。子どもたちは我々の文化に生まれて、文化を吸収し、新たに文化を創造していく存在です。また、子どもたちが成長と共に身に着ける社会的なルールも、その社会の文化に裏付けられたものです。このような観点から、子どもと社会の出会いを物語化した絵本を扱います。

午後には真鍋先生に、子どもたちが自然への関心を育む手助けをする科学絵本について御講義いただきます。今、世界的に科学絵本が躍進しているという印象を受けております。子どもたちの自然科学への関心を育むことについて、古生物・恐

竜の研究者の立場から語っていただきます。企画を担当した関係で、事前に真鍋先生の講義資料を拝見したのですが、ドキドキわくわくする内容です。先生はバージニア・リー・バートンの『せいめいのれきし』改訂版を監修されたことで大変有名ですが、やはり御専門の恐竜に対する情熱はひとしおなのだと感じました。

二日目は、東京大学大学院の秋田喜代美先生と、ノートルダム清心女子大学の村中李衣先生に御講義いただきます。

秋田先生には、子どもたちの発達の視点から、「子どもと絵本・読書」についてお話しいただきます。子どもの読書活動推進の分野では大変に高名な、御活躍中の先生で、とても御多忙でいらっしゃいます。1年前にお会いしたとき、「この講座でぜひ御講義いただきたいのですが、いつ御依頼したらいいですか」とお尋ねしました。すると秋田先生は「今よ！」とおっしゃったので、その場でお願いして手帳に書きこんでいただいたのです。お願いするのが少しでも遅れたら、ここにおいでいただけなかったかもしれません。今回は子どもたちの観察や調査研究を踏まえてお話しいただきます。司書の皆さんも、子どもたちと日々接する中で、子どもの発達について関心を持たれるかと思っています。そのような御関心に、秋田先生の御講義

は最適かと思います。

午後には、村中先生に御講義いただきます。村中先生は「読みあい」という言葉を使います。一般的には、子どもと大人と一緒に読むことを「読み聞かせ」といいますが、村中先生は、それは大人の「上から目線」の言葉で、共に読みあうのが絵本の本来の在り方であるとの考え方にに基づき、ずっとこの言葉を使っておられます。

先生は、子どもや高齢者、病院に長期入院している子ども、刑務所で服役中の受刑者たちなど、いろいろな人たちと絵本を読みあっています。このような御経験を踏まえて、絵本をお互いに読みあう場で、読み手と聞き手の間に何が生まれるかということをお話しいただけるのではないかと思います。

また、二日目には受講者交流も計画されています。ただ受講するだけでなく、自分が学んだものを皆さんと共有する、これが現代的な在り方なのですね。大学などでは、このような方法を取り入れるようになっていきます。図書館にも、このようなことが望まれる日が来るのではないかと思います。

二日間、十分に勉強されて、また、十分に楽しんでください。



## 子どもと文化を架け渡す絵本

石井 光恵

子どもたちは成長するにつれ身のまわりの世界から、自分が将来生きていく広い社会へと目を向けていきます。その社会に生きる必須アイテムは、まず人としての文化を身につけることでしょう。その際の手助けとして、絵本は子どもたちにどのような体験を提供できるか、幼い子どもたちになじみの深い物語絵本を中心に考えます。

### 1. 平成の絵本動向から

#### ① パラダイムの転換から始まって、懐深い絵本のすきまを旅した時代

- ・2000年以降の日本の古典芸能や古典文学からの絵本化を狙った「和」テイスト絵本の出版（日本昔話絵本、落語・狂言・歌舞伎等日本の古典芸能・古典文学を題材とした絵本、怪談絵本、妖怪絵本、えほん遠野物語）

『いまむかしえほん』シリーズ 広松由希子／文 岩崎書店 2009年～

『日本の昔話えほん』シリーズ 山下明生／文 あかね書房 2009年～

『日本名作おはなし絵本』シリーズ 小学館 2009年～

『ぼけものつかい』川端誠／作 クレヨンハウス 1994年 落語絵本シリーズ

『ねぎぼうずのあさたろう』飯野和好／作 福音館書店 1999年 日本傑作絵本シリーズ

『仮名手本忠臣蔵』橋本治／文 岡田嘉夫／絵 ポプラ社 2003年

橋本治・岡田嘉夫の歌舞伎絵巻シリーズ

『がまの油』齋藤孝／文 長谷川義史／絵 ほるぷ出版 2005年

声にだすことばえほんシリーズ

『ごびらっふの独白』草野心平／詩 齋藤孝／編 いちかわなつこ／絵 ほるぷ出版 2007年

声にだすことばえほんシリーズ

『ぶす』もとしたいづみ／作 ささめやゆき／絵 講談社 2007年

講談社の創作絵本 狂言えほんシリーズ

『ぶす』内田麟太郎／文 長谷川義史／絵 ポプラ社 2007年 狂言えほんシリーズ

『権大納言とおどるきのこ』ほりかわりまこ／作 偕成社 2009年 今昔物語絵本シリーズ

『本所ななふしぎ』斉藤洋／文 山本孝／絵 偕成社 2009年（怪談）

『のっぺらぼう』杉山亮／作 軽部武宏／絵 ポプラ社 2010年

杉山亮のおぼけ話絵本シリーズ

『悪い本』宮部みゆき／作 吉田尚令／絵 東雅夫／編 岩崎書店 2011年

怪談えほんシリーズ

『いるのいないの』京極夏彦／作 町田尚子／絵 東雅夫編 岩崎書店 2012年

怪談えほんシリーズ

『ことりぞ』京極夏彦／作 山科理絵／絵 東雅夫／編 岩崎書店 2015年

京極夏彦の妖怪えほんシリーズ

『かっぱ』柳田国男／原作 京極夏彦／文 北原明日香／絵 汐文社 2016年

えほん遠野物語シリーズ

## ② 荒井良二からヨシタケシンスケまで

ヨシタケシンスケ：「かつての僕みたいに『絵本が描ける気がしない』という人が、じゃあ何ならできののかを探ることが絵本の間口を広げるきっかけだろうし、そのすきまがすごく空いている世界のはず。すきまをみんなで探すが、絵本の可能性を広げていくことだと思うんです。」『月刊Moe』2018年1月号 「絵本作家特集2018」 p.18

『バスにのって』荒井良二／作 偕成社 1992年

『りんごかもしれない』ヨシタケシンスケ／作 ブロンズ新社 2013年

## 2. 子どもたちの社会的成長を支える絵本

### ① 絵本のすきまに対して、絵本の王道をどう考えるか

- ・『としょかんライオン』ミシェル・ヌードセン／作 ケビン・ホークス／絵  
福本友美子／訳 岩崎書店 2007年

この絵本が、紹介されたとき、正に王道という印象を強く持った。当時も評判になった絵本。子どもに語るべきことがしっかり語られ、上質なユーモアが楽しまれている。

- ・絵本は、子どもたちの身体の発達、言語や認知、情緒や自我、社会性の発達などにより添って、その時々に応じて幅を広げていくメディア。
- ・絵本は子どもにとって、一つの経験となりうるもの。

### ② 子どもたちと絵本の関係から

#### (1) まだ未来の見えない子どもと信頼でむすばれるために「絆」づくり

- ・いつも守ってくれる人がいるという信頼感。この信頼感が「絆」というもので、将来の人間形成の土台となるものである。
- ・その絆が赤ちゃんに生まれるためには、世話をしてもらおうと同時に、やさしく語りかけてくれる言葉が必要。
- ・絵本の言葉が楽しいときに繰り返し読まれることで、子どもの心に安心の心地よさや愛情のぬくもりが届けられる。
- ・一緒に遊ぶ絵本も重要で、絵本を介して同じものを見、同じ楽しさを味わうという身体を通じた共感性を大切にしていくのもこの時期の絵本の役目。

『いないいないばあ』松谷みよ子／文 瀬川康男／絵 童心社 1967年

『きんぎょがにげた』五味太郎／作 福音館書店 1982年

『くだもの』平山和子／作 福音館書店 1981年

『こちょこちょこちょ』内田麟太郎／文 長野ヒデ子／絵 童心社 1996年

『しろくまちゃんのほっとけーき』森比左志・和田義臣／作 若山憲／絵 こぐま社 1972年

『じゃあじゃあびりびり』まついのりこ／作 偕成社 1983年

『ぷくちゃんのすてきなぱんつ』ひろかわさえこ／作 アリス館 2001年

『だるまさんが』かがくいひろし／作 ブロンズ新社 2008年

- (2) 葛藤を抱える幼い子どもたちとともに一しつけ・基本的な生活習慣、人間関係のはじまり
- ・基本的な信頼関係ができて1-2歳になっても、子どもは自分の欲求や希望が満たされないと、かんしゃくを起こすのが普通で、それは未来への感覚がないからだと言われている。いつかは大丈夫になるという安心して未来を待てる感覚、つまり未来への想像力を育てるためにも、繰り返し読まれる絵本は大切な役目を果たす。
  - ・大好きな人から「ダメ！」と言われるしつけ。断乳、トイレット・トレーニングなども、まずは越さねばならない大きなしつけの葛藤。
  - ・自分のひとり占めだった愛情を弟や妹に分かたなければならぬ葛藤。
  - ・また、兄や姉と競い合わなければならぬ葛藤。思い通りにならぬ葛藤。さまざまに戸惑う子どもの心に、絵本はそっと寄り添う。

『フランシスのいえで』ラッセル・ホーバン／文 リリアン・ホーバン／絵 松岡享子／訳  
日本パブリッシング 1971年

『ティッチ』パット・ハッチンス／作 石井桃子／訳 福音館書店 1975年

『ピーターのいす』エズラ・ジャック・キーツ／作 木島始／訳 偕成社 1969年

『すえっこおおかみ』ラリー・デーン・ブリマー／文 ホセ・アルエゴ&アリアヌ・デュエイ／絵  
まさきりこ／訳 あすなる書房 2003年

- (3) 子どもの成長にひそむ大切なワイルドさと想像力—自分の回りの環境を、コントロールしていく力をつける
- ・絵本は、子どもの成長にとって欠かせないあることに気づかせてくれる。人間が成長するときには経験する、自分の心の奥底にあるワイルドさの克服といえるものである。
  - ・子ども自身でも解決のつかない、心の内側から湧き起こってくる野性といったそのワイルドさと、どう折り合いをつけて静めるか。
  - ・特徴的なのは、心の闇を抜ける手段としてファンタジーを使用していることである。日常の現実と非日常の虚構が交差して物語が生まれ、その物語を生きることで人は成長していくことを絵本は語る。

『かいじゅうたちのいるところ』モーリス・センダック／作 神宮輝夫／訳 富山房 1975年

『おいしいのぼうけん』古田足日／作 田畑精一／絵 童心社 1974年

- (4) 子どもが実感する自己の成長の喜び—自立への憧れ と 自立できたときの充足感
- ・大きくなる、いろいろなことができるようになる、周りをコントロールできるようになるということに、あこがれ続けているのが子ども。
  - ・絵本は、子どもの成長を読者の子どもに実感させるものであり、子どもが自分を見つめ直すものにもなっている。泳げるようになったり、嫌いな食べ物を克服したり、縄跳びが跳べるようになったりと、些細な自分の日常が輝いて見えることだろう。

『はじめてのおつかい』筒井頼子／作 林明子／絵 福音館書店 1977年

『ちいさなヒッポ』マーシャ・ブラウン／作 うちだりさこ／訳 偕成社 1983年

(5) 社会的現実と向き合う子ども

<仲間集団との関係で社会を知る>

- ・年齢が上がって、集団生活を送るようになると、子どもは子ども同士の社会に目を向けるようになる。

<家庭の問題で社会の矛盾と出会う>

- ・望むと望まないにかかわらず、子どもはおとなの事情に巻き込まれていく。貧困や親の離婚の問題、社会的差別や戦争など、おとな社会には理不尽なことが多い。自分ひとりの問題ではなく、社会の問題にも、子どもは次第に目を開かれていく。

『すきですゴリラ』アントニー・ブラウン／作 山下明生／訳 あかね書房 1985年

『パパのカノジョは』ジャニス・レヴィ／作 クリス・モンロー／絵 もん／訳 岩崎書店  
2002年

<広い大人の社会へと目を開いていく>

- ・十歳を越えるころには、人はどうあるべきか、社会はどうあるべきかと、自分を含め人びとを幸福にするものに関心を寄せるようになってくる。
- ・絵本を通して、正義を守るために、人は人や社会とどう向き合わなければならないかを、子どもたちは学ぶことだろう。人権への意識なども育つに違いない。

『ローザ』ニッキ・ジョヴァンニ／文 ブライアン・コリアー／絵 さくまゆみこ／訳  
光村教育図書 2007年

『なぜ戦争はよくないか』アリス・ウォーカー／文 ステファーン・ヴィタール／絵  
長田弘／訳 偕成社 2008年

『おとうさんのちず』ユリ・シュルヴィッツ／作 さくまゆみこ／訳 あすなろ書房 2009年

(6) 子どもの身の回りの自然への気づきと関心 ⇒ 科学する心を育てる

- ・子どもは成長すると、自分の身の回りで起こっているさまざまな現象に関心を向けるようになる。その現象の一つに自然科学がある。「不思議…」 「どうして…」 と考える心を育て、知的な興味関心に応えるものとしての絵本もある。
  - ・認識絵本とか、知識絵本、科学絵本と呼ばれる分野の絵本で、これらの絵本が子どもたちの成長発達に果たす役割も大きい。幼い子では、数やことば遊びの絵本、モノの絵本（カタログ的にモノが紹介される絵本）などに関心が高く、小学校低学年から中学年にかけて、自然科学への関心が高くなると言われている。
- 「知りたい」、「わかりたい」という、幼い子どもたちの要求に応えることができるのも、絵本の特質だろう。

『かわ』加古里子／作 福音館書店 こどものとも 1962年 傑作集 1966年

『こいぬがうまれるよ』ジョアンナ・コール／文 ジェローム・ウェクスラー／写真  
坪井郁美／訳 福音館書店 1982年

『つちはんみょう』館野鴻／作 偕成社 2016年

『雑草のくらし』甲斐信枝／作 福音館書店 1985年

『あさがお』荒井真紀／作 金の星社 2011年

『すっぱりめがね』 藤村賢志／作 教育画劇 2017年

### 3. 総括 — 絵本と子どもの原点にかえて

- ・絵本は繰り返し読まれ、子どもの心に大切なことを蓄積させていくメディアである。
- ・絵本は子どもにとって、体験・経験となるものである。  
もちろん、実体験ではないが、主人公とともに想像上で体験していくことができる。  
実体験より、主人公とともにした想像上の体験から自分の体験を客観的に見ることができる利点がある。
- ・絵本は子どもたちの生きる上でのモデルとなるものでもある。  
自分たちが生きる世界の文化の様相、社会がよしとしている価値観など、その真髓を分かり易く伝えることのできるものである。
- ・絵本は子どもたちを楽しませるもの。

絵本は、そこにあるままでは単なる物にすぎない。子どもの成長に寄り添う絵本は、子どもへの理解とともに読まれることで、初めてその意味を持ち輝きを増す。そして、「基本的に子どもたちに『この世は生きるに値するんだ』ということ伝えるのが自分たちの仕事の根幹になければいけないと思ってきた」という、宮崎駿監督の引退の言葉にあったように、絵本の根幹にもまた、子どもたちに「この世界は生きるに値する」ことを語り伝えていくものがなければならないだろう。

## 子どもと文化を架け渡す絵本

石井 光恵



今日は「子どもと文化を架け渡す絵本」ということでお話しします。

「はじめに」でも述べましたように、文化というのは社会的なルールを含むものであり、その世界で生きていくために必要なものです。「子どもと」の後に何を入れようかと考えまして、この文化という大変大きい概念の言葉を入れてみました。

### 1. 平成の絵本動向から

#### ① パラダイムの転換から始まって、懐深い絵本のすきまを旅した時代

まずは平成の絵本の動向について一緒に考えていきたいと思います。平成の30年間で日本の絵本がどう動いてきたかということは、「文化との架け橋」という役割を考える上で大事なことではないかと思っています。

子どもたちは成長するにつれて、身の回りの世界から、自分が将来生きていく広い世界へと目を向けていきます。その社会に生きる必須アイテムが、人としての文化を身に付けることだと思えます。その際の手助けとして、絵本は子どもたちにどのような体験を提供できるか、幼い子どもたちになじみの深い物語絵本を中心に考えていこうと思います。

では、なぜ平成の物語絵本の動向から始めるのでしょうか。2019年4月30日に平成が幕を閉じます。興味深い30年であったかと思っています。レジメにも書きましたように、1990年代から現代までの30年間、絵本はパラダイムの転換から始まって、懐深い絵本のすきまを旅してきました。これが平成という時代の絵本の動向ではなかったかと、私は考えております。

このパラダイムの転換とは何だったのでしょうか

か。これは昨年度の児童文学連続講座でも取り上げたことです。それまでは、絵本というのは何を子どもに語れるかという、テーマ主義的に考えられるものでした。それが1990年頃を境に、絵本の視覚表現に注目が集まってきました。つまり、絵本はアート作品として成り立つという考え方で、これが絵本の世界を大きく変えました。つまり、絵本表現というものがより多様に、ある種自由になっていきます。児童文学的・テーマ主義的な絵本観から、美術的・表現主義的な方向へ動いていくのが、1990年代の初めなのです。テーマから解放されて、表現としての絵本の可能性を考えるということです。それまでになかった絵本の表現を求める傾向が強くなり、画期的な表現を探そうとしていたように思います。絵本にアイデアが求められたということでもあります。そういう意味で、「すきまを旅した時代」と名付けてみました。その一つとして、「はじめに」でお話ししたインタラクティブな絵本、仕掛け的な要素をたくさん持った絵本というのが出てきました。昨年度はこれについて考えました。

今年度は、この30年間で、日本の絵本にある傾向のようなものが見えてきたので、そこを始点に考えたいと思います。それは、「和テイスト」です。あんみつやお汁粉等を和テイストと呼ぶことがありますが、つまりは日本の味が生き残った絵本が集中して数多く出版される傾向が見えるということです。この傾向は、日本の古典文学や古典芸能を絵本化するところから始まっています。

誤解のないようあらかじめ申し上げますが、そういった絵本がそれ以前になかったということではありません。これから御紹介するような昔話の絵本も、以前から出ていましたし、現在も出続け

ています。ですが、時代の特徴といえるほど集中的に出ているというところが、1990年代以降、平成の時代の面白いところなのです。

例えば安野光雅が出した『繪本平家物語』<sup>1</sup>です。この「繪」という字は旧字を使っていて、ちょっとかっこいいですね。旧字を使った背景には、子ども向けではないという意図もあったかと思いません。絵本は長い歴史を持っていますが、絵本が子どものためのものになるのは近代以降のことです。日本の場合、大人たちが楽しんだ絵本というのは、絵巻の時代からたくさん出ていて、絵本という名称を使いながら発展してきました。そのような背景も踏まえて、あえてここでは旧字の「繪」としたのだと思うのです。幼い子ども向けに書いていないということで、芸術的なイラストレーションが満載されています。これは1996年に出版され、10年後の2006年には、たくさんの人が手に取れるようなカジュアル版<sup>2</sup>が出版されています。

この『繪本平家物語』は必ずしも子ども向けではない和テイストの絵本ですが、子ども向けの和テイスト絵本の始まりは、落語絵本からだったのであると思います。

まず紹介するのは川端誠の「落語絵本」シリーズです。『ばけものつかい』<sup>3</sup>から『みょうがやど』<sup>4</sup>まで、代表的な落語が絵本になっています。全15冊で、1995年から2012年にかけて出版されました。ここ数年、新刊が出ていませので、これで一段落かと思えます。元が落語なので、とてもユーモラスな内容です。川端誠は、落語にもオチがあるように絵本にもオチが必要だという考え方のようで、ちょうど題材と作者の考え方がぴったり合ったようです。中でも『じゅげむ』<sup>5</sup>は、NHKの子ども向け番組「にほんごであそぼ」で落語の『寿限無』が取り扱われたこともあり、とてもよく読まれたそうです。

川端さんは2017年に出した『絵本作家の百聞

百見』<sup>6</sup>の中で、落語絵本シリーズについて語っています。彼はこの絵本で、おぼけや十二支、落語など、日本の風土から生まれた習俗や人情、心意気、ユーモアを表現しようとしていたのだと述べています。また、絵本は声に出して読まれるという特徴がありますので、日本語が持っている奥深さ、おもしろさ、調子良さを、声に出して味わってほしいとも述べています。余談ですが川端さんは、「読み聞かせ」や「読みあい」ではなく「開き読み」という言葉を使っています。絵本は開いて一緒に読むから開き読みなのだということです。

特に勉強になると思ったのは、川端さんは絵本を描きながら、異なる文化の民族の暮らしにも思いをはせているという点です。日本のものを書きながら、世界市民としての視座を持つことを忘れないようにしたということです。加えて、真にナショナルなものは、インターナショナルなものに通じるという考えを持っています。ここで重要なことは、川端さんは懐かしい日本を描くのではなく、常に未来志向で本を作ろうと述べていることです。つまり懐古的な意味で落語絵本を作ったのではないのでしょうか。これはとても大事なことだろうと思います。

こちらは岩波書店から2004年に出た「てのひらむかしばなし」シリーズです。昔話絵本は2009年頃に集中して出てきますけれども、その先駆けとなったものです。縦15センチ横19センチと小型で、価格も1冊800円前後ですから、手軽に手に入るような形で出ています。手軽に買えるというのは重要なことです。当時力を付けてきていた絵本作家たちが、挿絵を担当しています。

これに続いて2005年、くもん出版から、「子どもとよむ日本の昔ばなし」シリーズが出ました。これは昔話研究の大家である小澤俊夫ともう一人（お話ごとに変わります）の二人で再話をされています。これは30冊出ました。絵は必ずしも現代作家にこだわったわけではないようです。これは3期に分けて2008年頃まで続けて出ました。価格は1冊450円くらいです。手軽に読めるとい

1 安野光雅 作『繪本平家物語』講談社、1996。

2 安野光雅 作『繪本平家物語 カジュアル版』講談社、2006。

3 川端誠 作『ばけものつかい』（落語絵本 1）クレヨンハウス、1994。

4 川端誠 作『みょうがやど』（落語絵本 15）クレヨンハウス、2012。

5 川端誠 作『じゅげむ』（落語絵本 4）クレヨンハウス、1998。

6 川端誠 著『絵本作家の百聞百見』子どもの未来社、2017。

うことでしょう。

これと前後して、2003年から2009年にかけて、齋藤孝の編著で「声にだすことばえほん」シリーズがほるぶ出版から出版されました。17冊出ています。『おっと合点承知之助』<sup>7</sup>は言葉遊び、『知らざあ言って聞かせやしょう』<sup>8</sup>は歌舞伎の名文句です。このような、日本語の中に残っている、声に出して唱える言葉を集めた絵本です。詩や古典、『吾輩は猫である』<sup>9</sup>のような純文学もあります。『がまの油』<sup>10</sup>は物売りの口上文ですね。

一方こちらは、一見して子ども向けではないことはお分かりだと思いますが、橋本治(1948-2019)と岡田嘉夫で出した「橋本治・岡田嘉夫の歌舞伎絵巻」シリーズです。大変に精緻で美しい、巧みな絵本です。岡田さんは同じくらしいの時代に、さねとうあきらと、『四谷怪談』<sup>11</sup>という絵本も出しています。イラストレーターは同じですから同じような趣向です。子ども向けではありませんが、古典を大変美しく描く本です。

これは「日本傑作絵本シリーズ」ということで、福音館書店から出ています。狂言を題材にした絵本が2冊入っています。『鬼の首引き』<sup>12</sup>と『木の実のけんか』<sup>13</sup>です。『鬼の首引き』は井上洋介(1931-2016)ですが、彼の作品の中でも屈指の仕上がりではないかと個人的には思っています。

そして、落語があるなら浪曲があってもいいのではないかということで、『ねぎぼうずのあきたろう』<sup>14</sup>がシリーズ化されます。これは1999年に刊行され始めて、2017年までに10冊出ています。小学館児童出版文化賞を受賞するなど、高い評価を受けた絵本です。中身は浪曲風の痛快なチャンバラ時代劇です。このシリーズはまだ続きが出る

かもしれません。

2007年には、講談社とポプラ社が同時に狂言の絵本を出しています。これはそれぞれの出版社による『ぶす』<sup>15 16</sup>です。「附子」という狂言は御存じですか。ある家の主が、壺の中に甘くておいしいものを隠していました。ある日出かけるとき、使用人に食べられては困ると思い、「これは附子という毒だ。空気に触れただけでお前たちは死ぬぞ」と言います。しかし主が出かけると、二人の使用人は壺に興味津々です。附子から出る空気に触れないよう、扇子で空気をあおぎながら附子を食べてみたら、なんと甘くておいしいではありませんか。結局使用人たちは附子を全部食べて、主人が大切にしていた壺を壊してしまいます。帰ってきた主人は、壺が壊され、附子もすっかり食べられてしまったことを知って怒ります。これに使用人たちは、主の大切な壺を割ってしまったから、死のうと思つて附子を全て食べたのですが死ぬませんでした、と言いつつという話です。支配者をこけにして笑って楽しむような話が、狂言には多くあります。そのような昔の人たちのユーモアを拾い上げて絵本にしたものです。このような絵本を、各社5、6冊ほど出しています。

2009年には、堀川理万子が「今昔物語絵本」シリーズを出しています。2017年までに5冊刊行されています。『今昔物語集』に収録された不思議な物語を絵本にしております。

関連して、『ぼくがうまれた音』<sup>17</sup>という絵本を御紹介します。子ども向けであり子ども向けでないと思しますか、ちょっと不思議な絵本だと思います。この絵本の文を書いた近藤等則は、世界的に有名なジャズトランペッターです。絵を描いた智内兄助は、海外で大変人気のある画家です。その人たちがなぜ絵本を作るのかということが、興味深いですよね。彼らは同郷で、今治で育ちました。同じ海を見て、同じものを呼吸し、二人とも世界的な有名人になりました。その二人が、自分

7 齋藤孝 文、つちだのぶこ 絵『おっと合点承知之助』(声にだすことばえほん) ほるぶ出版, 2003.

8 河竹黙阿弥 文、飯野和好 構成・絵、齋藤孝 編『知らざあ言って聞かせやしょう』(声にだすことばえほん) ほるぶ出版, 2004.

9 夏目漱石 文、武田美穂 絵、齋藤孝 編『吾輩は猫である』(声にだすことばえほん) ほるぶ出版, 2006.

10 齋藤孝 文、長谷川義史 絵『がまの油』(声にだすことばえほん) ほるぶ出版, 2005.

11 さねとうあきら 文、岡田嘉夫 絵『四谷怪談』(日本の物語絵本14) ポプラ社, 2005.

12 岩城範枝 文、井上洋介 絵『鬼の首引き』(日本傑作絵本シリーズ) 福音館書店, 2006.

13 岩城範枝 文、片山健 絵『木の実のけんか』(日本傑作絵本シリーズ) 福音館書店, 2008.

14 飯野和好 作『ねぎぼうずのあきたろう その1』(日本傑作絵本シリーズ) 福音館書店, 1999.

15 本下いづみ 文、ささめやゆき 絵『ぶす: 附子』(講談社の創作絵本、狂言えほん) 講談社, 2007.

16 内田麟太郎 文、長谷川義史 絵『ぶす』(狂言えほん1) ポプラ社, 2007.

17 近藤等則 文、智内兄助 絵『ぼくがうまれた音』(日本傑作絵本シリーズ) 福音館書店, 2007.



たちの原点を求め子ども時代を見つめながら、絵本を作ったのです。

近藤等則は小さい頃「疍<sup>かん</sup>の虫」が強い子だったようです。その「疍の虫」の表現に、百鬼夜行絵巻の妖怪の絵を使っています。百鬼夜行というのは、付喪神<sup>つくもがみ</sup>や鬼、妖怪等が夜練り歩くというもので、これを描いた百鬼夜行絵巻は室町時代からあるものです。この絵本では幕末から明治にかけての日本画家である河鍋暁斎(1831-1889)の『百鬼夜行図』をパロディにして使っています。「疍の虫」という目に見えない不思議なものが妖怪に近いというような発想が、多分ここに出ているのだと思います。

この絵本が出たのは2007年です。これまでにお見せしたように、この時期には絵本が日本人の昔の心のようなところへ戻る傾向がありました。この頃、小学校学習指導要領が改訂され、文化や伝統に関する教育の充実が盛り込まれたことも、和テイストの本が様々な形で出版された一つの理由であろうかとは思いますが、それでも不思議な一致だとは思いますが。

それでは昔話絵本の話題に戻しましょう。2009年には岩崎書店、小学館、あかね書房が3社一斉に、昔話絵本のシリーズを出しました。

まずは岩崎書店の「いまむかしえほん」シリーズです。これは広松由希子の文章で、当代の人気絵本作家、実力派絵本作家をイラストレーターに起用して、個性的な日本の昔話絵本を目指したものです。それぞれの画家たちも、昔話を題材に非常に工夫を凝らしオリジナリティを出すことにチャレンジしています。『かさじぞう』<sup>18</sup>から始まって、どれも各自の個性的な表現で作られています。例えば『かちかち山』<sup>19</sup>はとてもモダンな雰囲気です。『さるかに』<sup>20</sup>は及川賢治の作品で、他にはない独特の雰囲気です。桃太郎が生まれる場面のエネルギー感など、様々な個性的に描かれています。

18 広松由希子 文、松成真理子 絵『かさじぞう』(いまむかしえほん 1) 岩崎書店, 2009.

19 広松由希子 文、あべ弘士 絵『かちかち山』(いまむかしえほん 5) 岩崎書店, 2010.

20 広松由希子 文、及川賢治 絵『さるかに』(いまむかしえほん 6) 岩崎書店, 2011.

次はあかね書房の「日本の昔話えほん」シリーズです。これも2009年から2011年までで全10巻が出ています。文章は山下明生です。これも「いまむかしえほん」シリーズと同様に、絵は当代の人気作家が担当し、個性的な絵本作りが目指されています。「いまむかしえほん」シリーズと見比べると、なるべく画家が重複しないよう努力しているようです。書影を見ると、どれも野心的にチャレンジしているという印象があります。同じ昔話でも、描き方によって雰囲気が全く違います。

そして小学館の「日本名作おはなし絵本」シリーズです。24巻出ました。小学館の場合は、絵本ごとに、文章と絵それぞれの作家がコンビを組んで作るという方法です。従来なかったような昔話絵本を出そうということでは同じ方向です。このようなコンセプトのシリーズが3社からいっぺんに出る時期があったのです。

小学館の場合には他の出版社とは少し事情が違っていて、先に「世界名作おはなし絵本」シリーズを出しています。アンデルセン(Hans Christian Andersen, 1805-1875)の『マッチ売りの少女』<sup>21</sup>を始め、童話や昔話等を盛り込んでいます。この「世界名作おはなし絵本」シリーズ全24巻を出し、続いて「日本名作おはなし絵本」シリーズを、昔話を主体に一休さんなどのとんち話も入れながら出したという流れです。

ここまでは日本の古典の笑い、狂言などのユーモラスさを楽しむという方向性でしたが、次第に、おどろおどろしさや怖さを楽しむ方向へと徐々にシフトしていきます。これは冒頭でお話したように、すきまを考えるとということです。あるものがある程度飽和状態になると、それとは違うものを求める方向に動いていくというのは必然であったかと思えます。結果として、怖い本、おどろおどろしい本へシフトしていくのです。

その初めはこの絵本、『地獄』<sup>22</sup>だったのではないかと思います。これは1980年に出ていますから、今お話ししている1990年代から10年遡りま

21 アンデルセン 原作、末吉暁子 文、中島潔 絵『マッチ売りの少女:「アンデルセン童話」より』(世界名作おはなし絵本) 小学館, 2006.

22 白仁成昭[ほか]構成『地獄:千葉県安房郡延命寺所蔵』風濤社, 1980.

す。「子どもたちよ、命を粗末にするなよ」というコンセプトで、地獄の絵本を出したのです。それだけではなく、目に見えないけれどきつとある世界を子どもたちに知らしめることによって、翻って自分たちの現代の生き方を知ってもらおうという目的もあったようです。この絵本は、しつげに役立つということで大変評判を生んだ絵本です。怖いぞ、悪いぞと脅すのに絵本を使っていいのかというのが私の考えで、これを絵本にするかという声はあったと思うのですが、一方で書き手の目的が理解されたということでもあるのかなと思います。

それに対して、『本所ななふしぎ』<sup>23</sup>という、江戸の本所であった怪談話を絵本にしたものが、2009年に出てきます。斉藤洋が文を書き、山本孝が絵を付けました。

今お見せしているのは足洗 邸<sup>あしあらいやしき</sup>の話です。あらすじはこうです。夜寝ていると、天井から足がどんと落ちてきて、足を洗えと言うのです。家の主人である侍は、怖いのでその足を洗います。すると足は引っ込みます。足を洗わないと、足が暴れて屋根裏中をガタガタと揺らすので、お侍は困ってしまいます。それをお侍から聞いた同僚は、じゃあ自分がそこに住むから交代しようと言いますが、実際に同僚がそこに住むと、もう足は出なかったという話ですね。このように、絵本の世界に怪談が入り込んできます。ここまで来ると、しつげの問題ではないですね。「こんなことがあったんだってさ…」と怖さを楽しむ絵本です。

怪談が出れば次はおばけ、ということでしょうか。2010年から、杉山亮が文を書き、軽部武宏が絵を描いた、「おばけ話絵本」シリーズが出ています。こちらは2018年時点で4冊出ています。『のっぺらぼう』<sup>24</sup>、『うみぼうず』<sup>25</sup>、『かっぱ』<sup>26</sup>や『てんぐ』<sup>27</sup>といった、目には見えないけれどちょっと怖い、ちょっと気味が悪いものを絵本に

したのです。

そのうち、怖さの質の変化を感じるような絵本が登場してきます。私自身、そこで初めて、怖い絵本とは何だろうと改めて突きつけられることになりました。

それがこの「怪談えほん」シリーズです。岩崎書店から、2011年から出ているものです。『悪い本』<sup>28</sup>は宮部みゆきが書いています。表紙にいるこのクマが恐ろしいのです。それまでの怪談絵本のようにケラケラと笑えるものではなく、執拗<sup>しつよう</sup>に執拗に執拗に追ってくるような怖い話です。『マイマイとナイナイ』<sup>29</sup>は、目の中に何かが住んでいるという、とてもグロテスクな感じのするお話です。こちらは『いるのいないの』<sup>30</sup>。男の子がおばあちゃんの家で暮らすことになるのですが、その家にはとても大きな梁<sup>はり</sup>があります。梁の上は暗くなっていて、男の子はその陰に何かがいそうだと仰うのです。おばあちゃんは、上なんか見ないんだから、いてもいなくても関係ないと言います。それでも男の子は気になって仕方ない。最後には、梁の暗がりから、恐ろしい顔がうわっと現れるのです。これはトラウマになりますね。子どもは、信頼できる大人と一緒に見れば、「うわっ」と恐ろしく思いながらも楽しめるでしょう。けれども、この本が最初に出たとき、絵本ってなんだろうという問題を感じました。

このシリーズの売れ行きが大変好調だったため、第二弾が出ます。絵は一流の画家を選んでるので、とっても怖いのです。「おばけ話えほん」のような、怖いといってもどこか軽妙なものではなくて、本当に怖いものを作っています。

さらに続いて、妖怪が出れば遠野物語ということで、2016年から「えほん遠野物語」シリーズが出ます。『かっぱ』<sup>31</sup>や『おしらさま』<sup>32</sup>などです。このように、奇妙な世界、不思議な世界の作品が

23 斉藤洋 文、山本孝 絵『本所ななふしぎ』偕成社、2009。

24 杉山亮 文、軽部武宏 絵『のっぺらぼう』(おばけ話絵本 1) ポプラ社、2010。

25 杉山亮 文、軽部武宏 絵『うみぼうず』(おばけ話絵本 2) ポプラ社、2011。

26 杉山亮 文、軽部武宏 絵『かっぱ』(おばけ話絵本 3) ポプラ社、2011。

27 杉山亮 文、加藤休ミ 絵『てんぐ』(おばけ話絵本 4) ポプラ社、2018。

28 宮部みゆき 文、吉田尚令 絵『悪い本』(怪談えほん 1) 岩崎書店、2011。

29 皆川博子 文、宇野亜喜良 絵『マイマイとナイナイ』(怪談えほん 2) 岩崎書店、2011。

30 京極夏彦 文、町田尚子 絵『いるのいないの』(怪談えほん 3) 岩崎書店、2012。

31 柳田国男 原作、京極夏彦 文、北原明日香 絵『かっぱ』(えほん遠野物語) 汐文社、2016。

32 柳田国男 原作、京極夏彦 文、伊野孝行 絵『おしらさま』(えほん遠野物語) 汐文社、2018。

評価されて、次々と出てきています。

このような状況は突然生まれたものなのかというと、そうも言い切れません。やはり時代性なのでしょう。

2015年と2016年に、『別冊太陽』では「こわい絵本」<sup>33</sup>・「あやしい絵本」<sup>34</sup>を特集しています。2年も続けて出ているのですから、このような絵本が好んで読まれ、特集できる時代なのだと思います。一方で、この雑誌を見る限りでは、日本人は昔から怖いものや怪しいものを楽しむ心性があったのだろうということも分かります。特に江戸時代など、妖怪の出てくる物語を好んで、楽しんで読んだ時代でもあったようです。ですから、昔から怖いものを怖がりつつ楽しむという心性は脈々とあり、そして絵本もその心性に合致するようになった時代というのが、2015年頃なのだとと言えるでしょう。

ところで最近、赤羽末吉(1910-1990)の絵本が復刻されています。2016年頃からのことなのですが、復刻された作品を見てみると、日本的で、なおかつ妖怪やかっぱといった不思議なものが登場する作品が多いのです。ですから、赤羽末吉もそういった作品を出していたよという意図なのかもしれません。一方で、かなり高度な技法で描かれている、しっかりした絵本があるんだよという意味もあるのでしょうか。このような状況を見てみると、まだ当分怖い絵本の時代は続くのだろうかと思うのです。一方で、そろそろ収束していくかもしれない、収束してほしい、と私は思っています。

ここまで御覧いただいたように、和テイストの絵本がある時期にどっとあふれるように出版されて、そのすきまを旅するように、怖い絵本やこれまでになかったような絵本が出てきたというのがお分かりいただけたのではないかと思います。

## ② 荒井良二からヨシタケシンスケまで

ここで、和テイストというテーマからは一度離れて、少し視点を変えてみましょう。とても大雑把ですが、この30年というのは、「荒井良二から

ヨシタケシンスケまで」と括ることができるのではないかと思います。

レジュメには、ヨシタケシンスケの言葉を引用しています。ヨシタケシンスケは、元はイラストレーターです。

かつての僕みたいに「絵本が描ける気がしない」という人が、じゃあ何ならできるのかを探ることが絵本の間口を広げるきっかけだろうし、そのすきまがすごく空いている世界のはず。すきまをみんなで探すが、絵本の可能性を広げていくことだと思うんです。<sup>35</sup>

この言葉から、ヨシタケシンスケ自身も絵本作家としてすきまを生きてきたのだろうということが分かります。でも、荒井良二もヨシタケシンスケも、今では大変な人気作家です。荒井良二には『ユックリとジョジョニ』<sup>36</sup>や『バスにのって』<sup>37</sup>などがあります。『バスにのって』は、前々回(平成28年度)の児童文学連続講座でも御紹介しました。この話では、ある人がバスに乗りたくて延々とバスを待っているんです。この人は全然急がないのです。急ぐからバスを待っているわけではないのでしょうか。ラジオからずっと流れている、「トントンパットン トンパットン」という音楽を聞きながら、ずっと待っています。ずっとずっと待って、やっとバスが来ますが、もういっぱいです。するとその人はバスに乗らずに、「あるいておくへいくことに」するのです。

『ユックリとジョジョニ』という作品も、ユックリとジョジョニという二人が出会い、自然の中で楽しく踊り、最後に「また会えるかな 会えるといいな」と言って別れるというお話です。楽しく遊ぶ、満ち足りた空間を描いています。『バスにのって』も、非常にゆったりとしたものを求めるところから作品が始まっているのだと思います。

一方、ヨシタケシンスケの『りんごかもしれない』<sup>38</sup>。これは大ブレイクした作品ですね。ヨシ

35 『Moe』第40巻第1号, 2018.1, p.18.

36 荒井良二作『ユックリとジョジョニ』(イメージの森)ほろぷ出版, 1991.

37 荒井良二作『バスにのって』偕成社, 1992.

33 「こわい絵本」『別冊太陽:日本のこころ』230号, 2015.7.

34 「あやしい絵本」『別冊太陽:日本のこころ』240号, 2016.7.

タケシンスケは、『りんごかもしれない』が出た2013年から5年間でかなりの絵本を出していますが、出る絵本の多くが人気になり、数多くの賞をもらっています。2013年からこの5年は、ヨシタケシンスケの時代と言ってもいいくらいです。子どもたちを対象にした好きな本の人気投票でも、上位に多くの作品が入っています。『りんごかもしれない』は、物事は様々な視点から考えられるよねという、大人にも「ああ、意外!」と思わせる作品です。絵にもたくさん描き込みますので、丁寧に丁寧に見ていく必要があります。子どもは丁寧に丁寧に絵を見ますから、十分楽しめるのでしょ。見方によっては、大人にとっても大変面白い絵本です。これは重要なことだと思います。先ほどもお話ししたとおり、絵本はやはり、大人に関心を持たないと子どもの手に渡りにくいと思います。

大雑把に括りますが、荒井良二から始まってヨシタケシンスケに帰着するまでの中で、何が原点であるかと考えますと、それは究極の自己肯定感だといえます。つまり、「そんなに焦らなくても大丈夫、明日はどうかかなるよ」ということです。こうでなければいけないとか、今これをしなかったら明日は大変だぞとか、そういう世界ではなく、毎日しっかり生きていけば明日は明日の風が吹く、きっと楽しい日が待ってるよということ。ヨシタケシンスケは御本人が大変心配性らしく、これからどうなっちゃうんだろうと考えるようです。そのようにいろいろと考えることが、このように絵本の中に生かされるようです。そうして生まれた「大丈夫だよ」という自己肯定感を、絵本が子どもに届けていく。それがこの30年間の絵本の動きであるかもしれないと思います。そして、これらの絵本は、絵本が子どもっぽくなりすぎることに歯止めをかける効果もあったかもしれません。

さて、ここまで平成の動向を見ましたが、これは、「今振り返ってみるとこんなふうにも読めますよ」というものです。まさにその時代の中で呼吸しているときに、このようなことはあまり考え

ないものです。

## 2. 子どもたちの社会的成長を支える絵本

### ① 絵本のすきまに対して、絵本の王道をどう考えるか

それでは本日の本題に入りましょう。子どもたちと絵本を考えるときに、子どもたちの社会的成長を支える絵本、つまり新しい世代に文化を吸収させ、新たな文化を作り出していくような成長を支える絵本とはどのようなものか、ということについて考えていきたいと思います。冒頭から、平成は絵本のすきまを旅する時代ではなかったかと言っていますが、それでは、絵本の王道とは何かということ。す。

もちろん、絵本のすきまを探することで、絵本の可能性はかなり広がったと思います。ではそのことで子どもたちに何を示せたのか、ということ。を問。い直してみる必要があるのではないかと思います。確かに絵本は面白く、いろいろなことができるということは誰もが分かったと思います。けれども、その絵本が子どもたちに何が残せたのかと考えたときに、皆さんはどう思われますでしょうか。

日本の絵本がすきまを旅していろいろなアイデアを出してきたとして、それでは絵本の王道はどこにあるのかというのを、作品を見ながら考えてみたいと思います。

『としょかんライオン』<sup>39</sup>という本が2007年に出ました。日本の絵本は2003年頃からずっと、和テイスト志向で動いていました。この絵本が翻訳されて出たとき、「ああ、これぞ王道と思える絵本だな」と私は思いました。

この話は、図書館にライオンが来るという話です。「ありえない」「なんで図書館にライオンが？」と思いますよね。でも、表紙からして、ライオンが図書館に非常になじんでいます。私なぜこの話が王道だと思ったかと言いますと、一つには、図書館は誰が来てもいい場所だよというメッセージです。公共のもので、どなたでも御利用いただけますよというのが図書館ですよ。たとえライ

38 ヨシタケシンスケ 作『りんごかもしれない』ブロンズ新社、2013。

39 ミシェル・ヌードセン 文、ケビン・ホークス 絵、福本友美子 訳『としょかんライオン』(海外秀作絵本 17) 岩崎書店、2007。

オンだって、その図書館のルールさえ守れば来ていいんだよというところに、あらゆる人に開かれた図書館であるというのが示されると思うのです。

あらすじはこのようなものです。ある時、図書館にライオンが現れます。それを見つけた司書さん、彼は常識人なので、館長のメリウエザーさんのところに走って行って報告します。「としょかんにライオンがいるんです」と。するとメリウエザーさんは司書さんに、「で、そのライオンは としょかんのきまりを まもらないんですか？」と尋ねます。司書さんが「いえ、べつに そういうわけでは……」と答えると、メリウエザーさんは「それなら そのままにしておきなさい」と言うのです。ライオンだってルールを守れば居ていいじゃないですか、と。メリウエザーさんは徹して大人であって、あたふたしません。つまり、図書館は開かれた場だからルールを守る人は誰でも居ていいのだということを言います。まあ現実ではこうはいきませんね。アレルギーのある方もいますし、衛生面の問題や危険もありますので。でも、ここはファンタジーと子どもたちの理念の世界であって、そういう意味ではとても優れています。

物語の終盤、メリウエザーさんは台から落ちて骨折してしまいます。助けを呼ぼうにも声が届きません。メリウエザーさんを見つけたライオンは、先ほどの司書さんの元に行って助けを求めます。しかし彼はライオンを、騒いじゃいけないんだからねという態度で放っておくのです。大変なことが起こっているのにと、ライオンはうおーっと吠えます。すると彼は「かんちょう！ ライオンが、きまりをまもってません！」と言いつけに行き、そこで骨折しているメリウエザーさんを発見するのです。大声で吠えてしまったライオンは、一度は図書館からいなくなります。しかし物語の最後には、司書さんがライオンに、「あのう、ごぞんじないかもしれませんが、としょかんのきまりが かわったんですよ」「おおごえで ほえてはいけない。ただし、ちゃんとしたわけがあるときは べつ。つまりその、けがをしたともだちを たすけようとするときなど、ってことですかね」と伝えて、ライオンは再び図書館に戻って

くるのです。つまり、ルールは守らなければいけないけれども、人の命に関わること、大変なことが起こったときにはそのルールを逸脱してもいいんだよということも、この絵本は子どもに語っています。それを含めて、この絵本は絵本の王道だなと思ったのです。

王道といわれる絵本の中では、子どもたちにこれからの道標を示すことが考えられています。私たち大人が信じていることをちゃんと伝えられているか、そしてそれは大人の独りよがりにはなっていないか、こうあるべきとかたちに終始していないか、そういうことは常に問い返されなければならない問題です。つまり、王道の絵本は、子どもに媚びることなく語るべきことがしっかり語られていること、子どもが楽しめる上質なユーモアがあること、子どもの心身の発達や言語や認知の発達、自我に寄り添い、子どもの認識の幅を広げてあげられることといった要素があるということです。それから、子どもにとって一つの経験となり得ていることも重要です。『としょかんライオン』のライオンの場合には、図書館は誰もが来ていいんだということを引きちんと伝えていきます。

それから王道の絵本は、奇をてらいすぎてアイデア先行型になっていないことも肝要です。日本の絵本はアイデア先行型になりがちです。そういう意味では、この絵本が日本に紹介されたということには意味があったのでしょうか。しかし、この絵本の登場で、少しは怖い絵本ブームも落ち着くかと思ったら一向に落ち着きません。それとこれとはまた違うのでしょうかね。

このような王道の絵本を取り上げるときに、外国の絵本がまず念頭に上がってしまうという点は、日本の絵本にとって考えなければいけない点ではないかと私は思っています。子どもへの押し付けではないモデルとでも言いましょうか。日本の場合、押しつけることを避けようとしています。そのために、大人は自分たちの生き方を伝えることから逃避してはいないか、ということを考えさせられます。

このことについて私は、戦争が関係しているのではないと思うのです。戦後日本の絵本の世界は、終戦期に少年だった方たちが築いてきました。

終戦の1945年8月15日を境に、それまで軍国主義だった大人たちが180度変わって民主主義になるという衝撃を体験した方たちにとって、大人への不信感は拭えなかったと思うのです。そのような人たちが築いてきた絵本の世界であったということが、日本の絵本の傾向に関係しているのかなと私は思います。この間亡くなった加古里子(1926-2018)もそうですが、そうした方たちが今消えつつあります。代わって、戦後日本の繁栄が起こった高度経済成長期から生きている人たちが絵本の世界を担うようになってきているため、これからこの傾向は変わっていくかもしれません。

いずれにせよ、日本の絵本は、カッコいい大人がなかなか登場しません。メリウェザーさんのような泰然自若とした大人があまりいないと感じています。

その反面、子どもを大変良く描いているというのが、日本の絵本の特徴ではないかと思っています。これは『どーしたどーした』<sup>40</sup>という絵本です。主人公はゼン(全)くんという男の子で、何かあると「どーしたどーした」と聞かすにはいられない子です。追求しすぎてうるさいところはあるのですが、その「どーしたどーした」が、虐待を受けている一人の子どもを救うことになります。一方、ここで描かれる大人たちはどうでしょう。例えばゼンくんが学校に来られない子のことを先生に話すと、先生は、自分には手が付けられないのではないかという態度です。児童相談所の人も、子どものために一生懸命やっているけれど何もできないという無力感があります。このような大人が描かれる一方、カッコいい大人は登場しません。その代わりに、自らのエネルギーと解決力とで、困っている子の苦難を救える子どもを描いているのです。そういう意味では、日本の絵本は、子どもをとっても良く描けていると思います。

## ② 子どもたちと絵本の関係から

レジュメは次の段階に入ります。子どもたちと絵本の関係から、原点を探っていきたいと思います。

### (1) まだ未来の見えない子どもと信頼でむすばれるために―「絆」づくり

まだ未来の見えない子どもと信頼で結ばれるために、大人と子どもの絆づくりに絵本をというところから、絵本と子どもの関係をスタートしています。皆さんはもう御存じかと思いますが、ブックスタートの活動はそのような発想から始まっています。赤ちゃんに無償で絵本を手渡そうという活動です。日本全国で約60%に近い自治体がブックスタートに取り組んでいるようで、とても理解が広まり、深まっている活動です。

子どもたちはこの世界に誕生し、成長していきますが、幼いころはまだ未来という考えがなく、今ここでの現在しか見えないものです。それは、未来を見通すだけの経験の積み重ねがないからです。それでは子どもは何を信頼するかというと、絆なのです。大人と結ばれているはずの絆、それを頼りに子どもたちは未来を志向していきます。きっとこの先こうしてもらえると安心感が、大人との間の信頼関係、絆によって可能になるということがあろうかと思っています。

その点に着目した、子どもと楽しみ、子どもを楽しませるといふ赤ちゃん絵本のブームも、平成という時代の絵本の特徴です。1990年代からの30年間に飛躍的に充実した分野が、赤ちゃん絵本だと思われれます。これは日本の絵本が非常に得意とする分野です。自分の生き方を挟まず、子どもと一緒に、子どもを楽しませるために作る絵本というのは、日本人が得意とするところだと思いますし、そういうところが面白いと思います。幼いころの子どもとの絆づくりということで、一緒に読むこと―開き読みとか、読みあいという言葉も使われますが一から始まります。

同じものを見て同じ時に見て語り合う。これは心理学的に共同注意と呼ばれる現象です。絵本はそのような現象を作り出すことができます。そこから、同じものを見て同じ時に笑うとか、悲しむといったことが可能になります。まだ小さい子どもは、自分では本を読めないで誰かに読んでもらいます。そのときの声や肌の触れ合いといった身体的な接触を、子どもたちは内部に蓄積していくのだと思います。そういったところから絆が培わ

40 天童荒文、荒井良二 絵『どーしたどーした』集英社、2014。

れていきます。

また、小さい子どもは、ゲーム的な要素があると楽しめます。この『だるまさんが』<sup>41</sup>は、大変人気があります。言葉遊びの発想で、だれもが知っているフレーズを使って予想を裏切ります。「だるまさんが」のあと、「ころんだ」というはずのところで「どてっ」とこける。この「どてっ」が楽しめる。こういうものを、「これだね」、「あれだね」と指さしながら、楽しんで読んでいくのです。

## (2) 葛藤を抱える幼い子どもたちとともに一しつけ・基本的な生活習慣、人間関係のはじまり

子どもがもう少し成長すると、幼い子なりに葛藤を抱える時期を迎えます。これはしつけ、つまり基本的な生活習慣、文化を育てるということです。トイレトレーニングや断乳、箸やスプーンを持って御飯を食べることなど、本当に基本的なことです。しかし、これは子どもの意思と反することがままあります。いつまでも起きていたいのに寝なさいと言われるとか。嫌なことでも必要ならば強いていく、人間関係のはじまりです。このしつけは、赤ちゃんの頃に信頼関係が結ばれていることで可能になり、そして子どもの未来への思考力・創造力を育てることもつながります。

この『ティッチ』<sup>42</sup>は、かなり昔の作品です。三人兄弟の末っ子のティッチは何をやってもお兄さんお姉さんにかないません。けれど、この表紙に描かれた植物の苗を植えようとしたとき、種はティッチが持っていました。一番大事なものを一番小さい子が持っていて、それが大成功につながったのです。そういうことを、小さい子どもたちが絵本で経験することによって、自分は小さいけれども大丈夫ということを学びます。実際の経験ではありませんが、代わりに第三者的に、理性的に経験することができます。幼児期は自分を振り返ることがまだ苦手な成長段階ですけれど、そういうときに絵本の中で、他の子がやっていることを見て、自分のことが分かるということもあるのです。

41 加岳井広 作『だるまさんが』ブロンズ新社, 2008.

42 パット・ハッチンス 作, 石井桃子 訳『ティッチ』福音館書店, 1975.

これは『ピーターのいす』<sup>43</sup>と『フランシスのいえ』<sup>44</sup>です。下の子が生まれたときの葛藤を描いています。親は下の子ばかりに構って、自分のことを構ってくれない。今まで自分が独り占めしてきた愛情を、二分しなければいけません。そのことを受け入れるときに、お兄さんお姉さんになった自分の成長に気付けるということを描いています。かなり古典的な絵本ですが、いい作品ですよ。これも絵本の王道の一つかと思います。

## (3) 子どもの成長にひそむ大切なワイルドさと想像力—自分の回りの環境を、コントロールしていく力をつける

同じく子どもたちの成長に潜む大切なこととして、ワイルドさと想像力があります。子どもたちの体や心の中にはワイルドな感覚があるのです。私たち大人はそれをなるべくなだめて、コントロールしながら生きていきます。けれど、人間が本質的に持っているこのワイルドさは、生きるエネルギーに直結した、大事なものだと思います。人間が成長していくうえで無駄なものは一つもなく、その時期にはその時期に必要なものが備えられており、それを経験して成長していきます。例えば反抗期や人見知りは、人に対して否定的な行動に見えますが、それをクリアすることによって成長していかなければいけません。そう考えると、やはり反抗期はとても重要なもので、その反抗的な感情をコントロールする力をいかに付けていくか、ということが必要になるのです。そのように自分自身や身の周りの環境をコントロールしていく力を付けるうえで、第三者的で理性的な経験ができる絵本の世界だからこそ、見えてくるものがあるのです。

『かいじゅうたちのいるところ』<sup>45</sup>や『おしいれのぼうけん』<sup>46</sup>が代表的ですが、これらは心の闇を抜ける手段として、ファンタジーが重要視されて

43 エズラ・ジャック・キーツ 作, 木島始 訳『ピーターのいす』(新訳えほん 1) 偕成社, 1969.

44 ラッセル・ホーバン 文, リリアン・ホーバン 絵, 松岡享子 訳『フランシスのいえ』日本パブリッシング, 1971.

45 モーリス・センダック 作, 神宮輝夫 訳『かいじゅうたちのいるところ』富山房, 1975.

46 古田足日 文, 田畑精一 絵『おしいれのぼうけん』(絵本・ぼくたちこどもだ 1) 童心社, 1974.

いる作品です。現実の世界では乗り越えられない壁があったときに、ファンタジーの世界を経験することで乗り越えていくのです。

ファンタジーの世界では、現実の世界では起こりえないことが起こります。先ほどの『としょかんライオン』、現実の図書館でライオンがいたら大変なことになりますが、絵本の中であればライオンに温かい感じがします。そのように、絵本の世界だからこそ経験できることがあります。子どもが生きている日常の現実と、非日常の虚構が交差する視点での経験は、想像力を養い、壁を越えさせてくれます。今ここで荒れ狂っていても、もうちょっと先に行くと大丈夫になる、という経験が絵本の中でできるのではないかと思います。

私たちも、現実を乗り越えられないときには、演劇を見たり、文学を読んだりして、いつしか自分の心を開放して、現実の苦しみを越えていきますよね。子どもたちにとって、絵本はそのような一つの助けになるだろうと私は考えています。ですから、心の中の葛藤を克服して成長していく、そのときの充実感や解放感を絵本で共有していくことがあろうかと思えます。

#### (4) 子どもが実感する自己の成長の喜び—自立への憧れと自立できたときの充足感

もう一つ、子どもが実感する「成長の喜び」というものがあります。子どもはいつでも自立への憧れを持っています。助けてもらわなくても大丈夫、大人のようにできるということが憧れなのです。自分だけで何かできたときの充足感はとても大きくて、それを邪魔しないようにするというのは、お母さんたちの一つの課題です。自分で困難を克服したときの充実感を十分に味わわせてあげるといのは、大人にこそできることだろうと思えます。

「成長の喜び」というのは、泳げるようになったり、嫌いなものを食べられるようになったりといった、大人から見れば些細なことです。でも、自分の日常が輝いて見える、子どもたちの成長には欠かせないものだと思うのです。絵本は、子どもが自分自身の「成長の喜び」を見つめる糸口を提供してくれます。

この分野で挙げられるのが、『はじめてのおつかい』<sup>47</sup>です。大変にこやかな表紙です。主人公のみいちゃんが、一人で牛乳を買えたよという他愛もない、でもとても大事な「自分だけの力でできたよ」というお話です。途中で転んでしましますが、そのようなことを乗り越えた自立が、大人の見守り（お母さんが迎えに来てくれるのです）の中に成り立っているというのが、この絵本が温かい気持ちを子どもたちに与えられる鍵です。そして最後、裏表紙では、お母さんはみいちゃんに牛乳をあげて、転んでしまった膝にばんそうこうを貼ってくれます。信頼できる大人がいつもそばにいる、でも一人でできるよというお話かと思うのです。

これも同じような本で『ちいさなヒッポ』<sup>48</sup>です。ヒッポはまだうまく話せないので、ワニに襲われたときにも、なかなか叫べません。けれども、「お母さん、ここだよ」と叫ぼうとする。そしてお母さんが助けに来てくれます。『モチモチの木』<sup>49</sup>も、怖さを克服したときに子どもの成長があるということを語っています。このような絵本はたくさんあります。

#### (5) 社会的現実と向き合う子ども

次に、社会と向き合っていくということについて考えたいと思います。子どもは、最初はお母さんや家族、身の回りの人たちとの間で信頼関係を築いていきます。それがしっかり出来た後、子どもたちは社会に目を向けて、社会的な現実と向き合っていきます。

一番小さい社会は家族です。子どもにとって、お母さんと自分が一番小さい人間関係です。お母さんは自分たちの文化を分かりやすく丁寧に、そして繰り返し子どもに与えていきます。ツバメのお父さんやお母さんがヒナに餌を与えるように、「危険から身を守る」といった、社会で生きていく上で自分たちに必要なことを教えます。そして、そんな幼児期を過ぎると、今度は集団に入ってい

47 筒井頼子 文、林明子 絵『はじめてのおつかい』福音館書店、1977。

48 マーシャ・ブラウン 作、内田莉紗子 訳『ちいさなヒッポ』偕成社、1983。

49 斎藤隆介 文、滝平二郎 絵『モチモチの木』岩崎書店、1971。



きます。集団生活は3歳くらいからが望ましいのではないかといわれた時代もありますが、今は子どもが0歳の頃から母親が働きますので、そのころから集団生活を経験します。子どもは仲間集団の中で社会を知っていきます。これは子どもたちにとってはとても愉快で楽しいことでもあり、厳しいことでもあります。相手は自分と対等なものですから、対等な者同士でやりあっていかなければなりません。ですが、子どもは子どもが、仲間がとっても好きです。子どもは、成長するに従って、子ども同士の社会、大人との社会に目を向けるようになっていきます。

『しょうぼうじどうしゃじぶた』<sup>50</sup>は絵本の古典で、今でも子どもをひきつける作品の一つです。自動車は時代と共にデザインを変えていきますから、今はこんなに古い形の車はありませんが、象徴性があるのです。仲間の中で一番未熟でみんなから相手にされなかった自分が、小さいからこそ山火事的时候には狭い山道を登れて、一番役に立ったという話です。じぶたが仲間の中で役に立つ自分というのを知っていくとき、子どもは身を乗り出して話を聞きます。「そんな自動車見たことないよ」なんて言わず、「じぶたはどうなるの」と興味津々で見えています。この絵本自体も本当に優れた古典ですが、やはり子どもたちも、言わんとしていることを受け止めることができるのです。それは、デザインや絵本の絵の古さや新しさにかかわらず、吸収できるということです。

これは、中屋美和の『くれよんのくろくん』<sup>51</sup>です。黒以外の色は、緑なら木の葉っぱ、ピンクならきれいな花、茶色なら地面や茎、水色なら空になるといったように、肯定的なイメージがあります。一つの絵を描くときにも、自分はみんなの役に立っていると思えるのです。でも、黒だけは、塗ると真っ黒になってしまいます。だからくろくんは役に立たないと思われて、仲間外れになりそうになるのです。

このお話を聞いているとき、子どもたちは、も

う目をばちばちさせて集中します。仲間外れにされること、仲間に入れない子がいるということは、子どもたちにとって、とても大変なことなのです。以前、大学院生と一緒に保育園に読み聞かせに行ったときに、そのことが分かりました。そのときは絵本の好きな子だけが集まってきて、絵本の読み聞かせをしていて、周りでは他の子たちが他のことをして遊んでいました。それが、このシーンになると、周りの子たちが一斉に集まってきて、そのまま真剣に聞いていたのです。どうなるんだろうって。

結局くろくんは、他のみんなが塗った上を真っ黒く塗りつぶして、ひっかき絵（スクラッチ技法の絵）を作ります。黒くてもみんなを輝かせることができるということで、めでたしめでたしと終わります。仲間外れにされる子がいるというのは、子どもにとっては大変なことなのでしょう。そういう意味では、子どもの心理をととてもよく捉えた絵本だと思います。子どもは、友達との関係の中で、楽しいとか嬉しいとか、悲しいといった感情を培っていくのだと思うのです。

もう一つの社会として、家庭があります。子どもは良くも悪くも、大人の社会に巻き込まれていきます。子どもの世界だけで純粋培養というわけにはいかないのです。大人の事情によって、子どもの生活は支配されています。なので、家庭での問題というかたちで、社会の矛盾と向き合わなければならない、ということも起こってきます。

親の貧困や離婚というのは大きい問題です。貧困の場合には、子どもは、他と比べないといいますが、世界はそういうものなのだと思います。それで乗り越えていけるということもままあります。しかし親の離婚は厳しいです。仲良くしていた親が日々いがみ合うようになって、その果てに離婚するのですから。多くの子どもは、二人のけんかの原因は自分だと思って自分を責めるのだそうです。実際の原因が浮気だったりしてもです。子どもは家庭の問題から、社会の矛盾や社会的な差別といった、いろいろな社会を垣間見していきます。

お見せしているのは『すきですゴリラ』<sup>52</sup>と『パパのカノジョ』<sup>53</sup>です。この2作は海外のもの

50 渡辺茂男 文、山本忠敬 絵『しょうぼうじどうしゃじぶた』（こどものとも>傑作集 22）福音館書店、1966。

51 中屋美和 作『くれよんのくろくん』（絵本・こどものひろば）童心社、2001。

です。社会に子どもが目を開いていくときにいい題材になると思う絵本は、やはり海外のものが多いいのです。しっかり社会に目を向けているという姿勢があるのではないかなと思います。

この『すきですゴリラ』は父子家庭のお話です。お母さんがなぜいないかは分からないのですが、お父さんは働くのに忙しくて、主人公のハナを育ててはいるけれど顧みることができないのです。ハナはゴリラのプロマイドや絵本を持っているくらいゴリラが好きなのですが、誕生日の前日の夜、お父さんから、ゴリラの人形をプレゼントされます。でもハナは、本当はゴリラの人形が欲しかったのではなく、ゴリラと出会いたかったのです。するとその夜—ファンタジーの世界で、夜は本当に面白いことが起こるので—ゴリラが訪ねて来ます。ハナとゴリラは動物園へ行き、チンパンジーやオランウータンなどいろいろなサルたちに出会います。そして一緒に映画に行き、食事をし、夜にはダンスをし、ハナは満足して帰ってきます。そうすると次の朝、お父さんがハナを動物園に誘ってくれるというところでこのお話は終わります。子どもが成長していくときに味わわなくてもいいような、辛い経験や孤独を、ファンタジーを使いながらうまく描いています。

一方『パパのカノジョ』のパパは大変な浮気者で、ママと離婚してからも次々にいろいろな女性を連れてきます。主人公の女の子は、パパが新しく連れてきたこの人をママとは呼ばず、「パパのカノジョ」としか呼びません。でも最後には、「ちょっといいセンいってるかもね」と言って、パパのカノジョはこの少女のお気に入りになります。というのは、カノジョはいちいちうるさく言わないのです。ずっと自分のことを見守ってくれます。泣きたいときは泣いていいんだよとか、ちゃんと片付けるならうんと散らかしていいよと言ってくれる。大人なんですよね。ちょっと変わっている人なのですが、そうやって絆ができていきます。これはアメリカならではのお話ではな

いでしょうか。お母さんが代わる代わる現れる、現代的といえば現代的な話です。でも、この子はカノジョと絆を作っていきます。大人らしい大人が出てくる話です。

さらに成長して小学校高学年くらいになる頃、子どもたちは広い世界、大人が活躍している世界へと目を開いていきます。そのときに、人は、社会はどうあるべきか、みんなが幸せになるとはどういうことか、正義とは、人権とは、そういう意識に目覚めていきます。これは子どもの成長発達段階として必ず訪れるものです。自分をコントロールでき、周りの環境もある程度コントロールができるようになると、やおら、大人の世界に目が向けられていきます。その頃が、社会を扱った絵本の出番というわけです。

これも海外のものですが、『ローザ』<sup>54</sup>は人権運動を推進した黒人の女性の生涯を扱った絵本です。ピューリッツァー賞受賞作家であるアリス・ウォーカーは、『なぜ戦争はよくないか』<sup>55</sup>という絵本を書いています。なぜ戦争はよくないのか。なぜだと思いませんか。一番大人が問い返していかなければいけない問題が、ここにあると私は思います。

そこで、戦争に関する絵本を集めてみました。『おとうさんのちず』<sup>56</sup>では、主人公一家は戦争で難民になり、着の身着のままに戦地を抜け出していきます。その日の食べるものもない中、お父さんは市場に行って、パンではなく世界地図を買ってくるのです。その世界地図を広げて、主人公は世界に夢をはせるのです。想像力が人間の精神を育てるということを、象徴的に描いています。今の自分があるのは、お父さんがあの苦しい時に一握りのパンでなく、世界を見せてくれた、その想像力が支えとなっているからだという話です。

『エリカ奇跡のいのち』<sup>57</sup>は、ナチの収容所に送られたユダヤ人の物語です。収容所に向かう列車

52 アントニー・ブラウン 作、山下明生 訳『すきですゴリラ』（あかねせかいの本）あかね書房、1985。

53 ジャニス・レヴィ 文、クリス・モンロー 絵、もん 訳『パパのカノジョ』岩崎書店、2002。

54 ニッキー・ジョヴァンニ 文、ブライアン・コリアー 絵、さくまゆみこ 訳『ローザ』光村教育図書、2007。

55 アリス・ウォーカー 文、ステファーン・ヴィタール 絵、長田弘 訳『なぜ戦争はよくないか』偕成社、2008。

56 ユリ・シュルヴィッツ 作、さくまゆみこ 訳『おとうさんのちず』あすなろ書房、2009。

57 ルース・バンダー・ジー 文、ロベルト・インノチェンティ 絵、柳田邦男 訳『エリカ奇跡のいのち』講談社、2004。

の窓から、赤ちゃんを投げて逃がすのです。そうして投げられた女の子を近くにいた人が拾って、エリカと名付けて育てます。ですから、エリカは本当のお父さんお母さんのことを知りません。そういったユダヤの人種差別の問題や、戦争の悲惨さを扱っています。

『タケノコごはん』<sup>58</sup>は、大島渚(1932-2013)が、自分の子どもの代わりに宿題の作文を書いて、それがとてもよく書けていたため絵本になったというものです。これも戦争の体験を描いています。主人公の男の子が、学校の先生が次々召集されていくときに、「なんで行くんだ」と思うのですね。おそらくこの主人公と同じような少年時代を過ごした子たちが、戦後の日本の絵本を支えた人たちと同じ世代で、同じ思いだったと思うのです。自分自身は戦争に行かなかったから戦地の悲惨さは体験していないけれど、内地にいてとことん飢えに苦しみ、戦争がいかに大事な人を奪うかということを体験した子どもたち。その子たちがとてもよく書いているものだと思います。

#### (6) 子どもの身の回りの自然への気づきと関心

さて、科学絵本がすごく発展し、充実してきているという話を先にしました。そこで、ノンフィクションの分野も御紹介したいと思います。

これは「世界のともだち」シリーズの『ルーマニア』<sup>59</sup>です。このシリーズは2013年から出ています。ある国のある子どもを主人公にして、その子の生活を描くことによって、その国がいかなる国で、そこで子どもたちがどんな生活をしているかといったことを学んでいく絵本です。

こちらは『これから戦場に向かいます』<sup>60</sup>。作者の山本美香(1967-2012)はジャーナリストで、戦場で散った女性のカメラマンです。その彼女の遺した写真を構成して、絵本に仕立てたものです。「これから戦場に向かいます」ということで、写真の中には戦地の子どもたちの笑顔がたくさん写し込まれています。他の絵本と比べて対象年齢は上

がると思いますが、戦争は結局大事なものを奪うんだということが分かる絵本になっています。

ここからは科学絵本の発展についてです。子どもの身の回りの自然に気づきと関心を開いていくのが、最近の科学絵本の傾向だと私は考えています。もちろん科学絵本は昔からありますし、日本にはとても腕の良いカメラマンがたくさんいるので、科学現象を写真で捉えた絵本が数多くあります。写真はそのままのものを写すので、間違いや嘘はないのですが、たくさんの情報をいっぺんに写し込んでしまいますから、本当に言いたいことを抽出するのがなかなか難しいのです。

ですから、あえて写真ではなく絵に描くことによって、大切な部分を子どもたちに伝えることができるということです。

今、子どもの科学する心を育てる絵本、つまり、「不思議だね、どうして?」とか、「知りたい」「分かってほしい」という気持ちに応える絵本が続々と刊行されています。それらが特徴的なのは、単に知識を伝えるということが優先されるのではなく、理解しやすさを志向して物語のような形をとっているということです。単に子どもたちを知識の世界へ誘うだけではなく、自然を物語として語るようになっていきます。このような絵本でこそ、日本の絵本作家たちは、命のことや、今我々がしなければならないことなどを堂々と語るができるのです。自分を外したところで、生命の不思議さや、命は大事にしなければいけないということ、自然の物語を通じて語るのです。

この分野で最近注目されているのが、荒井真紀です。『たんぼぼ』<sup>61</sup>でプラティスラヴァ世界絵本原画展の「金のりんご賞」を受賞しました。今お見せしている『あさがお』<sup>62</sup>はデビュー作ですが、大変美しい絵本に仕上がっていると思います。多分長い長い時間をかけて一作の絵本を描くのだろうと思います。

『稲と日本人』<sup>63</sup>は、甲斐信枝の作品です。長い間、雑草を描き続けている画家です。これも物語仕立てです。イネというものを表現するために、

58 大島渚 文、伊藤秀男 絵『タケノコごはん』ポプラ社、2015。

59 長倉洋海 作『ルーマニア：アナ・マリアの手づくり生活』(世界のともだち 01) 偕成社、2013。

60 山本美香 作『これから戦場に向かいます』ポプラ社、2016。

61 荒井真紀 作『たんぼぼ』金の星社、2015。

62 荒井真紀 作『あさがお』金の星社、2011。

63 甲斐信枝 作、佐藤洋一郎 監修『稲と日本人』福音館書店、2015。

イネと日本人の生活を共に語っています。

これは『つちはんみょう』<sup>64</sup>です。ものすごく精緻な絵です。写真以上に正確なのではないかという印象すら受けます。作者の館野鴻は、ツチハンミョウという昆虫を卵から育て、スケッチして、この絵本を作ったそうです。中身を見てみましょう。写真でこのような絵を撮ろうとしても、ツチハンミョウがこんなに都合よく他の虫たちとコンビネーションを組んだり、一緒に花に群がったりといった場面を撮ることは難しいでしょう。一日粘ったって一匹出会えるかどうかでしょう。このように絶妙な場面を切り取った絵本は、描くからこそできるものです。このようにして描くと、他の昆虫や植物と比較してツチハンミョウがどれくらい大きいかということも分かります。物語仕立てになっていて、考えながら読むことができるように工夫されています。これはよくできた絵本だなと私は思います。

『ちいさなちいさな めにみえないびせいぶつのせかい』<sup>65</sup>は、微生物の世界、目に見えない世界を視覚化して描いています。この本が日本で出版された翌年の2015年、大村智さんが微生物に関係する研究でノーベル賞を受賞されたので、当時大変タイムリーだなと思いました。

これは『すっぱりめがね』<sup>66</sup>です。断面図を描いた絵本です。これらの絵本を見ると、ものすごい描き手が絵本の世界に現れている、ということがお分かりいただけると思います。荒井良二やヨシタケシンスケのような、デフォルメされた柔らかい絵で描くのが得意な作家がいる一方で、最近では荒井真紀や館野鴻のような、細部まで精緻に描き込むのが得意な作家が増えています。この『すっぱりめがね』は、作者の藤村賢志の高い技術力もさることながら、ピアノや車やボールなど様々なものを見ていった最後に、それら全てが一軒の家の中にあつたということが明かされます。家の中のどこかをクローズアップし、焦点を当てて断面図を描いているのです。ですから、「ラー

メンってきつこう見えるよ」というだけでなく、「みんなも、うちでラーメン食べるでしょ。あのラーメンってこう見えるんだよ」という物語の中で描かれているということで、そこが面白いところだと思って注目しています。

### 3. 総括—絵本と子どもの原点にかえて

きて、総括に入りたいと思います。今日は絵本と子どもの原点に戻るというのがテーマです。私は、「この世は生きるに値する」と子どもに語り伝えるものが、絵本と子どもの原点であろうと思います。この世にはいろいろな問題がありますが、とにかく「生きる」ということ、この世は明日を生きるということに値するものだということ、絵本で語る事ができればと思います。

絵本の特徴として、繰り返し読まれて、子どもの心に大切なことを蓄積していけるメディアであるということがあります。絵本は物語を持っています。先ほど、現実の壁を乗り越えるためにはファンタジーが重要な役割を果たすという話をしました。物語は、象徴的な概念や、こうあってほしいという理想、こうだよねという現実を語り、子どもたちの理解を促す力を持っています。その物語を通して語る事ができるというのは絵本の持つ大きな力だと思うのです。

また、絵本は体験となります。主人公と共にした想像上の経験は、現実での経験と同じように、体験になり得るのです。現実でライオンと出会ったわけではなくても、絵本を通してライオンに出会った気分になれるということは、自分の体験を客観的に捉えることにもつながるかと思います。

今後日本の絵本の課題になっていくのではないかと思うのは、子どもが生きる上でのモデルを提示できているかということです。現在の日本の絵本は、自分が生きる上での文化の様相、規範、その社会が良しとする価値観を分かりやすく伝えていますが、じゃあどう大人になっていけばよいのかという、モデルを示せるような絵本が、今後の日本の絵本に望まれるのではないかと思います。

一方、絵本は大事なことを伝えるものでもありますが、まずは子どもに楽しんでもらうものでな

64 館野鴻 作『つちはんみょう』偕成社、2016。

65 ニコラ・デイビス 文、エミリー・サットン 絵、越智典子 訳、出川洋介 監修『ちいさなちいさな：めにみえないびせいぶつのせかい』ゴブリン書房、2014。

66 藤村賢志 作『すっぱりめがね』教育画劇、2017。

ければなりません。これは日本の絵本の得意とするところ。子どもたちに生きる喜びや幸福な時間を届けるのが絵本である、ということです。絵本からはいろいろなことを学べますが、まずは

子どもたちの心を開放し、子どもたちが楽しかったと思える、それが絵本であろうかと思えます。絵本の原点はそこにあるのではないかと思うのです。

## 「子どもと文化を架け渡す絵本」紹介資料リスト

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
1	かさじぞう	広松由希子 ぶん, 松成真理子 え	岩崎書店, 2009	Y17-N10-J55
2	ももたろう	山下明生 文, 加藤休ミ 絵	あかね書房, 2009	Y17-N09-J1150
3	はなさかじいさん	舟崎克彦 文, 土屋富士夫 絵	小学館, 2009.	Y17-N09-J476
4	ばけものつかい：落語絵本	川端誠 [著]	クレヨンハウス, 1994	Y18-9699
5	ねぎぼうずのあさたろう その1	飯野和好 作	福音館書店, 1999	Y17-M99-1344
6	仮名手本忠臣蔵	橋本治 文, 岡田嘉夫 絵	ポプラ社, 2003	Y8-N03-H1023
7	がまの油	齋藤孝 文, 長谷川義史 絵	ほるぶ出版, 2005	Y17-N05-H119
8	ごびらっふの独白	草野心平 詩, いちかわなつこ 絵, 齋藤孝 編	ほるぶ出版, 2007	Y17-N07-H422
9	ぶす：附子	もとしたいづみ 文, ささめやゆき 絵	講談社, 2007	Y17-N07-H713
10	ぶす	内田麟太郎 文, 長谷川義史 絵	ポプラ社, 2007	Y17-N08-J140
11	権大納言とおどるきのこ：今昔物語絵本	ほりかわりまこ 作	偕成社, 2009	Y17-N09-J1025
12	本所ななふしぎ	斉藤洋 文, 山本孝 絵	偕成社, 2009	Y17-N09-J803
13	のっぺらぼう	杉山亮 作, 軽部武宏 絵	ポプラ社, 2010	Y17-N10-J684
14	悪い本	宮部みゆき 作, 吉田尚令 絵	岩崎書店, 2011	Y17-N11-J1016
15	いるのいないの	京極夏彦 作, 町田尚子 絵	岩崎書店, 2012	Y17-N12-J193
16	ことりぞ	京極夏彦 作, 山科理絵 絵	岩崎書店, 2015	Y17-N15-L245
17	かっぱ	柳田国男 原作, 京極夏彦 文, 北原明日香 絵	汐文社, 2016	Y2-N16-L228
18	バスにのって	荒井良二 作・絵	偕成社, 1992	Y18-6719
19	りんごかもしれない	ヨシタケシンスケ 作	ブロンズ新社, 2013	Y17-N13-L351

子どもと文化を架け渡す絵本

20	としょかんライオン	ミシェル・ヌードセン さく, ケビン・ホークス え, 福本友美子 やく	岩崎書店, 2007	Y18-N07-H116
21	こちょこちょこちょ	うちだりんたろう, ながのひでこ 作	童心社, 1996	Y17-M97-25
22	だるまさんが	かがくいひろし さく	ブロンズ新社, 2008	Y17-N08-J88
23	パパのカノジョは	ジャンヌ・レヴィ 作, クリス・モンロー 絵, もん 訳	岩崎書店, 2002	Y18-N02-72
24	ローザ	ニッキ・ジョヴァンニ 文, プライアン・コリアー 絵, さくまゆみこ 訳	光村教育図書, 2007	Y3-N07-H51
25	おとうさんのちず	ユリ・シュルヴィッツ 作, さくまゆみこ 訳	あすなる書房, 2009	Y18-N09-J186
26	あさがお	荒井真紀 文・絵	金の星社, 2011	Y11-N11-J349
27	つちはんみょう = OIL BEETLE	舘野鴻 作/絵	偕成社, 2016	Y11-N16-L274
28	すっぱりめがね	藤村賢志 作	教育画劇, 2017	Y17-N17-L880
29	いろいろいっぱい : ちぎゅうのさ まざまないきもの	ニコラ・デイビス 文, エミリー・サットン 絵, 越智典子 訳	ゴブリン書房, 2017	Y11-N17-L122
30	どーしたどーした	天童荒太 文, 荒井良二 絵	集英社, 2014	Y8-N14-L102

レジュメ

## 自然と自然史に興味をもつきっかけを作ってくれる絵本

真鍋 真

自然や博物館が好きな大人たちの原点に、絵本が大きな役割を果たしていることがある（真鍋, 2017; 阿部, 2015）。長く読み継がれてきたロングセラー絵本の中には、科学の進歩とともに内容が古くなってしまっているものもある。「せいめいのれきし」（パートン, 1964）の50年ぶりの改訂版づくりに参加した経験などから、絵本と自然科学の付き合い方について考えてみたい。

### 1. 「せいめいのれきし」

「せいめいのれきし」はバージニア・リー・パートンによる原書が1962年にアメリカで出版され、日本版は1964年に石井桃子の訳で岩波書店から出版された。筆者が子供の時に大好きだった絵本の一つである。46億年の地球の歴史における生物進化を、5幕34場の絵と文章で、化石という形でその存在が記録されている生物たちが、地球という舞台の上で演じるお芝居のような構成になっている。

日本版の出版から50年経ち、恐竜など古生物学や地球科学の最新の知見に照らし合わせると、古くて、正しくない内容が含まれてしまうようになった。2009年にアメリカで文章を加筆修正した、Updated Volumeが発行されていることから、日本語版も文章だけを最低限に修正することになり、筆者が監修することになった。筆者は当初、一つの作品である「せいめいのれきし」を、後世の第三者が加筆修正するよりも、新しい絵本を作った方が良いと考えていた。しかし、ロングセラーであることは世代を越えて、読書体験を共有してきた歴史がある。親から子へ、孫へと絵本を読みつぐ、共有するという行為は、ロングセラーでないと作り出せない価値である。

### 2. 「せいめいのれきし」との付き合い方

「せいめいのれきし」は、絵巻物のような書籍で、そのあらすじを簡潔にまとめるのが難しい本でもある。絵に比べて文章が難しいので、(1) 絵を見て楽しむ、(2) 絵と文章を楽しむ、(3) 具体的な登場生物を図鑑や他の書籍で調べて楽しむなど、年齢や発達に応じて、多様な活用方法が考えられる。(3) では図鑑やほかの書籍を参照する活動にもつながる。(1)、(2) と進むのが一般的だが、(2) に行く前に(1) から(3) に進むこともあるだろう。巻末の博物館の見取図で遊ぶ子どももいる。各自の成長によって、異なった付き合い方がある。解説本（真鍋, 2017）やほかの絵本を読むことによって、「せいめいのれきし」の中で語られた進化の物語が理解しやすくなる、多角的に理解できるようになるという効果が実感できる作品である。

### 3. 子どもたちが自然と自然の歴史に興味をもつきっかけを作ってくれる本

「せいめいのれきし」が地球を舞台に登場人物を時代ごとに紹介していくのに対して、地球上の生物がみな一つの起源を持つことを伝えるために、生命の歴史を振り返るように解説しているのが「いのちのひろがり」（中村, 2017）である。現行の学習指導要領ではDNAは中学校の学習内容である



ため（挾間, 2016）、本書には DNA という単語は出てこない。しかし、地球上の動物、植物、菌類はすべて DNA をもっていることから、地球上の生物は共通の祖先をもっていたと考えられることを補足しても良いだろう。出血した時に、自分の血をなめたら塩っぱかったという経験をしたことはないだろうか。「ながいながい骨の旅」（松田, 2017）では、魚から両生類を経て、上陸に成功した私たちの祖先だが、私たちの骨は陸上で重い体を支えるとともに、骨髄の中で血を作る役割を担っている。血液の中の血漿は海水の成分に近いことから、塩っぱさを感じさせている。海水はナトリウム、マグネシウム、カリウムなどで構成されているが、血の中にナトリウムやカリウム、骨の中にマグネシウムを持つことによって、陸上生活する私たちも、体の中に海を持ち続けていると本書は説明する。血漿など血の成分も中学校での学習内容だが（挾間, 2016）、本書を使って一足先に解説をすることも選択肢だろう。「Grandmother Fish」（Tweet, 2016）のように、魚から私たち哺乳類への進化のつながりを時間軸だけでなく、系統樹をたどるように理解することは、自然科学的な思考として重要な経験になるだろう。

引用文献：

阿部彩子, 2015. 解説：「信念」を「科学」に変える. in 阿部豊著「生命の星の条件を探る」, 文藝春秋: 232-238p.

挾間章博, 2016. 学校で人体について何を教えているか. 日本生理学会誌, 78(2): 35-40p.

バートン, バージニア・リー（石井桃子訳）, 1964. せいめいのれきし. 岩波書店: 77p.

中村桂子, 2017. いのちのひろがり（松岡達英・絵）. 福音館書店：42p.

松田素子, 2017. ながいながい骨の旅（川上和生・絵）. 講談社：36p.

真鍋 真, 2017. 深読み!絵本「せいめいのれきし」. 岩波科学ライブラリー, 260: 114p.

Tweet, Jonathan, 2016. Grandmother fish (illustrated by Karen Lewis). A Feiwell and Friends Book: 40p.

# 自然と自然史に興味をもつ きっかけを作ってくれる絵本

## 真鍋 真



### 1. はじめに

『せいめいのれきし』<sup>1</sup><sup>2</sup>については、皆さんもよく御存じかと思います。私よりも読み込んでいる方がいらっしゃるかもしれません。

私とこの絵本の出会いは子どもの頃です。一生懸命に絵を見て喜んでいた子ども時代を過ごしました。

2014年でしょうか、岩波書店の方がいらして、こんなことを言われました。「『せいめいのれきし』に書かれている内容や記述は、サイエンスの進歩とともにどんどん古くなっている。そのため、学校の先生や図書館の司書さんの中では、これを学習用の教材として子どもたちに薦めるのに抵抗があるらしく、貸出しを積極的に行わない図書館や学校もあるようだ。このままでは長く読み継がれてきたロングセラーの絵本がもったいないので、必要最低限のところだけを修正して、改訂版として出版したいので手伝ってくれないか」と。この本の作者のバージニア・リー・バートン (Virginia Lee Burton, 1909-1968) も、日本語版の翻訳者の石井桃子 (1907-2008) も、もう亡くなっています。そのような著作物に後から手を入れるのは、たとえ修正であっても私にとっては非常に抵抗があることでした。けれども、このままだとせっかくのロングセラーの本がだんだん読み継がれなくなってしまうかもしれないというのは残念でしたので、じゃあ最低限の修正を試みましょうということで作業を始め、2015年にこの改訂版が出ました。

実際にこの本を何十年ぶりに広げて、ショックだったことがあるんです。この本は文章が多くて、難しい内容が書いてあります。勉強嫌いだった私がこんなものを一生懸命読んでいたはずはないと、すぐに分かりました。私はこの本を読んだつもりでいたけれど、実際には絵だけを見てパラパラめくって読んだ気になっていたんじゃないかと分かったのです。しかし考えてみれば、文章は読めないけれども絵を見ながらいろいろなことを知りたいというお子さんも当然いらっしゃるんじゃないかと思います。それだけ幅広い年齢層で楽しめる本ということですね。ですから、今回の『せいめいのれきし』の改訂版は、必要最低限の修正で、読者の方がどんな目的・年齢であっても手に取っていただけるものにしようということを意識しました。

ちなみに、2018年はバージニア・リー・バートン没後50年ということで、『ちいさいおうち』<sup>3</sup>や『せいめいのれきし』等のフェアやイベント、講演会等が開催されています。

### 2. 『せいめいのれきし』を読む

それでは、さっそく『せいめいのれきし』を見てみましょう。

『せいめいのれきし』は、挿絵に描かれたシアターでお話が展開します。今日皆さんがお集まりくださっているように、シアターに席があり、子どもたちやその家族が、舞台を見ているという設定の絵本です。

プロローグでは、太陽の誕生、それから地球の誕生、太陽系の誕生ということで、46億年前から

1 バージニア・リー・バートン 作、石井桃子 訳『せいめいのれきし』岩波書店、1964.

2 バージニア・リー・バートン 作、石井桃子 訳、真鍋真 監修『せいめいのれきし：地球上にせいめいがうまれたときからいままでのおはなし 改訂版』岩波書店、2015.

3 バージニア・リー・バートン 作、石井桃子 訳『ちいさいおうち』岩波書店、1965.

始まります。生命の歴史をお芝居の中で語っていくという形です。舞台左端の袖のところには司会者が控えていて、この人の役割は場面ごとによって変わってきます。この場面では、司会者は天文学者です。天体望遠鏡で空を見て星を見て、太陽系や地球の誕生と、それ以降の歴史を見ているというような、そんなシーンになっています。

これはプロローグの「2ば：わたしたちの太陽とその惑星」で、文章はこんなふうです<sup>4</sup>。

わたしたちの地球は、46億年もの大昔に、うまれました。太陽の家族にあたる、8つの惑星のひとつで、太陽からかぞえて、3ばんめの場所をしめています。地球は、そのなかで、いちばん大きくもなく、いちばん小さくもありませんが、わたしたちには、いちばんだいじな惑星です。ここにわたしたちはすんでいるからです。地球は、地軸を中心にして、24時間でひとまわりします。これが1日です。そして、365日かかって、太陽のまわりをひとめぐりします。これが1年です。こうして、わたしたちは時をはかります。

ここでは、旧版だと冥王星が惑星として登場しますが、冥王星は2006年に惑星から準惑星に格下げされてしまいました。ですので、改訂版のこのページでは、さりげなく冥王星を惑星から外しています。

それでは今日の本題、というより私が一番好きな、恐竜の時代に移っていきたいと思います。

まずはジュラ紀という時代で、約1億5千万年前、「2まく2ば」です<sup>5</sup>。

そのご、気候はさらにあたたかく、しめっぽくなりました。草食の恐竜のなかには、ものすごく大きくなったものがあり、また、肉食のなかまにたべられないよう、背中に板状の骨をもつものもあらわれました。また、恐竜のなかから、空をとべるようになったものがでてきて、最初の鳥類が登場しました。小さなほ

にゅう類もいましたが、ほとんど目立ちませんでした。

ということで、画面中央では最初の鳥類が肉食恐竜に追われて飛び立っていたり、画面右手前の茂みに私たちの遠い祖先にあたる哺乳類がいたりといった様子がさりげなく描かれています。最初の鳥類というと、有名な始祖鳥がありますが、パートンはあえてこの鳥を「始祖鳥」と呼んでいません。それはおそらく、これがアメリカの風景だからです。始祖鳥というのは今のところドイツでしか発見されていない鳥ですから、始祖鳥がここに登場するというのはちょっと地理的におかしいということになります。ですのでここではあえて「最初の鳥類」という表現で紹介されています。

めぐります。「2まく3ば」は白亜紀、大体1億年位前です。

山は、少しずつ高くなっていき、低い土地は、あさい海にかわりました。陸上でも、海でも、そして空中でも、はちゅう類が王さまでした。このとき、花をつける被子植物が、はじめて地球上にあらわれました。<sup>6</sup>

ここで、司会者の人が花を持っています。これは、植物が進化し、これまでより目立つ花をつけるものが出てきたことを示しています。また、この司会者はアメリカの人なので、身長が180センチくらいあるんだと思います。パートンさんはこの人を基準に、描かれた古生物たちがこんなに大きい、もしくは小さいということを示していच्छやいます。

めぐります。

「2まく4ば」、6600万年前、白亜紀の最後の時代です。

白亜紀は、中生代という年代の最後の時代になります。この場が終わると幕が閉じますから、画面の両端から幕が見えているという演出がなされています。

読んでみましょう。

4 前掲注(2), pp.10-11.

5 同上, pp.34-35.

6 前掲注(2), pp.36-37.

山は、いよいよ高くなつていき、気候は、さむくなくなつていきました。あさい海は陸になつていきました。白亜紀のさいごの日に、直径やく10キロメートルの小天体が、地球にぶつかりました。この大衝突のあと、地球はさむくなり、恐竜たちは死にたえてしまいました。鳥類に進化したなかまをのぞけば、博物館で化石のすがたでしか、恐竜にであうことはありません。

ここにも、もう一つの大きな改訂ポイントがあります。旧版では、

勢いをふるっていたはちゆう類は、ひとつひとつ死にたえて、ぶたいからきえていきましたので、いまではもう、科学博物館のなかの化石としてみるよりほか、であうことはありません。<sup>7</sup>

と書いてあります。けれども、その後の研究で、恐竜は完全に絶滅したのではなく、恐竜の一部は鳥に姿を変えて今でも進化を続けているということが分かってきました。つまり、今でも生きているハトやカラス、ニワトリなどの鳥類は、ルーツとしては恐竜から進化したものであるということです。それから、中生代という時代が終わってしまったのは、実は宇宙空間から飛んできた隕石が地球に衝突することによって、大きな環境変化が起こったためだということも分かってきました。一つ前の「2まく3ば」の挿絵は、アメリカの真ん中に大きな海があって、そこに海を泳ぐ首長竜等がいるというものです。その海が陸地になり、山が高くなつていきます。この場面の背景に書かれている山はロッキー山脈の始まりですけれども、高いところに行くところと雪を被っています。そういう細かな気候のことも、この絵本の中には取り入れられています。

それでは一気に時間を進めて、中新世、約2300万年前に行きましょう。

こんな感じの時代です。

気候は、あたたかくなつていきました。草はどんどんふえて、森をひろい平原にかえ、草食動物は、木の葉をたべるかわりに、草をたべるものが多くなりました。いまや、ほにゆう類が、すべてのいきものの王さまでした。なかにはたいへん大きくなり、地上にすむほにゆう類としては、史上最大になったものもいました。<sup>8</sup>

めぐります。また少しとぼして、「4まく1ば」完新世、だいたい4万年から2万年位前の時代です。御覧いただいているように、人類が登場していますね。ラスコーの壁画みたいなものを描いています。

本文を読んでみましょう。

ほかの、さまざまな生物が、ながいながいあいだ、この地球上にすんでいたのにくらべると、にんげんは、ついでいきんあらわれたにすぎない、といえるでしょう。

有史以前のにんげんは、ほらあなをすみかにし、火をつかえるようになりました。石や骨から、道具や武器をつくりました。動物をつかまえて、その肉をたべ、毛皮でからだをおおいました。また、ほらあなのかべに、その動物たちの絵をかきました。<sup>9</sup>

人類は約700万年位前にアフリカで出現しました。その当時のアフリカはまだ島で、ユーラシアと陸続きになつていなかったもので、アフリカの中でしか生息できなかったんです。アフリカ大陸がヨーロッパとつながるようになると、アフリカ出身の人類の祖先たちは、世界中に広がっていきます。そういう中で約20万年前に進化してきたホモ・サピエンス、私たちヒトが、またアフリカから、歩いてヨーロッパやアジアに広がっていき、その結果として現代の私たちがいます。

それでは一気に最後のエピローグに行きたいと思います。本文はこんなふうです。

さあ、このあとは、あなたのおはなしです。

7 前掲注(1), pp.38-39.

8 前掲注(2), pp.44-45.

9 同上, pp.50-51.

主人公は、あなたです。ぶたいのよういは、できました。時は、いま。場所は、あなたのいるところ。いますぎていく1秒1秒が、はてしない時のくさりの、あたらしいわです。いきもの演じる劇は、たえることなくつづき——いつもあたらしく、いつもうつりかわって、わたしたちをおどろかせます。<sup>10</sup>

というようにこの絵本は終わっています。

この絵本の後ろ見開きを見ていただくと、博物館の見取り図があります。3階の右側に大きなシロナガスクジラがいて、4階に恐竜の骨格が展示してあって、それから一番上の屋根裏部屋のようなスペースには収蔵庫や事務室があって、研究者や技術者もいます。ところで、私は大学院生になって、ニューヨークのアメリカ自然史博物館(American Museum of Natural History)に、化石標本の研究に行きました。その時にはっと思い出したのが、この絵本のこの絵でした。パートンさんがこの絵本を作るために、足掛け8年通われたのが、このアメリカ自然史博物館という、セントラルパークの西側にある博物館なんです。シロナガスクジラが展示してある3階、恐竜が展示してある4階、それから屋根裏部屋に研究室や収蔵庫があるという配置は今も変わっていません。ですから、今皆さんが行かれて、絵本と見比べていただいても、そんなに変わっていないなと共感していただけたと思います。

また、パートンさんが『せいめいのれきし』を書くときに使ったスケッチ等が保存されていて、インターネットで公開されています<sup>11</sup>。お見せしているのはその一つで、恐竜の骨化石標本の脇で掃除機をかけているスタッフの方をスケッチしています。おそらくパートンさんは、開館前や閉館後に展示室に入らせてもらってスケッチをしていたのではないかと思います。それから、展示標本と人を並べて描くことによって、この標本の大きさが分かりますね。先ほど、絵本の中でも、司会者が大きさの基準として示されていると申し上げ

ましたね。これがいつ着想されたものかは分かりませんが、スケッチの中からも、『せいめいのれきし』に施された工夫をうかがい知ることができます。

また、スケッチで描かれている恐竜の変化にも注目してみましょう。これはアパトサウルスという恐竜で、恐竜自体は昔も今も変わっていません。このスケッチが描かれた1960年代には、恐竜は爬虫類で変温動物で、しっぽを引きずって、のそのそと歩き回っているというイメージでした。しかしその後の研究で、恐竜は恒温動物に進化していて、非常に活発な動物になっていたということが分かってきました。その一つの表れとして、しっぽは引きずらずにぴんと張って、前の頭と後ろのしっぽでバランスを取りながら、非常に機敏に動いていたと考えられるようになりました。これが分かったのが1970年代です。この時期に、アメリカ自然史博物館を始めとして、実物の化石を組み立てて展示していた世界中の博物館では、展示標本のポーズが変わりました。しっぽの垂れた古いポーズから、しっぽをぴんと張った新しいポーズになったのです。

### 3. 『せいめいのれきし』との付き合い方 —最新の研究動向を踏まえながら

#### ① 両生類から爬虫類、恐竜へ

先ほどとぼしてしまったのですが、2億数千万年前の三畳紀という時代があります。実はここで恐竜が出現してくるシーンが、『せいめいのれきし』の中にも描かれています。

さて、私はお話のときに、クイズを間に入れるんです。よろしかったら皆さん、挙手で1票投じていただきたいと思います。それでは問題です。

恐竜と恐竜以外の爬虫類、つまりワニやトカゲやカメは、どこで見分ければいいでしょうか。①歯、②腰、③指、どれでしょう。

まず、①歯の方。1、2、3、…27票ですね。

②腰の方。37票

最後、③指の方。46票。

多数決では③指ですが、正解は②腰です。腰の方、おめでとうございます。

実は、このクイズは私自身のためにやっている

<sup>10</sup> 前掲注(2), p.76.

<sup>11</sup> Digital Collections, Library of Philadelphia. <<http://libwww.freelibrary.org/exhibitions/slideshow.cfm?exhibit=6&cat=49&item=276>>

ものです。これでだいたい皆さんがどれくらい御存じなのか、予備知識を計ることで、その後の説明の内容を調整しているんです。

それではちょっと解説したいと思います。元々、背骨を持った生き物というのは魚しかおらず、水の中にしかすんでいませんでした。それが両生類になって、ひれが手足に変わって上陸します。しかし両生類の卵は、例えばカエルの卵を思い浮かべていただければ分かるように、殻がありません。ですから、陸上に産んでしまうと干からびてしまいます。カエルは大人になって陸上で生活していても、産卵するときには水の中に殻のない軟らかい卵を産みます。これがオタマジャクシになって水中で生活し、オタマジャクシは自分で手足が生えてから上陸しなければなりません。

しかしその後、進化して爬虫類が出てきます。爬虫類と両生類というと、イモリとヤモリのどっちがどっちか分からなくなる人もたくさんいますが、一番の違いが卵です。爬虫類の卵から、殻があるようになります。殻のある卵は陸上に産んでも干からびないので、最初から陸上で生活していきます。だから、水辺がなくても産卵することができる。これによって、両生類よりも爬虫類の方が、一気に生息範囲が広がります。

さらにその爬虫類の中から、二億数千万年前に恐竜が出てきます。この最初に出てきた恐竜は何を思ったのか、二足歩行を始めます。それまでは四足歩行ではって、お腹やしっぽを地面にすりながら歩いていたのに、二本足ですっくと立ち上がり、機敏に動くようになっていく。加えて、恐竜の中でも、ウロコではなく、羽毛をもつものが出てきます。

羽毛が生えた恐竜の一部は鳥類に進化していきます。そしてその後、鳥類に進化しなかった恐竜たちは絶滅したのですが、鳥類は現在も私たちと一緒に進化を続けています。

先ほど述べた、腰で見分けるということなのですが、普通の爬虫類は、膝と肘が横につき出した、がに股・腕立て伏せの状態です。でも恐竜の場合は、あしをまっすぐ下に伸ばすので、膝が体の真下に伸びます。これによって、他の爬虫類よりも素早く動くことができるようになり、

恐竜たちはあれだけ繁栄したといわれています。もちろん、実際に恐竜が歩いているところを見たことのある人なんていませんが、一つの証拠が足跡です。これがその写真です。それぞれの足跡が、左、右、左、右、左、右と一直線の上を歩いていることが分かります。もし他の爬虫類と同じようにがに股だったら、左足と右足の間が開いてしまいます。しかしこの恐竜は一直線の上を、ファッションウォークのようにきれいに歩きますよね。このような痕跡から、恐竜たちがスマートに動けるようになったということが分かるのです。

私たちが発掘に行ったときに、具体的にどういふところに注目するかというと、骨盤です。骨盤には、腸骨、恥骨、坐骨という三つの骨があり、これは人間も同じです。お見せしているスライドは恐竜の骨盤ですが、三つの骨の継ぎ目のあたりに穴があります。この穴、普通の爬虫類だと穴ではなく浅いくぼみになっているので、どうしても大腿骨のはまり方が浅くなり、結果として膝が横に突き出します。しかし恐竜たちはこのように穴が開いているため、大腿骨がしっかりとハマって、膝が横に突き出さなくても体を支えることができます。これにより、膝を真下に伸ばすことができ、あしを前後に振るだけで早く走れるようになったと考えられています。ですので、私たちも発掘に行ったときにはまず骨盤を探します。穴が開いていれば恐竜だと分かるし、穴が開いていなければ恐竜じゃないということが分かります。

## ② 肉食恐竜から草食恐竜へ

その後、恐竜たちはどんどん大きくなっていきます。中には、二足歩行から四足歩行に戻り、4本のあしで体を支えるようなものも出てきます。

ここで二つ目の質問です。恐竜といえば大きいものの代名詞ですが、今のところ一番全長が長いと考えられている恐竜は何メートルくらいあるでしょうか。① 20メートル、② 40メートル、③ 80メートル。

これも皆さんの投票で聞いてみたいと思います。

① 大きいといっても 20メートルくらいかなと

いう方。10名。

② 20メートルはさみしい、40メートルくらいという方。48名。

③ 80メートルいくでしょうという方。47名。

ありがとうございました。正解は今のところ、37、8メートルが最大級だといわれています。先ほどのアメリカ自然史博物館には現在、パタゴティタン（「パタゴニアの巨人」の意味）という、アルゼンチンで発掘された世界最大級の恐竜が展示されています。あんまり大きいので、頭が展示室からはみ出してしまうという子です。この子は2016年に展示が始まり、2017年にパタゴティタンと学名が付けられました。骨の大部分が見つかっていて、全身を復元できるものとしては、37メートルのこの子が最大といわれています。恐竜に詳しい方は、中国で38メートルの恐竜が見つかったというニュースを御存じだと思います。ポイントは、このパタゴティタンが37メートルだといわれた途端、これを超えるために、一生懸命38メートルの恐竜を復元するための競争が始まるということです。だから推定値も37メートル以上になるような意識が働きます。ケチをつけるつもりはありませんが。

いずれにせよ、今後もっと大きな恐竜も出てくるかもしれませんが、大きな恐竜はこのくらいの大きさだというイメージを持っていただければいいかなと思います。

『せいめいのれきし』の挿絵を見ていただくと、先ほどのパタゴティタンの仲間の最初の頃の恐竜、プラテオサウルスが植物を食べている絵が描かれています。このプラテオサウルスの子孫がなぜ全長37メートルにまで大きくなったのでしょうか。先ほども少し申し上げたのですが、元々二足歩行だった恐竜は、進化の過程で体が大きくなると四足歩行に戻るんです。それは、2本の柱で体を支えるより、4本の柱で体を支える方が効率的だからです。同時に、これも先ほど申し上げたように、膝が体の真下に伸びると、がに股・腕立て伏せのときのように肘や膝への負担が少なくなります。これによって無理なく体重を支えることができるので、大きくなれたのではないかと思います。

それまでの恐竜や爬虫類は、肉食のものしかいませんでした。植物は植物繊維が硬くて消化しづらいため、餌にすることがなかなかできなかったようです。けれども、このプラテオサウルスのような恐竜から、植物を食べ始めるようになります。植物はちょっと嚙んだくらいでは消化できないので、腸を長くして、ゆっくり消化する必要があったのでしょう。そのために、長い腸をもつには胴体を大きくしなければならなかったのではないかと。つまり、最初に恐竜が大きくなったきっかけは、植物という新しい資源を活用したことが背景にあったのではないかと考えられています。

恐竜の腸は残念ながら化石に残っていないのですが、国立科学博物館では、現代に生きている哺乳類の腸を展示しています。例えば、草食のウシは胃から肛門まで40メートルもあります。あの体には、40メートルもの腸がたくし込まれています。一方ライオンは肉食なので、7メートルで済んでしまいます。植物をエネルギーに変えるために、長い腸をもつことが大変重要であるということが、今の哺乳類を見ていてもうかがい知ることができます。

### ③ 恐竜と鳥類

また別の恐竜のトピックにいきたいと思いません。

1990年、マイケル・クライトン(Michael Crichton, 1942-2008)が『ジュラシック・パーク』<sup>12</sup>という小説を書きました。それが映画化されて、1993年に映画館で上映されました<sup>13</sup>。2018年は映画の公開から25周年ということで、いろいろなお祝いや再放送が行われています。御覧になった方もいらっしゃるんじゃないかと思います。

1980年代後半、私はアメリカのイェール大学の大学院生だったんですけど、その時の先生がジョン・H・オストロム(John H. Ostrom, 1928-2005)という有名な恐竜学者でした。この人はとんでもない酒好きで、学生の頃は散々からまれて大変

12 Michael Crichton, *Jurassic Park*, New York : Knopf, 1990.

13 スティーブン・スピルバーグ(Steven Spielberg) 監督、『ジュラシック・パーク』(Jurassic Park), 1993, アンブリン・エンターテインメント製作。

だったんです。まあそれはそれでいい勉強になりました。

このオストロム先生、すごいことをしています。鳥が恐竜から進化したことや、恐竜は鳥に進化する以前から恒温動物であって、活発な動物であったということを、1960年代後半から1970年代にかけて発表したんです。それが今では正しかったということが認められています。オストロム先生はなぜこれに気が付いたかという、始祖鳥という有名な最古の鳥、1億5千万年前の鳥の化石からヒントを得たのです。始祖鳥の化石は、頭から首、背中、尾まであります。前あしも後ろあしもあります。それで、前あしや尾の周りにうっすらと、羽毛の跡が残っていますよね。羽毛を持っている動物というのは鳥しかいませんから、これが1861年にドイツで見つかった時に、当時の学者たちはすぐにこれは鳥の化石だと分かったんです。それで、この化石は大体1億5千万年くらい前のものだという事も分かっていたので、これは今まで見つかった鳥の化石の中で一番古いぞということに気が付き、「太古の翼」という意味の学名(*Archaeopteryx*)を付けます。

オストロム先生はアメリカの先生だったんですけども、ドイツに通って、始祖鳥の実物化石を研究しました。先生はそこで前あしに着目し、始祖鳥が手首を横に曲げていることに気が付きます。ちょうど私たちが「バイバイ」といって手を振るときのような具合に、手首が曲がったまま、化石になっているのです。

当時、始祖鳥は10体くらいしか見つかっていませんでしたが、その中で前あしが見つかるものは、皆同じように手首を曲げていました。先生は考えます。物を掴むためには手首は上下に動くはずなのに、始祖鳥の手首は横に動いている。それはどういうことなのか。

今の鳥を見ると、翼を広げたり畳んだりするときに、平泳ぎをするときのように手首が横に動くのです。そうしないと翼が畳めなくて鳥たちは困ってしまう。実は手首を横に動かす動きというのは、始祖鳥以前、恐竜の段階で始まっていたんだということに、オストロム先生は気が付きます。そこから、一部の肉食恐竜から鳥が進化してきた

ということを思い付くわけです。

その一つの根拠が、始祖鳥の手首の骨です。始祖鳥の手首の骨はD字型をしていて、D字の直線部分が指の骨に、曲線部分が腕の骨に、それぞれつながっています。このD字の曲線部分のおかげで、手を横に動かせる。現代の鳥も同じような手首をしていて、始祖鳥と鳥はつながっているということが分かります。そして、ヴェロキラプトルやデイクスなどの肉食恐竜も、同じように手首にD字型の骨があります。この手首が、肉食恐竜の中で進化してゆき、そして鳥に進化していったのではないかと考えたわけです。

この後、次々と化石が見つかります。1996年には、恐竜の段階でもう羽毛が生えていたということが分かるようになりました。ミクロラプトルという中国の恐竜は、前あしだけではなく後ろあしにも立派な翼が生えています。ムササビやモモンガが飛膜を使って飛ぶように、翼を使って枝から枝に飛び移っているうちに、羽ばたいて飛べるようになっていたらしいということが分かってきました。

これは2014年に発表されたロシアのクリンダドロメウスという恐竜です。全身が短い羽毛で覆われています。元々羽毛というのはこのように、フリースを着ているみたいに胴体を覆っているものであって、翼が最初ではないのです。そう考えると、羽毛は飛ぶために進化してきたものではなく、保温の役割があったんじゃないかとみんな気が付きはじめます。当時の地球が寒ければ、フリースを1枚着て保温するということは、他の生き物と比べて当然有利になるのです。しかし当時の地球は、南極圏や北極圏にも森林があるような、今よりはるかに温暖な場所だった。そういう中でフリースを着ているのはなぜでしょうか。

例えば今の爬虫類は変温動物なので、気温に自分の体温を左右されてしまいます。すると、寒いときには日光浴をして自分の体温を上げなくちゃいけないし、暑くなりすぎると日陰に隠れて体温を下げなくちゃいけないので、一日中活動できるわけじゃない。一方、自分で体温を調節できれば、こんなに日向と日陰を行ったり来たりする必要はなくなります。すると、例えば夜、太陽が沈んで



外気温が下がっても、普通の爬虫類だったら体温が下がってしまうけれど、羽毛があれば体温を一定に保つことができ、朝から晩まで活動できます。これが、恐竜たちの大繁栄につながっていたんじゃないかと考えられています。その後、羽毛が翼になって、空を飛ぶということを学んで、鳥類の繁栄につながっていったのではないかといわれるようになっていきます。

#### ④ 翼竜・首長竜

また『せいめいのれきし』に戻って、白亜紀の「2まく3ば」のシーンを見てみましょう<sup>14</sup>。ここにプテラノドン、翼竜と首長竜がいます。

ここでクイズです。翼竜や首長竜は恐竜でしょうか、恐竜ではないのでしょうか。

恐竜に分類してあげようという心優しい方、手を挙げてください。1、2、3、…45名。ありがとうございました。挙げなかった方が優しくないということではありませんよ。

それでは見てみましょう。例えばこれは、首長竜の全身骨格です。哺乳類だと、キリンでもヒトでも首の骨は7つでできているんですけども、首長竜は最大76個まで増やしてしまいました。首長竜は中生代に海を泳いでいました。この首長竜が恐竜かどうかということなんですけれども、先ほど申し上げたように、骨盤を見てみましょう。ちょっと形が違うので分かりにくいんですけども、浅いくぼみになっています。恐竜以外の爬虫類と一緒にですね。プテラノドンもそうです。腸骨・恥骨・坐骨の継ぎ目に穴が開くという進化は恐竜で起こり、それを鳥が引き継いでいます。首長竜も翼竜も、穴が開いていないので、恐竜には分類されないということになります。

ちなみに、2018年は、日本で有名な首長竜であるフタバズキリュウが発見されてからちょうど50年になります。フタバズキリュウというのは、双葉層群という福島県の地層から、鈴木直さんという当時高校生の方が見つけたのでこの名前が付いています。それから50年経ちましたので鈴木さんもおじさんになっています。それで、祝

50年ということで、フタバズキリュウを主に研究した、東京学芸大学の佐藤たまき先生が『フタバズキリュウ もうひとつの物語』<sup>15</sup>という本を書いていらっしゃいます。もし機会があったら手に取っていただきたいなと思って御紹介します。

#### ⑤ 植物と動物の進化の関係

今度は同じ挿絵の花に注目していただきたいと思います。裸子植物という原始的な植物も、花を咲かせて実を付けるということはしていました。しかし、目立った花を付けるというのは、この白亜紀に進化してきた被子植物で初めて起こったことです。今ではほとんどの植物が被子植物です。

目立った花を咲かせることによって、動物たちはその蜜を吸おうと寄ってきます。今ハチドリの写真をお見せしています。動物や昆虫などは喜んで蜜を吸っていますが、一方の植物の方は、蜜をあげっぱなしかというと、そうではないんです。蜜を吸いに来た生き物の体にたくさん花粉を付けてもらうことで、花粉をばらまいてもらうというwin-winな関係ができているのです。

それからもう一つ、果実を付けるというのも被子植物の特徴の一つです。動物は果実をおいしく食べていますが、これも植物は食べられっぱなしではありません。動物はいろいろなところで糞ふんをしてくれます。すると、植物は、自分では動けなくてもいろいろなところに糞に混じった種をまいてもらうことができるのです。植物と動物の共働はこのように始まったと考えられます。

ちなみに、花びらのような軟らかい組織はなかなか化石に残ってくれないんですけども、恐竜たちの糞の中に手がかりが残っていることがあるんです。これは恐竜の糞の化石を顕微鏡で拡大したものです。この粒はプラントオパールといいます。例えばササの葉を触ると手が切れちゃうことがありますよね。なぜあんなに葉っぱの縁が鋭いのかというと、このプラントオパールという固い成分が中に入っているためです。これにより葉っぱが固くなり、縁が鋭くなるので、触れると手が

14 前掲注(2), pp.36-37.

15 佐藤たまき 著『フタバズキリュウ もうひとつの物語』ブックマン社, 2018.

切れやすくなります。元々植物としては、葉を固くすることによって他の生き物に食べられにくくするという役割があったんだと思います。けれども、動物の方はどんどん植物を食べて消化できるものが出てきてしまったようです。

## ⑥ 恐竜の色は分かるか

それでは4番目のクエスチョンです。

『せいめいのれきし』の中で、バージニア・リー・バートンさんは、肉食の恐竜は赤っぽく、草食の動物は緑っぽく色分けをしています。では、恐竜がどんな色をしていたか、分かるでしょうか、分からないでしょうか。

これも皆さんのご意見を聞いてみます。恐竜の色は分かるという人。1、2、3、…39票ですね、ありがとうございます。他の方は分からないということですね。

2009年までは、私も、恐竜の色なんて分からないと自信を持って言っていました。ですが、2010年に、こんな化石が見つかりました。これは中国で発掘されたアンキオルニスという「羽毛恐竜」の化石です。全長が50センチくらいしかない小さい恐竜です。頭があって背中があって、前あし、後ろあし、しっぽがあります。骨の周りの黒くなっているところが羽毛なので、この子も前あしと後ろあしに翼を持っていたことが分かります。もう少し寄ってみますと、頭の骨が茶色っぽくて、羽毛が黒っぽく残っています。羽毛はいろいろな色がありますが、骨の色は基本的に白しかありません。ですから、骨が茶色や黒、グレーになっている部分は、地層に埋まっている間に骨にいろいろな成分が染み込んで、汚れてしまっているもので、元々の色ではありません。それで、あるアメリカの大学院生が、この化石の羽毛の部分を電子顕微鏡で見たところ、ソーセージのような細長い粒が密集しているところと、ミートボールのような丸いころころした粒が密集しているところが見つかりました。一見同じように見える黒っぽい羽毛なんですけれど、その粒の形と大きさが違うということに気付いたんです。彼は同じ倍率で今の鳥たちの羽毛を見ていました。そうすると、同じようにソーセージ部分とミートボール部分があ

り、粒の形の違いはメラニン色素の違いに関係しているらしいことに気が付きます。その形と大きさと密度を現代の鳥と比べると、90パーセント以上の確率で恐竜の羽毛の色が分かるというのです。

その結果、アンキオルニスは全身がほぼ黒で、翼に白い帯があり、頬と頭のとっぺんに赤いワンポイント模様があることが分かりました。これが世界で初めて、全身の色が分かった恐竜です。

これを見ると、皆さん意外に地味だなということですがっかりされますし、子どもたちはこんな鳥なんていないよと言います。けれど、そんなことはありません。今お見せしているのはアメリカの絶滅危惧種のキツツキです。現代の鳥ですから後ろ足の翼はないんですけれども、全身はほぼ黒で、翼に白い筋があって、頭が赤いですね。このような色と模様の生物が1億6千万年前からいたということが分かるなんて、わくわくすると思います。そして、わくわくする以上にもっと意味がありそうだとすることに気が付いた人たちがいます。

今の鳥で、頭のとっぺんに赤いワンポイントの羽毛を持っている種類がいます。現代の鳥類で頭頂部に赤い羽毛が生えているのは、成熟したオスであることが普通です。だから鳥たちは、一目見ただけでオスカメスカが分かります。赤がきれいな方がモテるとされています。近寄ってよくお話ししてみないとどんな相手か分からないよりも、ぱっと見て「ああ大人のオスなんだ」と分かったほうが話が早いですから、こういうことがコミュニケーションをスピードアップするのに有用だったということが分かっています。

さらに、脳についても見てみたいと思います。脳そのものは腐って化石に残りませんが、脳が入っていた空洞は残っているので、脳の大きさと形を復元することができます。爬虫類の脳というのは鳥類の脳に比べて小さいんですけれども、前方に伸びた嗅葉（嗅覚を司る部分）が発達している。それに対して鳥類の脳は、嗅葉はさほどでもないけれど、視葉（視覚を司る部分）が発達しています。そして、例えば始祖鳥のような境界線上の生物を見ると、確かに今の鳥類に比べると嗅葉が発達していますが、爬虫類に比べると視葉が発

達していることが分かります。こういったところからも、恐竜から鳥類に進化する中で、情報収集の手段が匂いを嗅ぐことから目で見ることによって変わったのではないかとということが分かってきました。

また、シノサウロプテリクスという恐竜がいます。この恐竜、尻尾は栗毛色と白の縞模様だということがこれまで分かっていました。2017年、胴体についても、お腹の方が白くて背中の方が栗毛で、その境目ははっきりしているということが分かったのです。そんなことがどのくらい重要なだと思われた方はたくさんいらっしゃると思いますが、図鑑の色をどうするかという以上の意味があるのです。

お腹の色と背中の色が明確に違うというのは、平原や草原のような、上から太陽光線が当たる環境にいたことを示しているんじゃないかという研究があります。この恐竜の化石が出てくる中国の遼寧省の地域は、かつては鬱蒼とした森であって、恐竜や鳥は木から木へと飛び移っていたような場所だったとされてきました。しかし、お腹ははっきり白くて背中が濃い色をしている生物が出てくるならば、ここには草原があった可能性を示唆しているのではないかとという点で、この子は注目されました。

ということかということ、背中の色が濃くお腹の色が白い生き物に太陽光線が上から当たったときに、太陽光線によって背中の方は明るく、お腹の方は暗くなり、全体的に質量感がないような模様や色に見えるのです。これにより存在感を薄めることができると考えられるので、この配色は、草原のような場所でカモフラージュ効果があったことを示しているのではないかと注目されたのです。

色が分かると、図鑑がより正確になるだけではなく、生息環境についても分かる可能性も出てきたのです。

## ⑦ 恐竜と卵

「2まく4ば」は『せいめいのれきし』の中生代最後の幕ですが、前方に卵を食べている恐竜が描かれています<sup>16</sup>。これはオヴィラプトル、卵泥棒

という意味の学名を持つ恐竜です。オヴィラプトルは肉食恐竜で、草食恐竜の卵の化石近くで発見されたことから、卵を漁って食べていたのではないかと考えられ、卵泥棒のような生態が想像されていました。ですので、バートンさんもこのような絵を描かれたんです。けれども、その後の研究で、実は、草食恐竜の卵だと思われていたものが自分の卵だったということが分かりました。さらに、ちょうど鳥が卵を温めるようにして、オヴィラプトルがその卵の上に座っていたことが分かりました。つまり卵を温めるという行為は恐竜の段階で進化していたんです。他の爬虫類、トカゲやカメだと、卵を産みっぱなしなのが普通です。だから、こういうふうに卵の世話をするというのは、鳥になってからの高度な行動だと思われていたのですが、子育てはもう恐竜の段階で始まっていたということが分かってきました。

関連して、恐竜のオスとメスはどういうふうに分かるのかということをよく尋ねられるのですが、これについてもお話します。

今の鳥たちは卵を産むときに、殻を作るためにたくさんのカルシウムが必要です。人間でも、カルシウムはたくさん摂ったほうがいいんですけども、カルシウムは水溶性が高くて体外に排出されやすい。だからサプリメントで補給するという方もいらっしゃいますね。では鳥たちはどうするかということ、普段は骨髄が入っている骨内部に一時的にカルシウムを貯めておき、産卵するときにそこからカルシウムを出すことによって卵の殻を作るということが分かっています。それを知った上で、あるティラノサウルスの骨を見ると、この骨は、本来ならば空洞になっているところにカルシウムが蓄積されています。これは産卵期のメスのティラノサウルスだと推定できるということが分かってきました。ただし、空洞が詰まっていると産卵期のメスだと分かるのですが、逆に何も詰まっていないとオスだといえるかということもありません。産卵期以外のメスもここは空洞です。それでも、古生物のオスとメスがある程度区別する手立てができました。

16 前掲注(2), pp.38-39.

さきほどの卵の上に座っているこの大人の恐竜は、当然卵を産んだばかりのお母さんなのだろうと思っていたら、そうでもないようです。骨の中に、最近カルシウムが貯まった痕跡が全くない。ペンギンの子育てなどでも御存じのとおり、オスが卵を温めるということもあるのですね。どうも恐竜の段階からイクメンがいたらしいということが分かってきました。

ですから本当は絵を変えたいところなんですけれども、さすがにバートンさんの絵は変えられないので、本文では特に言及せずに、私のあとがきのところで少し書き添えています。

### ⑧ 恐竜の絶滅と鳥類の進化

今スライドでお見せしているのは、アメリカ・コロラド州での調査の時に撮った地層の写真です。私はちょっとお行儀悪く寝そべていますが、ちょうど私が指さしている地層の境目、ここが6600万年前です。これより上が新生代で、これより下が中生代です。この境目より上の地層では、恐竜が全然出てきません。どうしてここに境目があると分かるかというと、地層を分析したときに、ここだけイリジウムという元素が急激に増えるからです。この6600万年前に何かイリジウムが大量に供給されるようなことが起こっている。それから、この地層に含まれる石英の結晶は、衝撃を受けた痕跡を残しています。そこから、何かぶつかったのではないかということが分かる。さらに調べていくと、どうもメキシコのユカタン半島のあたりに、6600万年前に、直径10キロメートルの隕石がドーンとぶつかったということが分かりました。ぶつかったところは浅い海でした。隕石は粉々の破片になって水蒸気と一緒に大気圏に巻き上げられて、それが地球全体を覆ってしまいます。そうすると地表に太陽光線が届きにくくなります。そのため、例えば陸上では28度くらい、海水では11度くらいの、急激な温度低下があった。それから2年間くらい、植物は光合成ができなくなって減り、それによって食べるものが少なくなった恐竜たちも、恐竜以外の古生物たちも、大量絶滅が起こります。こうして、中生代という時代が終わってしまったということが分

かってきました。

ここで質問です。これは相当難しい問題です。先ほども申し上げたように、鳥類は恐竜と一緒に全部絶滅したわけではなく、一部が大量絶滅を免れて生き残ることができました。それでは、なぜ鳥類は生き残れたのでしょうか。三択です。①鳥は空を飛ぶために小型だったから、②恒温動物に進化していたので寒さに強かったから、③鳥は肉食だったので、植物が光合成できなくなっても食べ物が無くなってしまってもサバイバル率が高かったから。

これもちょっと皆さんに御意見を伺います。

①小型だからという方。20人。

②恒温動物だからという方。69人。

③肉食だからという方。17人。

ありがとうございました。この三択の中で答えを選ぶとすれば、①小型であったので食べる量が少なくて済んだからです。これについてはいろいろな説があります。

②については、ワニやトカゲやカメなどの変温動物も普通に生き残っているんです。彼らは自分で体温を一定に保たないおかげで、同じ体の大きさの恒温動物より少ないエネルギーでやり過ごすことができるんです。そういう点では省エネであって、餌の少ないときに省エネできることは生き残るために重要だったのではないかと考えられます。

③の肉食か草食かというところについて、草食の鳥類もちゃんと生き残っていました。そもそもなぜ鳥類が生き残ったか考えると、鳥は歯を持たずクチバシを持っているところが鍵になります。かつては、歯をずらっと並べるよりクチバシにした方が、体が軽く済むため有利だったのではないかといわれてきました。けれども最近になって、木の実や種をクチバシで割って中を食べられることによって、少ない資源を活用でき、それによってサバイバル率が高かったんじゃないかという研究が出てきました。それから、2018年に出たこんな研究もあります。今の爬虫類たちは卵の中で歯を生えさせるため、卵の中にいる期間が6か月や8か月と長くなっています。しかしながら、歯を作らずクチバシに変えてしまえば、卵の

中で早く成長でき、卵の中にいるという無防備な時間を短くできるということで、有利になったんじゃないかといわれています。

「3まぐ1ば」の挿絵では、恐竜が絶滅してから、へびみたいな爬虫類や、哺乳類たちがどんどん出てくる様子が、新生代の幕開けという場面で紹介されています<sup>17</sup>。

しかし、この写真を見てください。これはインドで発掘された、6750万年前、恐竜が絶滅する少し前の化石です。恐竜の卵の上に、によるによると細い骨がありますね。これは、竜脚類恐竜という首の長い恐竜の巣の中に、全長3.5メートルくらいの大蛇がいたという化石なのです。このへびは、たまたま恐竜の巣の上を移動しているときに何らかの理由で化石になっただけかもしれませんが。しかし、今のへびが鳥の卵などを盗んで食べる習性を見ていると、どうもへびが進化してくることによって、卵を放っておくと食べられてしまうという危険が生じ始め、それによって恐竜は卵をちゃんと見張っていなければいけなくなったのではないかと考えられます。恐竜の子育てのような振舞いも、卵を荒らしにくる動物が進化することによって生まれた現象なのかもしれないという可能性も指摘されています。

#### ⑨ 恐竜と哺乳類

「3まぐ3ば」は恐竜絶滅後の場面です<sup>18</sup>。先ほどお話した、2300万年前の中新世という時代です。パラケラテリウム(インドリコテリウムとも)という大きな哺乳類が登場します。陸上哺乳類の中で史上一番大きなものです。体長8メートル、体高7メートルといわれており、今のゾウや人間より断然大きいです。しかし哺乳類は、恐竜に対して全体的に小さいですよ。なぜ小さいかというと、一番の要因は、大人になると成長が止まるためです。成長が止まることで、余計なエネルギーを使わないということです。爬虫類は、健康で長生きすればどんどん大きくなります。ですから全長37メートルという大きさも有り得たんです。けれども、それに対して哺乳類は、成熟した

ら成長を止め、余計な成長をしないという省エネ的なことをやるようになったので、あまり巨大なものはいません。シロナガスクジラなどは陸の哺乳類に比べると大きいです。それは、水の中では浮力を使って体を支えているため、陸上より大きくなるのが可能なのです。シロナガスクジラたちも成熟したら成長が止まるというプログラムになっているので、成長し続けるというようなことはありません。

また、「3まぐ1ば」「3まぐ2ば」「3まぐ3ば」「3まぐ4ば」といった新生代の前後のシーンで、司会者の男性が、ウマの祖先たちの前足を手に取って握手しているような場面があります<sup>19</sup>。ウマの進化について、ヒトと比較して見てみましょう。これはヒトとウマの骨格標本を、乗馬しているような姿勢で組み合わせた写真です。それぞれの腰、膝、足首、かかとを見てください。ウマは草原を駆ける中で、足を長くしないと草が絡まってしまうため、足の長い子に進化してきました。彼らが子孫を残して行って、今のウマにつながっています。その際、ウマはかかとから先の骨をもつごく長くする代わりに、元々5本だった指が3本に減り、今では中指1本で足を作っています。現代のウマは1本指で走るという特徴を持っていますから、指の長さや本数に、ウマの進化を見ることが出来ます。バートンさんも絵本の中で、このような挿絵でウマ類の進化を解説しているのです。

皆さんすでに御存じのとおりかと思いますが、このように、『せいめいのれきし』は読めば読むほど奥の深い絵本です。

#### 4. 子どもたちが自然と自然の歴史に興味をもつきっかけを作ってくれる本

こういった隠されたポイントはいくらでもあるのですが、『せいめいのれきし』さえ読めば十分というわけではありません。いくつか他の本を御紹介したいと思います。

これは、私は直接関係していませんが、講談社から出されている『ながいながい骨の旅』<sup>20</sup>と

17 前掲注(2), pp.40-41.

18 同上, pp.44-45.

19 前掲注(1), pp.41,43,45,47.

いう絵本です。これも、かなり学習的な要素が強く、文字が多い作品です。「ながいながい骨の旅」とはどういう意味か。私たち人間の体の中には骨がありますが、骨は祖先である魚類から私たちが引き継いだもので、体の支柱、カルシウムの貯蔵庫、造血工場等の役割があります。両生類が上陸に成功して以来、私たちは海に依存しない暮らしをしています。血液や骨の成分によって、体の中に「海」を持ち続けているということを伝えるために書かれた絵本です。

例えばこんなシーンがあります。お母さんがお子さんを抱き上げているシルエットの中に、海があって魚が泳いでいるという絵です<sup>21</sup>。このページには、

ち なか  
血の中には、ナトリウムや塩素、カリウム、鉄  
うみ みず  
など、海の水とおなじような成分がはいっています。  
ほね  
骨にも、カルシウムだけでなく、リンや  
うみ みず  
マグネシウムなど、海の水に溶けこんでいるもの  
とおなじミネラルがふくまれています。

わたし  
私たちは、「骨」や、その中でつくられる「血」  
ほね なか  
というかたちで、いまでも、体の中に「海」をい  
うみ  
れて、もちはこんでいるのです。私たちは、  
わたし  
体の中に「海」をもつことで、地上で生きて  
ちじょう い  
いくことができるのです。

というように、私たちのルーツをたどると魚になるということだけでなく、今でも海を持ち運んでいるということを伝える本になっています。

この絵本の中で文言としては出てきませんが、指を切ってしまったらして、血をなめるとしょっぱいという経験はありませんか。そのしょっぱさは元々は海水の塩分から来ていると説明することもできます。

これは英語の絵本で、『Grandmother Fish』<sup>22</sup>です。「おばあさんの魚」ということで、自分たちの

遠い遠い祖先である魚から、私たち哺乳類までの進化をたどっていくというお話です。この絵本の副題は a child's first book of Evolution、「子どもが初めて読む進化の本」で、そのような意図があって書かれたものです。動きを擬音語や擬態語で表現することで、人間になるまでの進化を解説しています。例えば水の中を泳ぐ魚を見てみると、全身を「くねくね」左右に振りながら前に進んでいるとか、ひれが手足に変わった両生類が「ハイハイ」するようになったとか。そして私たちヒトは2本の足で「すたすた」と歩行できるようになりましたとか。私たちの遠い祖母の祖母の祖母のような存在である魚からヒトまで、その進化における大きな変化を動きとその擬音語や擬態語で紹介しているというのがこの本です。中を見てみると、魚は全身をくねらせながら (wiggle) 水の中を進んでいく。また、最初の魚は顎がなかったのですが、進化して顎ができたことで一語は「もぐもぐ」か「ぱくぱく」か迷いますが (chomp) 一獲物をくわえて捕まえられるようになりました。それから両生類になると、「すーはー」と空気を吸う (breathe) ようになっています。哺乳類になっていくと、これも何と訳すか悩みますが、このネズミのような生き物の子どもたちは、「きゅーきゅー」(squeak) と鳴いて、お腹が空いたよと親に訴えかけます。これは、哺乳類というのは親が子を産み、子に母乳や餌を与えるといった親子のつながりが深くなっている動物だということが、魚から段階的に紹介されているのです。それで「きゅーきゅー」からさらにコミュニケーションできるようになっていく。このように魚とヒトが本当につながっているということが紹介されている絵本です。

それから、『いのちのひろがり』<sup>23</sup>ですね。これは中村桂子先生の絵本です。この本は、命の広がりやつながりを描いています。動物や植物、菌類など、地球上には様々な生物が生息しています。我々は草花や昆虫を見たときに、かわいいとか美しいと感じますが、親近感を覚えることはなかなかないかもしれません。しかしながら自分には両

20 松田素子 文, 川上和生 絵, 桜木晃彦・群馬県立自然史博物館 監修『ながいながい骨の旅』講談社, 2017.

21 前掲注(20), pp.23-24.

22 Jonathan Tweet, illustrated by Karen Lewis, *Grandmother fish: a child's first book of evolution* First Feiwel and Friends edition, New York: Feiwel and Friends, 2016.

23 中村桂子 文, 松岡達英 絵『いのちのひろがり』福音館書店, 2017.

親がいて祖父母がいて、ひいおじいちゃんひいおばあちゃんがいて、さらに遡ると、実は地球上の全ての生き物がみんなつながってきます。最初の生物からのつながりと広がりがあったからこそ、様々な生き物が生きているということを解説している本です。私はこういう本を『せいめいのれきし』などと一緒に御紹介しています。『せいめいのれきし』は時代ごとに生き物たちが変わっていくということを挿絵で示してくれますが、その中でどういうつながりがあるって現代の私たちの時代になっていくかというのが断片的になりがちです。ですから、その過程について、『ながいながい骨の旅』であれば魚から私たちへのつながりを感じていただけるかもしれないし、『Grandmother Fish』であれば体を動かすこと、コミュニケーションすることという点でのつながりを感じていただけるかもしれません。この『いのちのひろがり』という本については、単純に魚から私たちへということではなく、全ての生き物たちが地球上でつながっているんだということに気付かせ、つながりを感じさせてくれる。それによって、時代ごとの変化だけではなく、全ての生き物たちのつながりを感じるということが、『せいめいのれきし』だけでは難しいけれども、これらの本によって可能になるのではないかと考えて紹介しています。

全ての動物、植物、菌類が、元をたどればある1種類の生き物にたどり着く、みんなつながっているとお話しすると、なぜそんなことが分かるのかと聞かれることがあります。大人の方に説明するのであれば、DNAという言葉を使って、「私たちはDNAという、ATGCの4文字のアルファベットからできる暗号を身体の中に持っています。これは全ての生き物に共通しています。だから、誰かがこのDNAを持ち始めてそれがずっと継承されているから、その誰かから進化した菌類も植物も動物もみんなつながっていると説明したほうがいいですよ」というのが一番早いと思うんです。しかし、遺伝子とかDNAという言葉は、中学生になってからしか使えません。作者の中村先生はDNAの専門家ですけれども、DNAという言葉は素直に出せないのが、子どもに伝えるためには回りくどいことをしなくてははいけません。し

かしDNAという言葉を知っている子どもが読むのであれば、そういう言葉を補ってあげてもいいかもしれません。

それでは、ちょっと簡単に御紹介します。

(『いのちのひろがり』の一部を朗読)

こんなお話になっています。先ほど申し上げたように、DNAという言葉は出てきませんでした。自分たちの周りにいる生物がつながって広がって、そして現代の私たちが暮らしているというお話です。

もう一つ御紹介しましょう。これは絵本ではなく一般書で、多分中学生以上向きかなと思います。『生命の星の条件を探る』<sup>24</sup>という本で、東京大学の阿部豊(1960-2018)という先生が書いています。この本の巻末の解説は、研究仲間だった奥様の阿部彩子さんが書かれています。その中にこんな文章があります。

夫が現在の生命の星の条件を探る研究を仕事にするようになったきっかけは、幼稚園の時に出会った一冊の本に遡ります。それは、『せいめいのれきし』(バージニア・リー・バートン/文と絵、石井桃子/訳)という本でした。

日本では1964年に最初に翻訳出版され、現在も版を重ねているその本は、地球が始まってから今日までの歴史を、全部で5幕、34場の舞台で見せていくという趣向のものです。(中略)現在まで到達したあと、さらにこう開くのです。

「さあ、このあとは、あなたがたのおはなしです。その主人公は、あなたがたです」

この本を読んでもくれた方々が、科学者阿部豊と一緒に、「地球以外にも生命の星はある」という「信念」を「科学」に変える探究を応援して参加してくださるなら、こんなに嬉しいことはありません。

生命の起源は地球だったのかという問いに対して、実は地球ではなかったんじゃないかとか、隕

24 阿部豊 著『生命の星の条件を探る』文藝春秋、2015。

石などと一緒に細胞が地球にやってきて、そこから地球上の生命が始まったのではないかと、生命の起源は地球だけではないという研究も出てきています。これまでは、地球で生命が誕生したと教わっていますが、今後は、もしかしたらそれだけでは偏った考え方になってしまうのかなとも思っています。ですから、このような説も紹介していかなければと思っていたところで、まずは「せいめいのれきし」の読書体験からこのような研究を始められた阿部さんの本を御紹介しました。多くの方は御存じだと思いますが、阿部さんはALS（筋萎縮性側索硬化症）という難病と闘っていらっしやって、2018年の1月に亡くなりました。ですから、今は彼のお弟子さんなど後に続く人たちに、生命の起源を探索していくという研究のリレーをつないでいただかなくてははいけない。お弟子さんや後輩、様々に続く人たちが、このリレーを続けてくださると信じています。

それでは最後のクイズです。ティラノサウルスやトリケラトプス、ステゴサウルスといった恐竜の名前を学名と言います。この学名が付いている恐竜は全部で何種類くらいいるのでしょうか。① 1,000種、② 1万種、③ 10万種という三択にしました。

① 1,000種という控えめな方。55名。

② 1万種という方。69名。

③ 10万種というギャンブラーな方はいますか。2名。ありがとうございます。

今のところの正解は① 1,000種です。少ないと思われるかもしれませんが、実際にこの数え方は、人によってこの種は有効だ、無効だという判断があります。今回は、『語源が分かる恐竜学名辞典』<sup>25</sup>を書かれた松田真由美さん調べです。「先生が1,000種くらいって言うから、私、調べました」とおっしゃって、2018年の3月末現在で1,125種とのことです。恐竜の新種は、今でも毎年、多いときには50種から60種出てきます。毎週世界のどこかで1種は新種が登場している計算で、どんどん増えていますので、1万種に投票された方も、

10万種に投票された方も、長い年月を経ると必ず正解になります。楽しみに待っていただきたいと思います。

なぜこの話をしたかという、私がいろいろなところで恐竜の話をするとき、よく出てくる質問が10年くらい前から変わってきたためです。最初は自分が年を取ったのかなと思ったんですが、全国どこに行ってもそうだったので本当に世の中変わったんだなと学習しました。

20年前だったら「どうやったら恐竜学者になれますか」と聞かれていたのですが、最近ではそれに加えて、「自分が恐竜学者になって、やる残っているんでしょうか」と余計な心配をする小学生男子が増えています。そういう子たちには「恐竜は、今知られているのは1,000種類くらいなんだけれど、おそらく三畳紀、ジュラ紀、白亜紀で何十万種といたはずで、そう考えると少々なことでは恐竜が全部知り尽くされてしまうということはない。君たちのひ孫の頃になってもまだ新種は出てくるはずだから、心配しなくていいよ」と申し上げるようにしています。

それからもうひとつショックだったのは、小学生女子の質問も変わりまして、「お給料いくらもらえるんですか」と聞かれるようになりました。最初は真面目に答えて、うちの博物館の広報には、「夢を壊さないように答えを工夫してほしい」なんて言われました。それで、ある時また給料のことを聞かれて、ふと考えて、「お父さんやお母さんはいくらもらっていらっしやるの」と聞いたんです。何千万円ですとか言われると困るなと思ったんですけども、そうしたら「知らない」って言われました。だから、正確な金額を確認したかったのではなくて、多分学校でいろいろなキャリア教育を受ける中で、お給料のいい職業なのかどうかということを確認したかったんだなということが分かり、少し安心しました。

まあそんなことがあって、まだまだ恐竜の研究は続きますというお話です。

そして最後に、『せいめいのれきし』関連でも一つ。生物学者の福岡伸一さんも、子どもの頃『せいめいのれきし』が大好きだったということは、福岡伸一ファンの方は御存じだと思います。福岡

25 松田真由美 著、小林快次・藤原慎一 監修『語源が分かる恐竜学名辞典』北隆館、2017。



さんの場合は僕と違って、絵だけを見てにこにこしていた子どもじゃなかったことは間違いありません。『ナチュラリスト』<sup>26</sup>という、福岡さんの新しい本が新潮社から出ています。その中に『せいめいのれきし』もちょこちょこっと登場して、「真鍋さんは『せいめいのれきし』の表紙に名前が載っちゃって、いい思いしてるなあ」みたいなお話も出てきます。

福岡さんが最近、雑誌にこんな文章を書かれています。

ただのモノ知りと教養のある人はどこが違うのか。(中略) 決定的な差は、時間軸を持っているかどうか、ということである。(中略) 時間軸を持っていると、人類がどんな苦勞をして、いかなる失敗を繰り返して発見を行ってきたか、その学びのプロセスを自分の中に組み立てることができる。すると個々の知識はその幹に連なる枝葉のようにおのずと配置され、自然に身につき、たとえ固有名詞を忘れたとしても、すぐに幹からたどって思い出すことができる。<sup>27</sup>

この中に、「時間軸」という言葉が出てきます。僕も当然、今日お話ししてきたように、地球の歴史が46億年あって、古生代、中生代、新生代という時間の流れの中で、恐竜の時代が終わって私たち哺乳類の時代が来たという時間軸というのがすごく重要だと思っています。一方、福岡さんの場合は、人間がいつどのようにして気付いたり発見したりしたのかという科学と人間の時間軸のことを語っています。その中にはほとんどない勘違いやねつ造もありますが、人類がどうやって苦勞して一步一步真実に近づいていったのか、歴史を遡って理解していくと、きっといろいろな知識のつながりが頭に入る。そうすれば、単純に固有名詞は忘れても、ストーリーが自分の中に定着するのではないかということで、福岡さんは時間軸という言葉が使われています。これは、僕が今日お話しした時間軸という言葉とはまた違った、人類の科学史、サイエンスの歴史という意味が含まれています。ですから、彼の文章を読むときには、科学史や人間の歴史、生命の歴史も含めて、その中でいろいろなつながりや広がりを感じていただけるといいんじゃないかと思います。

26 福岡伸一 著『ナチュラリスト』新潮社, 2018.

27 福岡伸一「わたしの・すきな・もの」『婦人之友』112巻8号, 2018.8, p.11.

「自然と自然史に興味をもつきっかけを作ってくれる絵本」紹介資料リスト

(東京本館) → 国立国会図書館東京本館で所蔵

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
1	せいめいのれきし：地球上にせいめいが生まれたときからいままでのおはなし 改訂版	バージニア・リー・パートン 文・絵, いしいももこ 訳, まなべまこと 監修	岩波書店, 2015	Y11-N15-L529
2	いのちのひろがり = LIFE STORY INSIDE US	中村桂子 文, 松岡達英 絵	福音館書店, 2017	Y11-N17-L145
3	ながいながい骨の旅	松田素子 文, 川上和生 絵, 桜木晃彦, 群馬県立自然史博物館 監修	講談社, 2017	Y11-N17-L167
4	深読み!絵本『せいめいのれきし』	真鍋真 著	岩波書店, 2017	ME561-L34
5	Grandmother fish : a child's first book of evolution First Feiwei and Friends edition	Jonathan Tweet, illustrated by Karen Lewis	Feiwei and Friends, 2016	Y11-B1198
6	生命の星の条件を探る	阿部豊 著	文藝春秋, 2015	ME21-L29 (東京本館)

講義概要

子どもの発達と絵本・読書

秋田 喜代美

1. はじめに一第四次「子供の読書活動の推進に関する基本的な計画」について
2. 読書の始まり—乳児期からの絵本
  - ① 絵本の魅力とデジタル化の進展
  - ② 赤ちゃんからの絵本
  - ③ 心理学の観点から
  - ④ 乳児期後期と幼児期
3. 幼児期の発達と読書
  - ① 幼児と家庭での読み聞かせ
  - ② 物語の理解と産出
  - ③ 読み聞かせとまなざし
  - ④ 事例を通して その1—Aちゃん
  - ⑤ 事例を通して その2—赤ちゃん・誕生に関する絵本を用いた取組
  - ⑥ 事例を通して その3—子どもたちの生活と絵本
4. 児童期の発達と読書
  - ① 追跡調査で見えてきたこと
  - ② 小学校での事例を通して
5. 中学生・高校生の発達と読書

※ この講義概要は、秋田先生の御講義を基に、本講義録用に事務局にて作成したものです。

## 子どもの発達と絵本・読書

秋田 喜代美



プロフィールを御覧いただければお分かりになるとおり、私は児童文学や図書館情報学の専門家ではありません。保育所や幼稚園、小中高の先生方の専門性開発や、校内研究会に行きアドバイスをするをメインとしている研究者です。ただ、娘が小さい頃の読み聞かせを録音し、博士の学位論文で分析したということもあり、このようなお話もさせていただいています。

今日は「子どもの発達と絵本・読書」ということで、絵本専門士の講座でお話していることと一部重なる部分もあるかもしれませんが、御容赦いただければと思います。

### 1. はじめに一第四次「子供の読書活動の推進に関する基本的な計画」について

2018年4月に第四次「子供の読書活動の推進に関する基本的な計画」(以下「第四次計画」という。)が閣議決定されました。この計画を私が「子供の読書活動推進に関する有識者会議」(以下「有識者会議」という。)の座長として取りまとめさせていただいたこともあり、少しこの計画についてお話しさせていただきます。

第四次計画については、すでに御存じの方も多いかと思いますが、今お見せしているのは、文部科学省が出している第四次計画の概要図<sup>1</sup>です。現状として、貸出しの冊数や全校一斉読書実施校の割合は増えています。不読率は、小学生と中学生では改善していますが、一方で高校生は相変わらず高いままです。ここから、有識者会議では、なぜ高校生で不読率が高くなるのだろうと議論しま

した。

その中で、やはり小学生・中学生までの、本や絵本が好きというところから始まる読書習慣の形成が不十分なのだという意見が出ました。後でも詳しくお話ししますが、高校生で本を読まない層の中には、「読む時間がない層」と、中学生までの間に本から離れてしまう「読む習慣がない層」の2種類がいることが分かっています。また、学業や部活動など他のことが忙しく読書への関心が低下していることや、スマートフォンの普及等が要因として考えられています。

そこで今回の計画では、第一に、発達段階を加味し、各時期・発達段階に応じた効果的な取組に力点を置いて考えていくことが計画のポイントになっています。これは第三次までの計画にはなかった観点です。

第二に、単に大人から本を薦められる存在ではなく、自らも読書推進をする主体としての子どもというのが重要ではないかという点が挙がりました。これは、新学習指導要領<sup>2</sup>で「主体的・対話的で深い学び」が盛り込まれたことに関連するものです。特に中高生に関して、友人同士でも本を薦め合うなど、子ども同士が読書への関心を高めるような取組を推進しようということです。この背景にある思いは、常に大人から薦められ読まれる対象ではなく、子ども自身が横の関係をより密にし、共に読むことを喜び合う形を作りたいというものです。

第三に、情報環境の変化についてです。これが読書環境に与える影響については、パイロット校やモデル校以外ではほとんど十分な分析がなされ

1 文部科学省「第四次「子供の読書活動の推進に関する基本的な計画」の概要」<[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/30/04/\\_icsFiles/afieldfile/2018/04/20/1403863\\_001\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/30/04/_icsFiles/afieldfile/2018/04/20/1403863_001_1.pdf)>

2 文部科学省「平成29・30年改訂学習指導要領「生きる力」」<[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/index.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/index.htm)>

ていません。ですから、デジタル環境と読書に関する調査研究を、全国を対象に進めようというものです。毎年いろいろなデータを集めているのですが、2018年は情報環境の変化に焦点を当てて取り組む予定です。

これらの推進体制として、学校、図書館、それらを支える地域、自治体という形で、具体的な方策を挙げているのが、第四次計画です。

この第四次計画と合わせて、2017年、全国の自治体の調査をしました。報告書は文部科学省のホームページからダウンロードできます<sup>3</sup>。具体的には、子どもの読書活動推進計画を自治体が策定しているかどうかということが、子どもの読書推進を担当する部署にどのような影響があるかを調査しました<sup>4</sup>。調査の時点では、全都道府県と、主な政令指定都市や中核都市の多くが、読書活動推進に関する計画を策定していました。しかしそれよりも小さい自治体、つまり、子どもに直接手が届く市区町村では、特に小規模な自治体の場合、人手不足等により計画が策定されているところが少ないということが分かりました。

関連して、別のデータを御紹介します<sup>5</sup>。第四次計画が出た後、これに基づき各自治体でも計画が策定されました。これについて、自治体の計画の策定状況と、他の施策の関係について調査しました。すると、計画を策定している自治体とそうでない自治体ではっきり違いが出ている項目があります。例えば、読書に関するボランティア等の育成、読書活動推進に関するプログラムの工夫、家庭における読書推進、保護者への読書活動推進については、計画を策定している自治体の方が、実施率が高くなっています。

読書活動の推進には、教育委員会と首長部局、そして地域全体が協力するということが重要です。自治体の多様な部局と連携した取組を行うには、「計画がある」ということが重要なのです。

また、単に計画を立てているだけなのか、あるいは既に実施して評価し反映するというPDCA

サイクルを循環させているかということについても、分析しました。やはり計画—実施—評価のプロセスをきちんとモニタリングしている自治体が、様々な施策を行っています。

これらのことから、子どもにより多くの機会を提供するためには、自治体が計画を立てることで、読書活動推進の中でも、一人一人の努力でできる部分と、自治体や様々な関係者がネットワークでつながることで可能になる部分がより明確になるのではないかと考えております。

## 2. 読書の始まり—乳児期からの絵本

### ① 絵本の魅力とデジタル化の進展

今、スライドでお見せしているのは、シンガポール国立図書館の写真です。以前、こちらの図書館のカンファレンスに呼ばれて、子どもの絵本や読書についての話をしたときに撮影しました。いいなと思ったのは、図書館の入り口に、「幸せのための読書」、「Reading Books for Happiness」と書かれていたことです。今日は読書と学力等、いろいろなお話をいたしますが、この「幸せのための読書」というのは、昨今言われている well-being、つまり生涯にわたって人が豊かに幸せに過ごすための基本になる発想かと思えます。

私は中国にも仕事で行きます。この写真は、福建省の困窮地域の学校の様子です。御家庭で絵本を読んでいる写真を撮影して持ってきてもらい、それを学校の壁に貼るという運動をしています。校長先生がこの運動を促して実施したことにより、この学校はいろいろな面で力の付く学校として伸びています。

本の魅力というのは、本を読んでいる人には分かりますが、本を読まない人にも、写真で「見える化」することで、こうやって楽しめるんだということを理解してもらうことができます。

私は特定非営利活動法人ブックスタート（以下「NPOブックスタート」という。）の理事を務めています。NPOブックスタートを始めた頃、「赤ちゃんが絵本を見るんですか」と言われました。その時に、キラキラした目の子どもたちの写真を出してお応えしてきました。それから数年後、NPOブックスタートの活動において、もっとコ

3 文部科学省「平成29年度「子供の読書活動推進計画に関する調査研究」調査報告書」<<http://www.kodomodokusyo.go.jp/happyou/datas.html>>

4 前掲注(3), pp.5-59.

5 同上, p.32.

コミュニティとのつながりを前面に出したいと考えたときにも、赤ちゃんと本を手渡す人、そしてその周りで笑って支えている人たちの写真を全国で発信しました。これがブックスタートとコミュニティという発想を広めるのに有効であったと考えております。このような、写真による「見える化」というのは、読書活動推進に限らず大事なことだと思います。

さて、御存じのように、昨今はデジタル化が大変進んでいます。活版印刷術は、ヨーロッパでは1445年頃に発明されたと言われていました。それ以降進展してきた情報化は2000年代に入り一層加速しています。スマートフォンに至っては、登場してまだ10年程度ですが、私たちのコミュニケーションの在り方を大きく変えました。皆さんもその実感がおありかと思います。

そういう中でも、やはり私は、絵本や本はスマートフォンやアプリで見るとは置き換え不可能なものであろうと考えています。本題に入る前に、一冊の本を御紹介します。

これは *Mirror*<sup>6</sup> という本です。最初のページに英語とアラビア語が書かれています。英語ですので、小学校や中学校、高校でも取り扱ってほしいなと思います。英語で書いてある文章を日本語に訳すと、「2人の男の子と2人の家族があります。一方はオーストラリア、もう一方は北アフリカのモロッコというところの様子です」ということが書かれています。それぞれの様子は全然違っていても、お互いにつながっているという内容の絵本です。私がこの絵本を知ったのは、シンガポールで絵本講座を受講した時でした。

本は観音開きになっていて、左右それぞれのページに、オーストラリアの風景とモロッコの風景が出ています。例えばこれは市場の対比です。どちらも同じように、カーペットを売っているお店の様子が描かれています。そして両方ともが、インターネットや本でつながっていることが伝わる絵が描かれているページがあります。

この絵本から、文化も地理も言葉も違う両方の世界が、つながっていたり暮らしの営みが似てい

たりする等、いろいろなことが読み取れるだろうと思います。この絵本に描かれているデジタル機器も、数年後の子どもたちは「これは何の機械？」と疑問を持つようになるかもしれませんね。この本は小さい子ども向けの本というよりも、いろいろなことを大人が考えながら、奥行きのある絵を楽しむという面があります。そういう意味で、こういうものはデジタルアプリではなく、このサイズの本を開くことに意義があるのです。それぞれの家族の暮らしの絵から世界が見えてくる、このような絵本の魅力を、いくつになっても子どもたちと共有していきたいなと思います。

## ② 赤ちゃんからの絵本

最初に、赤ちゃんからの絵本についてお話しします。

今回の講座では、絵本の魅力について多くの先生方がお話くださると思います。特に私は保育所や幼稚園等の園や学校等に関わるものですから、絵本と子どもと、それから絵本を手渡したり一緒に読んだりする大人との関係や、どういう場がそこに作られているのかという環境のデザインといったことが非常に重要だと思っています。

スライドでお見せしているのはブックスタートの写真です。教室のようなところに、小さな子どもたちがたくさんいますね。最近では1歳くらいから保育所に入るお子さんが増えていて、この1、2年で、2歳児以下の半分は保育所で育つようになるだろうといわれていますので、このような場面が増えてくるのではないかと思います。そのような場での、子どもと保育者・先生と絵本の三者の関係についてお話ししたいと思います。

私は元々が心理学ベースの研究者なので、例えばどういうふうになぞしを向けているのか、どのように指をさしたり発声したりするのかといった応答に関心を持っています。絵本とのふれあいについては、特に保育所や学校等では教育的な制度の中でカリキュラムがあり、また特定の場所が意味を持ちますので、こうした観点から見ていくことが大事だと思っています。

また最近、専門家に関する概念について、何をもって専門家とし、何をもって専門家の専門性が

6 Jeannie Baker, *Mirror*, London: Walker Books, 2010.

発達するといえるのかを研究する領域があります。例えば弁護士は判例から学ぶ。看護師や医師は症例から学ぶ。そういう意味では、絵本や図書館に関わる方は、様々な絵本や事例に出会っていくことによって、専門的な判断を培っていくことが重要であろうと考えております。

ここで、ブックスタートについても御説明したいと思います。ブックスタートは、赤ちゃんに絵本を開く「体験」と「絵本」をセットで手渡す活動で、2018年11月現在、全国で約6割の自治体が担ってくださっています。今お見せしているのは、ブックスタートが始まった国であるイギリスで以前出ていたパンフレットです。この赤ちゃんを見てください。赤ちゃんのまなざしから、視線の先にいる相手とこの赤ちゃんが愛着関係を築いていることがお分かりいただけるでしょう。絵本を通して、ただ共に読むというだけではなく、子どもと大人の間に見つめ合うまなざしが生まれることが、ここからよく見えてくると思います。

### ③ 心理学の観点から

さて、私の基本的な研究対象は0歳から18歳までです。その中で、彼らに対する質の高い実践というのは何なのかを考えています。御覧いただいているのは、ベルギーのルーヴェン・カトリック大学教授のフェール・ラーバース(Ferre Laevers)という方が提唱した「教育の質」について私が整理したものです。興味深いなと思い、日本にも紹介しました。

彼はあらゆる子どもの育ちに関わる実践について述べていますが、これは絵本や本との出会いの場においてもそうだと思います。大人は例えば、良い場所で読んでいるとか、良い専門家が読んでいるとか、良い絵本を渡しているということを質が高いと評価するかもしれませんが、子どもの側から見ると、安心してゆっくり楽しめる居場所であることと、それから対象への夢中・没頭がどれだけなされるかということが重要なのです。つまり、大人にとってはどのような実践や方法、理論に基づいているかという知識が非常に重要ですが、最終的に手渡される子どもにとっては、リラックスできることと没頭できることという二軸で決ま

り、それが最終的には子どもたちにとってhappinessや、資質能力の育成に関わるといえます。

それでは少し動画を見ていただきましょう。実際に場面をよく見ていただくことが、私の立場からいうと大変重要なのです。その後、お隣とペアで、何が見えたかということ議論していただくと思います。

(母親が赤ちゃんに絵本『もこもこもこ』<sup>7</sup>を読み聞かせる様子を撮影した動画を視聴し、受講者同士で話し合い)

いかがでしょうか。今、二人で話をしたことによって、自分が気付かなかったことを相手の方から聞けたというペアは手を挙げていただけますか？はい、ありがとうございます。聞き上手であるということはとても重要だと思います。それではそちらの方、相手から聞いて「なるほど」と思ったことを御紹介ください。

—「赤ちゃんがお母さんのことをよく見ていて、これを言ってほしいというタイミングをお母さんに求めています。お母さんはそれをさらによく見て、いいタイミングで返していて、顔を見ながら読むということがよくできていたなと思います。お話が進むにつれて、赤ちゃんはどんどん安心して、どんどん絵本に近付いてきて、最後はついに絵本を持って、そこで終わり、という感じでした。」

ありがとうございます。そちらの方にも伺ってみたいと思います。

—『「赤ちゃんがお母さんの声に反応しているね」と話しました。私は絵本にばかり目が行っていたのですが、確かに赤ちゃんが声に反応してうれしそうにしていることに、二人で話していて気づき

7 谷川俊太郎 文、元永定正 絵『もこもこもこ』(みるみる絵本) 文研出版、1977。なお、谷川俊太郎・草野満代 述、NPO ブックスタート 編『赤ちゃん・絵本・ことば』(「子ども・社会を考える」講演会シリーズ Vol.1) ブックスタート、2015、p.11 に、本講義で紹介された動画の写真が掲載されている。

ました。そう考えて思い返すと、赤ちゃんはお母さんの声を安心して聞いているんだなということに気がきました。」

ありがとうございます。姿だけではなく、声もよく聞くと、いつどのように応答しているかが分かりますね。

そちらも手を挙げられましたね。どうぞ。

—「『この赤ちゃんは普段からよくお母さんに本を読んでもらっているんじゃないか』と教えてもらいました。だから、初めは泣いていても、本を見た途端にずっと絵本の世界に入っていき、自分でも本をめくろうとしたんだということも教えてもらいました。」

ありがとうございます。映っていないことも推測していただきました。実はこれは、NPOブックスタートのある職員とお子さんの映像なので、そういう意味では確かに非常に慣れているお子さんです。

これは他の講演会や講座等でも見ていただいている映像ですが、そのたびにいろいろな反応、発見があります。例えば、赤ちゃんは次に何が起こるか見通しを持ちながらめくろうとしているとか、「ふんわ ふんわ ふんわ ふんわ」という場面に合わせて立ち上がっているんじゃないかとか、「ばちーん」という言葉に合わせて赤ちゃんの手が動くとか、最初は機嫌が悪かったのが良くなるとかですね。

それでは、話し合ったことも踏まえながら、もう一度映像を見ていただき、新たに気付いたことについてお話しいただきます。よく御覧ください。

(再び同じ動画を視聴し、2分ほど話し合い)

それでは伺ってみたいと思います。見て気付いたことをどうぞ。

—「すごく、赤ちゃんが集中しているなと思いました。みんながああいうふうに集中して聞いてく

れたらいいなと思いました。」

そちらの方はいかがでしょう。

—「多分、何度も何度もお母さんは読み聞かせをなさっていて、子どもさんは最後まで全部覚えてしまっている可能性がある。というのも、あるところから、この子どもさんはお母さんと同時にページをめくろうとしていたので。自分から、自分でページを持って次に行きたいという気持ちが出てきたのかなと感じました。」

ありがとうございます。子どもの手の出し方を見ると、ページの次に何があるという予想をして、寄って行って見ているんじゃないかということですね。逆に考えますと、この子は11か月なので、指さしは出ていません。わかりますか。寄って行くことや触ることはするけれども、「これなあに」の「これ」を指さすという言語発達の部分はまだ見られず、まだその時期ではないということが分かると思います。

私がいつもこの動画をいろいろな絵本の講座でお見せしているのは、いろいろな要素が詰まっているからです。読み方や、この絵本そのものの魅力、子どもの姿。そして、親はほとんど映っていませんが、この親子の関係がどのようなものか、そして二人がどのように同期しているかということが見えてくるかと思います。

これに関連して、乙部貴幸先生という方の実験を御紹介します<sup>8</sup>。

子どもが絵本の画面のどこを見ているかを調べる実験です。使用する絵本はどれもおなじみのものです。子どもがどういうふうに眼球を動かしたかとか、読み手側がどこを見て読んでいるかが分かる装置がありまして、それを用いて解析しました。

この乙部先生の実験の問いは、一つは声に出し

8 乙部貴幸「絵本の読み聞かせにおける乳幼児の視線計測」日本発達心理学会第25回自主シンポジウム「絵本の読み聞かせが子どもと養育者の認知・行動に与える影響—視線検出器を用いた実験場面から長期的な行動変容まで—」話題提供資料, 2014. なお、日本発達心理学会大会委員会『日本発達心理学会大会論文集』第25回, 2014, SS7-4 (p.48) に、同発表の要旨が掲載されている。



て絵本を読むということがどういう意味を持つのかということです。ですので、絵本の絵だけを提示した場合と、絵と一緒に声がある場合の違いを見ています。読み声の有無が、4か月、10か月、1歳半、3歳のそれぞれの段階でどういうふうに影響するかを実験しています。結果を見ますと、読み声があったほうがより絵本を注視する傾向があります。この差の幅は各段階によって異なります。最も差が開くのは10か月頃、先ほどビデオで御覧いただいた赤ちゃんくらいの月齢です。

読み声があることによって、絵本をよく見るということは分かりました。しかし乙部先生は、これは声があるから見ているのか、音があるから見ているのかということをも更に問います。

そこで次の実験では、10か月の子どもを対象としました。比較対象は、音がない場合、絵本に合わせてクラシック曲をBGMで流す場合、母親が絵本を読む場合、そして乙部先生が当時勤めていた短期大学の女子学生が絵本を読む場合の四つのパターンです。この四つのうち、どれが一番長く絵本を注視するかを調べました。どれが一番長いと思われるか？

それでは結果を見てください。多分、皆さんの予想に反すると思います。私も驚きました。

まず、音が出ないものとBGM、BGMと人の声では大きな差があります。10か月の子どもでも、人の声を読んでいるかどうか判断できるのです。一方、お母さんかそうでない人かということについては、大きく違いはありません。もちろんそのときの関係や状況による部分もありますが、これはつまり、お母さんでもお父さんでも、他のいろいろな人が読んでも、やっぱり、絵本の言葉を声で届けることが大事だということを示唆するもの一つではないかと思えます。

#### ④ 乳児期後期と幼児期

絵本には、赤ちゃん絵本でも文字が付いています。それでは子どもはいつ頃から文字を見ているのか。これも、機械を使って調べることができず。

こちらは、音がない場合と声に出して読んだ場合についての実験を基に作成したグラフです。一

番大きく違いがあるのは3歳のところですが、大人はもちろん文字を読めるので、大きな差はありません。けれども、子どもがどこをよく見ているかをみると、3歳くらいからよく注視をするということが分かっています。

行動変化は、ちょうど10か月頃に最も大きくなってきます。人の声による話しかけがそれを引き起こしていますが、それは母親だけによるものではありません。また、絵本がいくらあっても、早くから文字のある絵本を読めば文字が習得されるということはありません。やはり子どもは子どもなりに、必要なときに変化をしながら、絵本を楽しむようになっていくのだと思います。

さて、こちらは約10年前にブックスタートで伺ったお宅で撮った記録で、親子で絵本の読み聞かせをしている時のお子さんの発話です<sup>9</sup>。子どもは絵を大人以上に楽しんでいるということのよい例かと思ひ御紹介します。

お母さんとさくらちゃんが、『ちいさなねこ』<sup>10</sup>を読んでいます。これは、木の上に登った子猫に向かって、犬が吠えている場面です。これを見たさくらちゃんが、「なんでこれ、なんでこれ、取れちゃったの？」と聞きます。どういうことか分かりますか。そうするとお母さんのほうは、「高い木の上だから、こうやって描いていて、猫が登ってるのよ」と言う。この場面では、木の全体像が描かれておらず、幹の途中から下が途切れています。ですので、子どもから見ると、木の幹が途中で取れて猫と一緒に宙に浮いているように見えるんです。

これは発達時期的なものですが、この絵を子どもはよく見て、よく考えているということが伝わってくると思います。子どもたちは本当にくまなく見えています。特にこのさくらちゃんは言葉がよく出るお子さんだったので、それがよく私たちに伝わってくるのです。

9 菅井洋子「乳幼児期の絵本場面における「絵」をめぐる母子間の認知行動のズレ」日本発達心理学会第25回自主シンポジウム「絵本の読み聞かせが子どもと養育者の認知・行動に与える影響—視線検出器を用いた実験場面から長期的な行動変容まで—」話題提供資料、2014。なお、日本発達心理学会大会委員会『日本発達心理学会大会論文集』第25回、2014、SS7-4 (pp.48-49)に、同発表の要旨が掲載されている。

10 石井桃子文、横内襄 絵『ちいさなねこ』（こどものとも）傑作集）福音館書店、1967。

これは、母さん猫が、遊んでいる子どもや自動車を通り抜けて子猫を探しに行く場面です。さくらちゃんは「おかあさん、これぶつかっちゃう」と言い、猫のしっぽの横、子どもの絵を指さしています。お母さんは「ぶつからないよ」「この子たちはサッカーして遊んでるの」と答えます。この絵は遠近法で描かれていて、猫のずっと奥にいる子どもがちょうど猫のしっぽにぶつかりそうな位置に小さく描かれているんです。三次元を遠近法で描くことについて十分に分かっていない子どもたちにとっては、ぶつかってしまいそうだと見えるのでしょう。

この記録から、三歳くらいの子が、絵本の絵をすみずみまで楽しむということが分かります。そして、よく描き込まれた絵本の価値も見えてくるかと思えます。大人には当たり前のことでも、子どもから見ると不思議なことが、絵本や本の世界にはもっといろいろあるのかもしれない。

### 3. 幼児期の発達と読書

#### ① 幼児と家庭での読み聞かせ

次に幼児期についてお話ししましょう。

実は保育所や幼稚園に行く子どもたちについては、保育課程や教育課程というものによって、絵本を経験することの必要性が文言で規定されています。

私にとってショックなデータ<sup>11</sup>なのですが、今、家庭での読み聞かせ回数は年齢が上がるとともに少なくなっているのです。幼児期に絵本を読むことが語彙の獲得において非常に大きな役割を担うということは、海外のデータではたくさん出ています。けれども、このデータによると、年長時に、ほとんど毎日読み聞かせをしてもらっている子は、2割弱です。週に3、4日以上は3割強しかいない。保護者の方が忙しくなっていらっしゃるのも一因です。ですから、保育所など集団的な場で読み聞かせを経験させてあげてくださいとお伝えしています。私は新宿区の子ども読書推進会議関係の仕事もさせていただいています。子どもたち

がいろいろな絵本に出会い、いろいろな本に触れる経験をできるように、図書館から各保育所への団体貸出等をしていただくようお願いしているんですけども、こういう状況です。御家庭で読むことの楽しさ、本を親子で楽しむ機会が減ってきているということは、個人的にはゆゆしきことだと思っています。

#### ② 物語の理解と産出

さて、認知的に言えば、物語の理解についてだけでも、ちゃんと話すと90分以上かかってしまうのですが、今日は要点を絞ってお話します。

3歳から5歳頃というのは、脳科学的に言っても言語力、語彙力等が一番増える時期です。3歳くらいになってくると、単純なお話からだんだん展開のあるものを理解し、そこから今度は自分で語ることもできるようになります。これはちょうど子どもの遊びとも関連がありまして、「ごっこ遊び」ができるくらいの頃に、お話の流れも分かってくるようになるのです。また、だんだんルールや筋が通っていくのと同時に、例えば「夢から覚めたら元通りになっていました」という『不思議の国のアリス』のようなお話も、5歳くらいになると理解できるということが分かっています。また、この頃に同じお話を繰り返し読むことの効果を調べる研究も進んでおります。

私は、さっきの赤ちゃんに代表されるように、子どもの見通しの力がとても大事だと思っています。それは、読んで理解をするということに限らず、わくわくしながら次を見通す経験も、繰り返しの中で育っていくためです。見通しと振り返りが、未来への時間を作り出し、人が生涯にわたり高次の思考力を育てていくために大事だといわれています。

脱線しますが、片付けが得意な人、手を挙げてください。片付けの力は、本来3歳から5歳くらいで育ってほしいものです。でも、先ほどのアンケート<sup>12</sup>によると、この年齢では十分には育っていないようなのです。なぜなら親がやってしまうからです。小学生以上でも、親が自分の子の力で

11 ベネッセ次世代育成研究所 企画・制作『幼児期から小学1年生の家庭教育調査報告書 第1回』ベネッセコーポレーション、2013、p.55.

12 前掲注(11)、p.33.

育っていないと認知するものの一つが、片付ける力です。けれども、片付けるということは、次の行動の見通しが持てるということと多分つながっているはず。その見通しを持つ力が、これからの自分の行動をモニターできる力につながっていきます。ですから、ページの間合いをドキドキしながら予想するといった絵本の力は、見通し力、予期を育てるのではないかと思います。また、これはまさに同化、つまりさっきの赤ちゃんが「ふんわ ふんわ」のところで立ち上がった反応、あのようなものを生み出すのではないかと思います。

### ③ 読み聞かせとまなざし

スライドでは、集団の読み聞かせを研究した結果をお見せしています。対象は図書館ではなく保育所です。特殊な眼鏡をかけてもらって、そこに赤外線当てると、どこを見ているかが分かる機械があります。これを使うことで、特に一対一ではない場合に、読み手がどんなふうにも子どもを見ているのかを調査するという研究です。

これはベテランの保育者のデータです。声をかけなくても、まなざしを向けることによって子どもを誘うというのが読み始めのところ。読み始めると子どもが反応し始めます。読み手はそれを見ながら、特にページをめくった後、例えばちょっと注意がそれている子どもの方を何度か目を配りながら、戻ってきてくれるように促したりします。これは皆さんの経験とも一致すると思います。さらに後半部分、絵本をちゃんと見ているかということより詳細に、注意深く見えています。そして読み終わった後、子どもたちの表情をもう一度見るというサイクルが繰り返されているようです。

私はまだ絵本での実験は行っていませんが、保育者と子どもがやり取りしながら見ている食事場面について、若手の保育者とベテランの保育者はそれぞれどこを見ているかを解析してみました。その結果を見てみますと、どちらかというと若手の保育者の方が、視野が狭いのです。よく「視野が広がる」といいますが、それが物理的に起きているということが、明確にデータに現れました。

慣れないときほど、こちらを見てくれている子や気になる子、近いところだけを見るんです。それがベテランになるほど、奥まで視線が広がるのです。もちろん絵本の読み聞かせでいえば、一対一のときと一対複数のときでは状況が違いますし、まなざしだけではなくうなずき等いろいろな行為によってやり取りが成立すると思いますが、このような違いを、物理的にも見られるようになってきています。

ところで、絵本が子どもの発達にどう影響するのか。私は子ども自身のアイデンティティの源泉につながると考えています。しかしそういう部分はなかなか調査や実験では分かりません。ですので、私がこれまでに会った例をいくつか紹介したいと思います。

### ④ 事例を通して その1—Aちゃん

まず一つ目は、私が関わっている神奈川の保育所で、担任の先生が語ってくれたものです。この子がAちゃんというお子さんです。Aちゃんは感性が豊かで理解力があり、相手を笑わせるのが得意ですが、集団の輪に入りにくいお子さんです。また、みんなが何かをやっていると、意図的に「やらない」と言ったりします。みんなのことが気になるので、遠くまで離れてはいきませんが、なかなか参加しない。家庭も不安定な状況があるお子さんです。

これは制作の場面ですが、みんながやっているときは離れています。そうすると先生が構ってくれるということもありまして、他の子が終わったところにおもむろに現れて先生に構ってもらおうという様子で、なかなかみんなとうまく関わっていません。

その子が『ロボット・カミイ』<sup>13</sup>というお話に出会います。最初は、先生が皆に紙芝居で読んであげました。すると、面白いことに、Aちゃんは「わたし、この本、好きじゃない」とわざわざ先生に言いに来ました。それがだんだん好きになっていったので、先生は、今度は絵本で少しずつ読んであげました。そして、「去年のお兄さんお姉さ

13 古田足日 著、堀内誠一 絵『ロボット・カミイ』福音館書店、1970。

人も、『ロボット・カミイ』を読んでもらって、カミイの絵を描いたり、箱でカミイを作ったりしたんだよ」と、先生が誘導するのです。

するとAちゃんは家に帰って、『ロボット・カミイ』の絵本を思い出して、絵を描いてきます。それがこの絵です。真似て描くのが上手なようです。そして今度は、空き箱でカミイを作り始めます。まさに絵本の世界から自分の世界につながっていくのです。興味深いことに、この子は、友達との関係をうまく作れていないので、カミイを保育所に置いておいて誰かに壊されるといけません。そこで、カミイを家に持ち帰って、また持ってくるのです。

ここで一つ良いことに、先生が親御さんに、この本読んでいるんですよと伝えました。するとAちゃんの親はその本を買ってくれて、Aちゃんがどこでも安定して自分の好きな本を読める状況ができました。

これはAちゃんが自分で『ロボット・カミイ』を読んでいる写真です。これくらいの頃に、先生が意図的に聞くんです。「最初は嫌いだったのよね。どうして好きになったの？」と。するとAちゃんは、「カミイが意地悪して独りぼっちになったところが、かわいそうだったから」と言います。それを聞いた先生は、この子の日頃の様子から、この子がカミイと自分を同一視しているのだろうと感じます。

そして、先生が「このカミイはAちゃんの作品」と周囲の子どもたちに伝えると、みんなはカミイを作るのを手伝ってくれようとしています。Aちゃんも、以前は拒んでいたのですが、この頃には素直に受け入れられるようになり、一緒にカミイを作っていきます。

このようにAちゃんは、絵本の世界が現実の世界につながり、それまでうまくいかなかった友達とのつながりができていく経験をします。すると、今までAちゃんは集団の輪から外れていたのですが、周りの子がAちゃんの作っているカミイにひかれて、「Aちゃんみたいに作りたい」と思うように変わっていきます。Aちゃんと周りの子どもたちの関係が深まっていく条件ができていくのです。

実はAちゃんは、家族の関係が複雑でなかなか落ち着かなかったのですが、『ロボット・カミイ』と出会うことによって、居場所を得て、それが周りの子をつないでいったのです。

このAちゃんにとっての『ロボット・カミイ』のような本を、我々は「忘れられない本」と呼んでいます。必ずしもこんなにうまくいくとは限りませんが、このように忘れられない経験を得られる絵本と出会うことが、その子の思いを満たすだけじゃなくて、人と人とをつないでいきます。今まで言われていたように、絵本を読むのはその子にとっていいよという話だけではなくて、発達段階に応じた横の関係もつないでいきます。そして、子どもさんのこういう話を聞くと、それによって親御さんも安定するんですね。

#### ⑤ 事例を通して その2—赤ちゃん・誕生に関する絵本を用いた取組

もう一つの事例を御紹介します。これは『きみのいたばしょ』<sup>14</sup>という絵本です。御覧になったことのある方、おられますか？赤ちゃんを扱った絵本は数多くあります。この本は、お子さんのためだけではなく、親にとっても、子どもが少し大きくなってから見ると、心が満たされるものだと思います。

これも先ほどの、私が関わっている保育園です。毎月お誕生会に親を呼んで、赤ちゃんが生まれたときの絵本や赤ちゃんの絵本を読むということをやっています。これを保育系の会合で御紹介しましたら、皆さんも取り組みはじめてくれています。

ここに2枚、赤ちゃんの写真があります。1枚は、この月に誕生日を迎えた子が、生まれたときの写真です。もう1枚は実は、この子たちの担任が生まれたときの写真です。子どもに「これ誰だと思う」と聞いても、絶対に担任だとは分かりません。担任が「私よ」とうれしそうに言うと、子どもたちはとても驚いて、どうしてこのおばさんとこの赤ちゃんがつながるんだろうと不思議に思うようです。

この『きみのいたばしょ』という絵本は、以前

14 スタジオネーブル 写真、池田伸文、コロセ・ジュンジ 絵『きみのいたばしょ』NORTH VILLAGE, 2010.

台湾で講演したときに御紹介しましたら、台湾でも翻訳本が出版されました。

それでは、読んでみたいと思います。

(『きみのいたばしょ』 朗読)

今スライドでお見せしているのが、この絵本を初めて聞いたときの子どもたちの表情です。この絵本は子ども向けとはいえ本ですけれども、子どもたちが胸に手を当てていて、聞いているお父さんも涙ぐんでいます。これは5歳児のクラスです。こんなふうに、子どもたちはこの絵本と出会います。お誕生会の中では、保護者にもインタビューをします。参加した保護者が、インタビューを受けたおかげで、子どもが生まれてくる前の様々な感情やエピソードをたくさん思い出し、感謝と幸せを感じることができたと、感想を書かれていました。子どものための絵本というよりも、親子で一緒に人の育ちについて分かち合える絵本といえるでしょう。この園では、このような赤ちゃんに関する絵本をコレクションのように集めています。海外のものも含めて、出産や生まれて1年くらいまでの成長を描いたものを楽しんでいます。これはまた別の月の誕生会の写真ですけど、お母さんの方が涙ぐんでいますね。あるお父さんは、写真を持ってきてくださいって言ったら、立会い出産したときの動画まで持ってきました。保護者の中でも、今月はどういう絵本を聞かせてもらえるんだろうと思っているようです。

#### ⑥ 事例を通して その3—子どもたちの生活と絵本

これは別の保育園です。品川にある本当に小さな園で、雨の日は室内がうるさくなります。そこで、ちょっとした工夫で、テラスで読んでいます。子どもたちはこうして、いろいろな場で読んでいます。面白いなと思ったのが、本を持っている子ではなく、脇から絵本をのぞき込んで見ている子が、最後に「ああ読んだ」って言っていたのです。「ああ、今日面白かったね」って。子どもにとって読むというのは、正面から読むだけではなくて、

仲間と共に読むことも含んでいるのだと思いました。これは幼児だけではなく、小中高でも、分かち合って読む楽しさを是非感じ取っていただけるといいなと思います。

こちらの写真ではトイレに「こん」と「あき」<sup>15</sup>がいます。子どもたちが落ち着く場所に絵本があるんです。子どもにとって、絵本は本としてあるわけじゃなく、刻み込まれているので、こんな場所にもあるとホッとします。そんな子どもの生活と絵本が必ずつながっている世界を作り出していくことが大事ななと思います。

これはいろいろな場所で、親と一緒に絵本立てを作りながらお気に入りの絵本を立てる活動です。それからこちらのスライドは、今随分多くの園でやっておられますが、今日先生が読んだ本を置いておくんです。今日読んだ本がどれか、分かるように見出しを立てておくだけでも、子どもたちが手に取る割合が変わってきます。また最近では、付せん紙などに「○○ちゃんの持ってきた本」と書いて本に貼ることもありますね。子どもがどんな本をみんなで分かち合いたいたいが、一目で分かります。

このスライドはある園の様子です。『かわ』<sup>16</sup>を階段の壁に貼っていて、毎日階段を上るたびに子どもたちがこの『かわ』を楽しんでいるのです。このように生活の中で絵本が根付いていくということが、発達という点で、家庭と園、園と小学校、小学校と中学校という発達の連続性をつなぐことにつながります。また、『ロボット・カミイ』『きみのいたばしょ』のお話でもお伝えしましたように、保護者と情報を共有し、連携を作っていくことが、これからの絵本を支える場には求められていくのではないかと思います。

このスライドは、図書館が家庭向けに行っている読み聞かせワークショップの様子です。絵本を紹介するのではなく、お宅では絵本を読むときに何をどこで読んでいますかということをお話してもらいながら、親と一緒に楽しむ方法や、うちはこうしているよといったことを共有するので

15 林明子 作『こんとあき』福音館書店、1989。

16 加古里子 作『かわ：絵巻じたてひろがるえほん』福音館書店、2016。

す。

#### 4. 児童期の発達と読書

##### ① 追跡調査で見えてきたこと

ここでまた最新のデータを御紹介します<sup>17</sup>。今私たちは、3歳から小学4年生までの期間の追跡調査をしています。これは縦断研究という手法で、最初の3歳の頃には1,400人くらい対象者がいたのが、小学4年生の頃には引越しなどの事情で500人くらいになっています。毎年、保護者に協力をいただいて、どれくらいの本をどんなふうに読んでいるか、そしてそれが子どもの言語発達やいわゆる思考能力にどう影響するかということを調査するものです。

ここから見えてきたことのひとつが、世帯年収は絵本の読み聞かせや言語力に何も関係がないということです。これは海外のデータでもいわれていることですが、日本では特にその傾向があります。一方で、母親の学歴と強い相関があります。これもヨーロッパのどの研究でも同じ結果が出ています。絵本を読むことや将来的な言語能力・論理性に対する父親の影響は、母親の半分です。それが良いことか悪いことかは別ですが、母親の学歴は、3歳から5歳までの読み聞かせの頻度に影響があります。その頻度が、小学校の2、3年生で、本をどれくらい読んでいるかということに影響します。

私たちは語彙力を調べていまして、それが言語能力と影響があるということが分かっています。また、児童期に一人でどれくらい本を読んでいるかというのが、最終的に言語能力に影響を与えています。一方、子どものときによく絵本を読んだらと言語能力が高くなるといいますが、そのような関係は見られません。絵本をよく読むことは、小学校以上で本を手にしてみる頻度に影響があります。つまり、読書をするのが子どもの論理力や言語力に影響を与えているのです。

一方で、読み聞かせを毎日することや、その時

間を長めにとることは、親御さんと読書について会話をすることに影響しています。つまり、幼児期に親子で絵本をめぐる会話ができていることが、小学校になっても親子で本について語ることに影響しています。これは言語能力には影響はありませんが、論理能力には影響があります。性別については、小学校中学年くらいまでは一般に女子の方が言語スキルは高いので、その影響が出ています。月齢についていえば、4月・5月くらいに生まれた子と早生まれの子では、同じ時点で調査をするとやはり違いがあるという結果も出ています。

つまり、幼児期から児童期初期までの頃に、本や絵本の豊かな経験をしていくことには意義があるということです。子どもは今も、この小学4年生以降にどう変化していくかというのを調査しているところです。

##### ② 小学校での事例を通して

このスライドは静岡の小学校の写真です。この学校では図書館に行くとき必ず「図書袋」を持っていきます。そうすると、図書館の帰りに図書袋に本を入れて帰ります。一年生のときに図書袋を持っていくよう習慣付けることが重要だと思いました。

次の写真は、ペアで絵本を読みあう活動です。このような活動も重要かと思います。

私は、絵本は全ての子どもにとって有効だと思っています。これは福岡の筑紫女学園大学の稲田先生の事例<sup>18</sup>で、特別支援学級でのことです。

その学級には、肢体不自由で排せつがうまく自分でコントロールできないお子さん、Bくんがいました。同じ学級の子どもたちは、Bくんは臭いから嫌とか、漏らすから嫌といって避けてうまくいきません。それで先生は考えて、排せつに関する絵本をたくさん集めました。まずは、排せつを明るく受け止めるための絵本として、動物の排せつに関する様々な絵本を集めて、一緒に読みまし

17 荒牧美佐子・高岡純子・秋田喜代美・無藤隆「幼児期からの読書活動が児童期の言語発達に及ぼす影響」日本発達心理学会第30回大会ポスターセッション。なお、日本発達心理学会「日本発達心理学会大会論文集」第30回、2018、PS6-41 (p.456) に、同発表の要旨が掲載されている。

18 稲田八穂・難波博孝「「情動」に働きかける読み聞かせの実践：「排泄」をテーマにした読み聞かせのケーススタディ」『読書科学』57巻3-4号、2015.10、pp.89-100。<[https://www.jstage.jst.go.jp/article/sor/57/3-4/57\\_89/\\_article-char/ja/](https://www.jstage.jst.go.jp/article/sor/57/3-4/57_89/_article-char/ja/)>

た。Bくんだけではなく、そのクラスの他の子どもたちにも読んであげます。それによって子どもたちがオープンに排せつの話ができるようになっていきます。集めてみるといろいろあるものですよ。

それで今度は、だんだん排せつの話がタブーじゃなくなると、人間の話になっていきます。そして周りの子どもたちは、Bくんは障害があり、なかなか排せつのコントロールがうまくいかないということが分かっていきます。みんなで絵本を読んでいく関係の中で、絵本を通して人がつながっていき、他の子がBくんを受け入れていく姿が見えてきます。

絵本もいろいろなテーマのものがあります。それらを焦点化してみると、見えてくるものは多いのかなと思います。

## 5. 中学生・高校生の発達と読書

最後に少し、いくつかデータを御紹介したいと思います。まずは不読率のデータです。先ほど、不読率はほぼ横ばいだというお話をしました。これは高等学校のデータです。1か月に1回も本を読まない子どもの割合が不読率で、ここ数年5割を超えています。この結果から、いろいろな機会をもって子どもたちに関わっていく必要があると思っています。

今スライドにお示ししているものは、第四次計画策定の際、有識者会議がベネッセ教育総合研究所に依頼してデータを解析してもらったものです<sup>19</sup>。分かってきたのが、小学校から中学校、中学校から高等学校と、学校を移行するところで不読率が上がるということです。もちろん、長い時間をかけて読書習慣がついて、恒常的に読んでいる子は一定数います。一方、普段学校がある日について、1日当たりの読書時間が0分という層が、小学6年生から中学1年生に、中学3年生から高校1年生にと進学するところで増えています。ですので、ここのバトンをうまくつなぐことが大事

なのではないかと思っています。

次のスライドは、小中高で2万人を対象に調査したデータをさらに解析して分析をしたものです。子どもの読書に対する家庭の関わりは、小中高と学年が上がるにつれてみるみる減っていきま。逆に中高生では、友達の口コミなど、友達の関わりは増えています。また、学校の関わり、つまり先生が本を紹介することなどは、あまり効果がないということがよく分かります。それが良いか悪いかは別ですけれども。

そして、スライドには「読書量に比例するのは読書認知」と書きました。本が役に立つとか好きであるという認識を持っていると、子どもは本を読むということも分かっています。読書量だけではなく、「本はわくわくして楽しい」という感覚をどうやって生み出していくかが大事だろうと思っています。

特に私が言いたいのは、学校において通年の読書推進計画を立ててもらいたいということです。これは、自分の学校は読書推進によく取り組んでいると思うかどうかを生徒に尋ねた結果と、その学校の生徒たちの実際の読書冊数について尋ねた結果を比較したデータです。両者の結果の間には強い正の相関があります。つまり、子どもをめぐる環境の違いが読書量の違いを生むのです。

読む子と読まない子がいるというのはよくいわれます。しかしその差よりも、読まない学校と読む学校があるということを私たちは発見しました。公立の学校においても、どこの学校に行ったかで、その子が本を読むようになるか否かがはっきり変わるのです。分析をしてみて、公教育でこのようなことがあっていいのかと思いました。どこの学校にも、読む子と読まない子はいます。しかしその差より、学校間の格差の方が大きいのです。読書活動推進に熱心に取り組んでくれる学校に通えば、本が苦手な子でも、読んでみようと思う機会を得ることができます。そうでない学校に行った場合、データで示されたような結果になることがはっきりしています。それでいいんだろうかと、私は常日頃思うのです。

一方、国の調査では、学力の向上に読書は効果的だというデータは出ていますが、それだけで

19 ベネッセ教育総合研究所「子どもたちの読書活動の実態に関して」(第2回読書活動推進に関するヒアリングご説明資料), 2017.9.12. <[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shougai/040/shiryu/\\_icsFiles/afidfile/2017/09/21/1395532\\_001\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shougai/040/shiryu/_icsFiles/afidfile/2017/09/21/1395532_001_1.pdf)>

はなく、子ども時代に、その年代に応じた絵本や本との豊かな出会いがあることが大事なんだろうと思います。

読書に集中すると読解力が向上することも分かっています。これは、国立青少年教育振興機構のデータです<sup>20</sup>。私たちがいいなと思っているのはこちらで、高校生の頃よく本を読む人は大人になってもよく本を読むのですが、そもそも読書が好きかどうかは、小学生や中学生、つまり義務教育段階までで決まるというものです。高校生の段階ではあまり影響がありません。やはり読書が好きかどうかは中学生までで決まるということが、データを解析して見えてきました。

今お示しているのは、同じく国立青少年教育振興機構のデータで、大人の方を対象として伺ったものです。私たちはこれを基に、子どもの頃の読書が大人になってからの意識などに与える影響について分析をいたしました<sup>21</sup>。20代、30代、40代、50代、60代と年齢別に約1,000名ずつ、合計で約5,000名の方を対象に調査を行っています。この結果から、小中学校の頃の読書量だけではなく、いかに多様なジャンルを読んだかということが、大人になってからの意欲や意識に影響があるということが分かっています。その人の年収以上に、中学生までにいい読書経験をしているかどうかということが、大人になってからの意欲の高さに影響を及ぼすのです。

先ほどもお話ししましたように、子どもの頃の

読書量は家庭の年収の影響を受けていません。つまり、どんな子どもたちにとっても、豊かな読書の環境や良い絵本との出会いがあるということが、生涯において意欲をもって未来志向であることや、様々な資質を身に付けるための基礎となるといえます。

最初に、シンガポール国立図書館の「幸せのための読書」という標語の写真をお見せしました。絵本と出会うことは、子どもたちの自分づくりにもつながります。また、絵本を介して大人と子どもがつながるといことはよくいわれますが、子どもと子どももまた絵本を通してつながっていくということが大変重要ではないかと私自身は思っております。以前『本を通して絆をつむぐ』<sup>22</sup>という本でも述べましたが、私は、子どもが安心して、夢中になり、本が好きだと思える地域をそれぞれに作っていくことを「読書コミュニティ」と呼んでいます。実際に、そういう世界ができればいいなと思っています。

生涯学習について初めて言及したのは、ロバート・ハッチンス (Robert Maynard Hutchins, 1899-1977) という人です。私は、「絵本の経験が子ども自身の心に生涯学習の灯をともし」と考えています。つまり絵本は生涯学習につながっていくのです。私は、絵本が発火装置となって、読書コミュニティがもっと生まれて、本を通した<sup>きずな</sup>絆が紡がれていけばいいなと思っています。

20 国立青少年教育振興機構「子どもの読書活動の実態とその影響・効果に関する調査研究報告書」2013。<[http://www.niye.go.jp/kenkyu\\_houkoku/contents/detail/i/72/](http://www.niye.go.jp/kenkyu_houkoku/contents/detail/i/72/)>

21 濱田秀行・秋田喜代美・藤森裕治・八木雄一郎「子どもの頃の読書が成人の意識・意欲・行動に与える影響—世代間差に注目して—」『読書科学』58巻1号, 2016.3, pp.29-39.

22 秋田喜代美・黒木秀子 編『本を通して絆をつむぐ：児童期の暮らしを創る読書環境』（シリーズ読書コミュニティのデザイン）北大路書房, 2006.



「子どもの発達と絵本・読書」紹介資料リスト

(東京本館) → 国立国会図書館東京本館で所蔵

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
1	きみのいたばしょ	スタジオネーブル 写真, 池田伸 文, コヨセ・ジュンジ 絵	NORTH VILLAGE, 2010	Y17-N11-J152
2	本屋って何?	秋田喜代美 監修, 稲葉茂勝 文	ミネルヴァ書房, 2015	UE111-L87 (東京本館)
3	最初の質問	長田弘 詩, いせひでこ 絵	講談社, 2013	Y17-N13-L616
4	Mirror	Jeannie Baker	Walker Books, 2010	Y17-B13024
5	本を通して絆をつむぐ: 児童期の暮らしを創る読書環境	秋田喜代美, 黒木秀子 編	北大路書房, 2006	UG71-H113

レジュメ

絵本を読みあい育ちあう

村中 李衣

1. 子どもに寄り添うとは、どういうこと？

- ・1分間の冒険～子どもの中に流れる時間に寄り添ってみよう～
- ・あなたの声が届く喜び～指示命令の声と異なる声の使い方に気づきましょう～

2. 絵本を介した響きあいの場を育てる

～マニュアルでなく、自分に似合う声を届けよう～

- ・『さわらせて』（みやまつともみ、アリス館、2014）を読みあってみる  
どこをどんな風にさわりたいの？ どんな風に自分を差し出すの？

3. 絵本の特徴を考え直す

- ・ペーパーバックとハードカバー
- ・大型絵本の問題
- ・めくる手・支える手が伝えるもの

4. 最近の仕事を通して学んだこと

- ・少年院での読みあいワークショップ
- ・小学校での読みあいワークショップ
- ・いろいろな場所での読みあいを広げて

参考文献

- 『保育をゆたかに～絵本でコミュニケーション』かもがわ出版
- 『絵本の読みあいからみえてくるもの』ぶどう社
- 『感じあう伝えあう ワークで学ぶ児童文化』金子書房

## 絵本を読みあい育ちあう

村中 李衣



皆さんこんにちは。村中李衣と申します。よろしくお願ひいたします。今日は皆様目が輝いておられて、随分学びを深めておられるのだと、始める前から身の引き締まる思いです。

私は1年前から朝、走るようになりました。走る経路は日によって違うのですが、ある経路では山を越えないといけないんです。山を越えると中腹に小学校があって、毎朝小学校の登校班の子どもたちが、その坂を上り下りしながら学校へ向かいます。6年生が黄色い旗を持ち、その後ろをみんなぞろぞろと歩いています。

昨日の朝、ちょうどその経路を走っていました。ここからは上り坂だぞというところに差し掛かったとき、坂の頂上に近いところに黒い塊が見えました。なんだろうなと思ったけれど、まだ下からだとよく見えません。近づいていくと黄色いものが見えてきました。もっと行くと、登校班の子どもたちが何かを取り囲んでいることが分かってきました。それが分かった地点へ走って行く間も、その塊の動きはありません。駆け寄っていき、見ると1年生の男の子が、黄色いカバーをかけたランドセルを背負ったまま倒れているではありませんか。側溝のグレーチング（金網）に足を引っ掛けて転んだようでした。

周りにいた子どもたちは、私が行った瞬間、どうしたと思いますか。

私の方を向いて、両手を背中に回したんです。そして一人の女の子が「両手をね、ポケットに入れとったけえ、こうなったんよ」。隣にいた子も「両手をポケットに入れとったけえ、いけんのんじゃ」。次の子も、「両手をポケットに入れちよったけえね、こうなったんじゃあ」。「両手がいけんのんじゃあ」。私はびっくりして、「誰もそんなこ

と聞いてない」って言いました。子どもたちはとっさのことにパニックになっていたんだから仕方がないと思いますけれども、1年生の一番小さい子が倒れたときに、「どうしよう」とか、「大丈夫かな」とか、「助けて」とか、そういったことは何もなく、まず全員が手を後ろに回す。これは、「私は無実だ」という気持ちの表れのような気がします。なぜ転んだかの理由を言うのも、日頃何かが起きたとき、大人が真っ先に「なんであんなこんなことしたの」「なんでそうなったの」と聞きただすからじゃないかと思いました。

私はそのとき携帯を持ってなくて、どうしようもありませんでした。だから近所に助けを求めようとして行ったら、近頃はみんな、容易には玄関を開けてくれません。大変な時代です。同時に、集団登校は集団で歩いているだけでちっとも機能していないんだなと悲しくなりました。集団登校には、ただ安全のためだけではなく、弱まっている地域でのつながりとか異年齢のつながりを育てるという意味もあったはずなんですけれど。

そのように考えたときに思い起こされたのが、詩人の伊藤比呂美が指摘していたことです<sup>1</sup>。ぐりとぐら<sup>2</sup>が、森の中で卵を見つけるところで、それまでの児童文学だったら、「誰の卵だろう」「お母さんは誰だろう」「お父さんは誰だろう」って卵を命として見たはずなのに、落ちていた卵を見て、「おいしそうだ」と言い、卵を食材として見るようになったという指摘です。子どもたちの一つ一つの営みも、私たちが文学の中で育ててきたものとの

1 「絵本のたのしみ」（佐藤和貴子 文、瀬川康男 絵「なんだかんだ」『こどものとも、年少版』通号 207号、1994.6. 付録）pp.2-3.

2 中川李枝子 文、大村百合子 絵「ぐりとぐら」『こどものとも』通号 93号、1963.12.

関わりがないとはいえないんじゃないでしょうか。

翻って「じゃあ私は」と考えました。私は「読みあい」ということをずっと言ってきました。それは読む側が読まれる側に一方的に本の情報だけを渡すということにとどまらないで、本を通してそれぞれの内側に生かしている物語がどう開いて、それぞれの物語がどんなふうに響き合うのかを見ていくということなのです。昨日の出来事を経て、大変な時代になったなあと思いながら、この読みあいというものをもう一回、自分に問い直して考えたいなと思っています。

## 1. 子どもに寄り添うとは、どういうこと？

### ① 1分間の冒険～子どもの中に流れる時間に寄り添ってみよう～

今日の始まりは、「子どもに寄り添うとは、どういうことか」とレジュメに書かせていただきました。子どもと一緒に過ごしているときに、子どもの内側に流れている時間と、それから子どもに寄り添う私たち一人一人の内側に流れている時間が、どんなふうに絡まっていたり、重なっていたり、少しずれたりしているのかを感じていただきたいと思います。これを感じておくことは、図書を通した子どもたちとの関わりにも必ず関係があると思うので。

ちょっと皆さんに動いてもらいます。

二人組を作っていただきたいんです。お隣同士で、よろしくねって、肩をたたいてください。「よろしくね」、ぼんぼんって。この二人でワークをやっていただきます。

私の話は、ちょっとあっちこっちに飛びますが、それはそれで大事なことがあるかもしれないので、お許してくださいね。今、ペアになってくださいって言ったら、皆さんは和やかに、さっとペアになられましたね。けれど、学生に同じように言うと、二人になれなくてぐずぐずしている子たちがいるんです。そのときに、「はい、二人組になれなかった人、手を挙げて」って言ったら、大体手を挙げないんですよね。恥ずかしいらしいんです。分かりますでしょうか？ところが、挙げるように声をかける方法があるんです。これまた、本と

は関係のないことを言っているなと思うかもしれないけれど、意外と関係あるんですよ。それはね、「はい、二人組になれなかった人、元気よく手を挙げて！」。これだと、わっと挙がるんです。これはどういうことなのかなと考えてみました。私が「元気よく」って言葉を発するとき、子音でいうと「g」と「k」の音が出ますよね。すると、自分の心の中にも口腔内にも小さな風が起こるでしょう。多分「元気よく」と言われた側も、この人には自分を責めようという心はなく、自分のことを湿り気なく明るく受け止めようとしていると察知するんだと思うんです。「どうもこの先生は、今自分を問いただす気はなくて、その後自分に不幸なことが起こるといってもないようだ」ということを、意味内容ではなく声で感じている。小さい人は特にそうなんじゃないかなと思います。だから、元気よくと言うとぱっと手が挙がる。「今日は宿題やってこんといけんかったね。でも残念ながらやってこんやった人、手を挙げて」って言ったら絶対挙がらない。「元気よく手を挙げて！」って言ったら、ぱっと挙がる。それはやっぱり、声に込められたものであって、響きあいだなと思うんです。

さて、寄り道しましたが、二人組になりましたね。今から「1分間の冒険」っていうのをやってみようと思います。今、二人組になれなかった人いますか。元気よく手を挙げて！いない。

こういうふうにします。じゃあちょっと、職員の方、前に来ていただけますか。

まず二人で向かい合います。手をまっすぐ前に伸ばして、相手の肩に届くくらいの距離に立ちます。そうして、1分間、黙って見つめ合います。1分経ったなと思ったら、目で合図して、二人でさっと座ります。

簡単でしょう？1分です。難しい？1分経ったら座っていいんです。時計は見てはいけません。見るのは相手の顔です。私は正確に1分を一これもまた考えようなのですが、正確にという言葉もちょっと曲者です。時計に従って1分経ったら、「はい」と言います。ぴったりかどうかお試しになってください。

じゃあ向かい合って。立って。はい、肩で距離

を決めて。では行きます。心を落ち着けて。しゃべっちゃだめです。

用意、スタート。

(1分間経過)

はい。どうでしたか？当たったかどうかはどうでもいいです。でも、私が「はい」って言ったときに、「ええっ？」とか「わあ！」とか声が漏れましたでしょう？あれは皆さんの中に別の物語があったからですよ。その物語と、時計が動かしただけの1分の物語が違うからこそ起こった驚きですよ。自分たちが考えたより早く1分が過ぎたという人。(会場挙手) じゃあ、もっともっと長かったという人。(会場挙手) 分からなかったという人いますかね。

大抵の人は60数えたんじゃないかと思うんです。60数えた人、手を挙げて。はい。でもそれは、私たちは1分イコール60秒と知っていて、1ずつ数えればいいという枠のようなものがあるからではないですかね。そして、実は自分たちが生きている時間はそうじゃないってことです。

じゃあ1分間の冒険その2。今度は共通の話題で、二人で1分間しゃべります。最近の新刊書についてでも、レファレンスの苦勞についてでも何でもいいです。これについて話しましょうというのを決めてください。映画でも、洗濯物の畳み方でも、お気に入りの柔軟剤でもいいです。

決まりましたか？じゃあ、じゃんけんしてください。

それじゃ職員の方、またちょっと来ていただけますか？さっきと同じように立ちます。じゃんけんをします。私負けましたね。そうしたら、負けの方の人から語り出すようにします。私が「用意」と言ったら、クラップ(拍手)してください。ぱちぱちぱちと。そして私が「はい」って言ったら、ハイタッチして、負けの方の人から、「あのね」と語り出します。あとは自由に二人でしゃべりあうんです。語り出しだけは、負けの方の人から。

ぱちぱちぱちぱち、ハイタッチ、「あのね、洗濯物の畳み方で、いいアイデアありますか？」って。そして1分経ったって思ったら、二人で同時

に座るんですよ。

難しい？でも、例えば試験のときとか、1時間って言ったら、試験しながら1時間を意識して時間内に終わらせるじゃないですか。大丈夫です。しゃべり続けるんですよ、1分間。

はいじゃあ立って。いきますよ、いいですか？用意、ぱちぱちぱち…はい、「あのね」。

(1分間経過)

はい、1分です。どうでしたか？さっきの1分間と今の1分間は同じでしたか？この体験をするまでであれば、こう聞かれたら「当たり前でしょう」と思ったかもしれませんが、実際には全然違いましたでしょう。これが、あつという間に時間が過ぎるということです。日頃は「あつという間に」と言いますが、ものすごくたくさんおしゃべりしている間に時間が過ぎましたね。

さて、これで本当に最後です。その3。また職員の方と私でやってみます。今度もじゃんけんしてください。負けた人、手を挙げてください。負けた人は、先生、若しくはお母さんになります。勝った人は、何か悪さをした子どもです。

私はお母さんになります。そして、職員の方、下のお名前は？

—「くにこです」

くにちゃん、前から言っているように、あなたはね、いい子すぎるからいろんなことに気を遣うでしょう？そういうところが母さんにしてみたらイライラするときがあるのよ。だいたいね、あなた、こないだだってね、みんなで水泳に行ったとき、遠慮して列の一番後ろに行ったから一回しか泳げなかった…母さんの顔見なさい！

と、こんな感じで、ずーっと叱り続けます。子どもは、そっぽを向かずにじーっと聞いていてください。叱る側は、1分間経ったなと思ったら御自由にお座りください。子どもは1分間叱られたなと思ったら、お母さんや先生に構わず座ってください。

くにちゃん、分かった？

—「はい」

という感じです。

じゃあ、「私先生になります」、「お母さんになります」って伝えてください。いいですね？じゃあやってみましょう。また最初はクラップして、ハイタッチして、お母さん若しくは先生になられた方が「だいたいね」って始めてください。

はいじゃあ、ぱちぱちぱちぱち、ハイタッチ、どうぞ。

#### (1 分間経過)

はい、どうぞ。どうでしたか。お母さんや先生と、子どもと、同じように向き合って同じ場所においても、流れている時間は多分違いましたよね。1分間は同時でしたか？ずれていましたよね。そちらの方、お子さま役でしたか？

—「はい」

お子さん、先に座っていましたね。でも、お母さんの方はまだまだ言い足りないからまだ言う。例えば児童文学の創作でいうと、子どもの方はもう十分だと思っても、書き手の方がもっともって伝えなきゃと力が入りすぎることがあります。それから学校で考えたら、先生が皆のためだと思って良いことを言っているときほど、子どもの中では「先生の気持ちはもう分かった」と心の中で終了していきがちです。また、絵本の読み方でも、こうやって読まなければいけないと強く思いつぎすぎると、なんだかずれてしまうということもあるかと思えます。決して正解は一つにはならず、だから面白い。自分の中であふれている思いと、子どもの中の「なんで先生は、この話をそんなに胸がいっぱいの顔して読むのかな」という思いとで、その一つの間が成り立っていることを承知しておくのもとっても大事なことです。この、一つ一つの何気ないことの中にたゆたう一人一人の時間の物語をちょっと意識すること、これは読み方にも関係してきます。いろいろなところで言われている読みのあり方についても、この後でお話しますが、ちょっとこの話を覚えておいていただければと思います。

で、皆さん、「ちょっとこの人、こんな面白いことばかり言っていて終わるのかな」と不安かもしれないので、研究的なことをお話しします。

今年の夏、私は徳島大学医学部の先生方と一緒に、NIRS<sup>3</sup>による脳機能計測を用いて、読み聞かせの仕方が読み手・聞き手それぞれに与えるイメージの違いについて研究<sup>4</sup>をしていました。というのも、現場の先生たちの研修会に行くと、未だに必ず聞かれるんです。「自分は学校では、『絵本は感情を込めて読むと子どもたちに強い特定のイメージを与えてしまうから、イメージを限定しないように淡々と読むのがよらしい』と習ってきたが、しかし現場で読むとそうもいかない。だからつい感情を込めて読んでしまうけれど、どっちがいいんですか」と。もう何年も前から聞かれるんです。

本当のところは、最初に「淡々と読むのがよろしかろう」とおっしゃった先生方は、「本の世界を壊さないような、尊重した読み方をしましょう」ということだったと思うんです。それがいつの間にか読み方のノウハウにすり替わってしまったために、混乱しているのだらうなと思ったんです。

それで、絵本を読む初心者とベテラン、つまり保育者や学校の先生を目指す学生と、何年もボランティアや読書活動をされている方の2つのグループで実験をしました。淡々と読んでくださいという指示と、御自由に読んでくださいという指示で、それぞれ絵本を読んでもらいます。そのときの、聞き手のイメージや読み手の緊張感、リラクソスの具合は違うのか、そういった相互作用を、NIRSを使って検査いたしました。読む本は昔話絵本と創作絵本の2種類で行いました。今回は『桃太郎』と『だくちるだくちる』<sup>5</sup>の2冊を読んでもらいました。まだまだ今後データを増やして丁寧検証していく必要がありますが、とにかく、「淡々と読まなければ子どものイメージを限定してしまう」とこんなに言われているのに、これまで実際にその根拠となる実験が行われたことは無いんです。

3 Near-Infrared Spectroscopy. 近赤外線光を用いて脳の血流、酸素代謝変化を測定し画像化する装置。

4 村中李衣・森慶子・森健治「読み聞かせ指導法が読み手に与える心理的負荷と聞き手に与えるイメージ」『ノートルダム清心女子大学紀要. 外国語・外国文学編, 文化学編, 日本語・日本文学編』43巻1号, 2019.3, pp.77-91.

5 V.ベレストフ 原案, 阪田寛夫 文, 長新太 絵『だくちるだくちる はじめてのうた』(日本傑作絵本シリーズ) 福音館書店, 1993.

今回の結果として、聞き手の脳反応は、淡々と読んでも、抑揚を付けて読んでも変わりません。無意味つづりを声に出して読んでいるときの脳の状態と比較すると、はるかにリラックスしていました。どちらの読み方で読んでも、脳のレベルでいうと変わらないんです。

ところが、読み手の方はそんなに簡単ではありませんでした。ベテランのグループは、淡々と読みなさいと言われても、「昔話を淡々と読むということは、文体に合わせた読み方をすればいいんだな」と、どうやら自分の中で置き換えをしてみようらしいんです。だから、まるでロボットかお経かみたいな調子で読む人はいない。経験を積んだ人は作品に合った読み方になっていくので、読み進めるうちに中盤あたりで脳の血流状態が落ち着き、リラックスしていくんです。だけれども、初心者の場合、昔話を「淡々と」読めと言われると、昔話の持っている抑揚を殺さなければいけないと考え、無理をして読みます。そのために、脳に大きな負担がかかり、脳の血流の活動状況を示す映像が、高ストレスを示す真っ赤になっていく場合があるんです。

ということは、これから絵本の読みを勉強しようという人に、あまり形で指示を出しても意味がないということなんです。それよりも、作品ときちんと向き合い自分の声をよく聞いて、そこで自分の声を聞いている人と自分の間に流れているものを大切にすれば、よほどおかしい読み方や場にはならないだろうと思うんです。今日の1分間の冒険で体験していただいたとおりにね。

今までは、「淡々と読むか感情を込めて読むか」という問いを受けると、「この作品に一番似合う額縁を考える」という説明をしてきました。きっちりしっくりした枠が似合う作品なのか、それとも素手で手渡した方がいい作品なのかに合わせ、流木で作った額縁のような声で読んだ方がいい場合もあるし、かっちりした額縁がいい場合もあるでしょうというような例を挙げてお話ししていたんです。そのことを裏付けるという意味で、今回はそういう調査の結果が出てきました。皆さんも覚えておいていただいて、困っている方にアドバイスして差し上げたらいんじゃないかなあ

と思います。

## ② あなたの声が届く喜び～指示命令の声と異なる声の用い方に気づきましょう～

じゃあ次に行きます。今、声が大事ですよと申しましたね。それで皆さん、「声の道」というのを、意識したことはありますか？

20代の、それも子どもたちに関わる仕事をしようという人に、「あなたの声はお好きですか」と聞くと、大抵の人が嫌いだって言うんです。「あなたはその、自分で好きじゃない声で子どもたちにつながるんですか」と言うと「ああそうですね」と。

だからやってみましょう、声の道です。

こんなふうにやります。職員の方、お願いします。今回も向かい合ひまして、じゃんけんをします。私が勝ちましたので、勝った方が負けの方の人に、「何とお呼びしましょうか」と聞きます。—「くにちゃんとお呼びください」

「くにちゃんとお呼びください」とおっしゃったので、私はこれからマイクを外して、生の声で、「くにちゃん」と呼びます。あっちこっちに声の道を作って「くにちゃん」と呼びますから、くにこさんは、御自分の胸の真ん中に声が響いたら、手を挙げてください。分かると思いますか？

—「はい」

分かるって。素晴らしいね。分かるって言ってもらえたので、私も安心していきます。では目を閉じて。

(左を向いて) くにちゃん

(斜め右を向いて) くにちゃん

(上を向いて) くにちゃん

(正面を向いて) くにちゃん (挙手)

わあ。素晴らしいね。

御自分たちはどうでしょうか。やってみましょう。勝った方は負けの方の人の名前をあっちこっちに向かって呼び、1回だけ、胸の奥に届くように声を渡してみてください。どうぞ。

(「声の道」のワークを実施)

はい、できましたか？今見ていると、声がどう

通っていたと感じたかを説明されている方もいましたでしょう。右に来て、上に来て、斜めに来て、最後に正面に来たよねって説明されている方もいらした。声って意外とはっきり道を通して相手の胸に行っているんですね。

じゃあ今度は役割を逆にしてみましよう。どうぞ。

(「声の道」のワークを実施)

はい、どうでしょうか。

このワークにはたくさんの方の気付きがあると思うんです。まずはうれしかったでしょう。自分の胸にまっすぐ届く声を受け止めるのはうれしいことなんです。そして、受け止めてもらった側もうれしかったでしょう。だから、本を読んで届けるといのは、単に使命というだけではなくて、うれしいことなんです。そしてその読む声をもらうことも、うれしいこと。これは赤ちゃんに絵本を読むときに一番はっきり分かることですが、大きくなくても本来そうなんですよ。

そして今この会場には、何十人もの方がいらしゃいますね。この半分の方が、同時に、同じくらいのセンテンスで声を出したにもかかわらず、「ああちょっと、後ろの人うるさいっ」ってならなかったでしょう？つまり、本当に求めている道があれば、声はそこにすっと入ってくるものであり、うるさくなんかないんです。教室で「うるさい！」と言っているときは、話し手側は自分の道が定まらない、聞き手側は自分の道に届けてくれる声が見つからないときです。

そう考えると、おはなし会をするとき、自分はいつもこの位置に座って、子どもたちはここで、そのフォーメーションが崩れるとまるでいけないことであるかのように言うのはどうだろうかと思いませんか？作品によって、語る人によって、声の道の作り方はみんな違うわけです。ですから、その声の道を大切にしたり語りをしてもいいのです。また、もしかしたら、ごそごそ動いて話を聞いていないように見える子どもは、自分の胸の真ん中にその声が届くように調整しているのかもしれない。そんなふうに考えると、読みの現場で「困っ

たこと」といわれるいくつものことが解決するんじゃないかと思います。

それから、お母さんたちによくあることで一つ。私は子どもが二人いて、特にお兄ちゃんがいつも私を怒らせる。でも文句を言えるのは料理しているときぐらいしかない。それで、小言を言うときは大抵ねぎを切っている。ねぎを刻んでいると、なんだか悔しさが込み上げてくる。だからまな板の上のねぎを切りながら、「本っ当あんたたちはなしてこげなかね。ほんとに母さんは腹が立つ！ほんともう、なんで分かんねー！」って言う。すると、私の「声の道」はまな板に向かっていきますから、子どもには届いていないんです。まな板は理解してくれているかもしれませんが。

だから、本を読むときにはどの色の服がいいとか、ネイルアートをしている人は手袋をはめて読んだ方がいいとか、もちろんその方がいいかもしれないんですけど、もっと大事なことがあるということに心を留めたいなと思うんです。

## 2. 絵本を介した響きあいの場を育てる

～マニュアルでなく、自分に似合う声を届けよう～

### ①『さわらせて』を読みあってみる

それでは、実際に絵本を1冊読んでみようかなと思います。

みやまつともみの『さわらせて』<sup>6</sup>という本です。御存じですか？初めての方、元気よく手を挙げて。じゃあ、ちょっと読んでみます。

(『さわらせて』音読)

これが『さわらせて』という作品です。かわいらしい絵で、物語の展開は、最初のページと次のページで応答関係を作っており、二拍子になっているといいますか、一、二、一、二と繰り返される本です。私はよく小児病棟でこの本を読みます。

一人ずつにどんどん読んでもらうので、みんな

6 みやまつともみ 作『さわらせて』アリス館, 2014.



耳を澄まして聞いて。大切なのは、読む人じゃなくて聞いている人です。声を聞いて、どんな場所が見えるか、どんな感じの動物たちか。一人ずつの声が見せてくれるものは、ジェスチャーたっぷりに表現しようとしなくても、その人の声とか間合いで違った風景になるの。耳をよく澄まして聞いてね。

じゃあ、いってみようと思います。

「さわらせて」。

(受講者を指名して) じゃあ、いぬ。(その隣の受講者に向かって) いぬさんに、「さわらせて」って言ってみてください。みんな耳で聞いててね。はい、どうぞ。

—「いぬさん ちょっと さわらせて」

なんだか遠慮がちですよね。(他の受講者に向かって) 今、腕を広げてる感じがした？すぼめてある感じがした？すぼめている感じがしたね。ほら、見えてるじゃない。腕をすぼめて、「いぬさん、悪いけどいいかな。私も事態がよく分かってないんだけど、とりあえず触らないといけないみたいだから…」っていう感じが出た。いい声、正直な声だったね。

じゃあ、いぬさんはどうだろう。耳を澄まして聞いてみましょう。

—「いいよ せなか さわっていいよ」

相手の心持ちを全部理解して、私も協力いたしましょうという感じでしたね。

じゃあ、次行きましょう。

(後ろの席の受講者に向かって (以下同様)) ねこさんに言いますよ。はい、どうぞ。

—「ねこさん ちょっと さわらせて」

ああ、小さい女の子が見えましたね。風に吹かれて飛ばされそうな感じがしない？お外の風の感じがしたよ。

そうしたら、ねこさんはどうかな。聞くよ。

—「くびなら いいわ ああ いいきもち」

ああ、でも他にも幸せがある感じですね。他にも幸せを持ってるけど、触らせるのもいいわって。というふうに私が言ったことに、「いいや、そうじゃない」と思うことが大事。私はそう思ったというだけで、そう思えというんじゃないんです。みんなそれぞれ、感じ方が違うんです。

じゃあ、うさぎさん。はい。

—「うさぎさん ちょっと さわらせて」

あ、なんだか探究心がある感じがしますね。ちょっとその耳のあたりをピンセットで採って調べてみたい、みたいな。

じゃあ、うさぎさんはどうかな。

—「どうぞ おしり さわってごらん」

うん、何でもないことよっていう感じですね。

じゃあ、次行くよ。ひよこさんね。耳澄ましてね。どんなふうにするのかな。

—「ひよこさん ちょっと さわらせて」

後ろに男の子がいて「おい！行ってこい！」って命令されたから、しょうがなく来たみたいな感じね。「わたし、あなたのこと触らないと後が怖い…」って。

じゃあ、ひよこさんはどうかな。

—「はい おなか やさしく さわってね」

どう？几帳面だったね。「はい、いいですよ。30度だけあなたの方に体を向けますから」って。几帳面ないい声でしたよ。

じゃあ次、かめさんに言ってください。

—「かめさん ちょっと さわらせて」

走り込んできて、その勢いで、わっと言いましたね。

かめさんはどうでしょう。かめさん、どこにいるかめさんかな。

—「いいよ こうら さわってみるか」

おお、このかめ元気でしたね。水の中にはいなかったね。岩の上に上がっていて、来るのを待っていたみたいな感じでしたね。

じゃあ、わにさん。わにさんに聞くよ。

—「わにさん ちょっと さわらせて」

ああ、怖くないんだね、わにさんのこと。そばに来て言ったね。

—「しっぽ だけだよ きをつけて さわってね」

うん、もう他のことで疲れてるね、今のわにさんは。いいよもう、触るくらいのは、っていう感じだったね。

今度はぞうさんに言ってください。みんな聞くよ。どこにいるぞうかな。

—「ぞうさん ちょっと さわらせて」

あら、<sup>お尻</sup>檻を開けて中に入ってきたね。すぐそば

で言ったね。

じゃあ、ぞうさんどうかな。言ってみてください。

—「はい はな どうぞ あくしゅ しょう！」

ああ、大分慣れてるねえ。いいよ、このくらいだったら大丈夫だよって感じだったね。

そうして、最後が、

さらさら ほわほわ もこもこ ふわふわ

つるつる ごつごつ ざらざらざら

さわってみると たのしいな<sup>7</sup>

って書いてあるんですね。

どうでした。私が今言った解釈が正しいということじゃなくて、聞いてみると私はこう見えたなとか、私はこういうふう感じたなとかが、お一人ずつの中にあっただしょう。本来、演じようとしなくても、本をめくったその日その時に自分が口に出す言葉の中には、風景があるんですよ。そして子どもはそれを感じる。だから、「ああ、ふじ組の先生よりゆり組の先生の方が格段にうまいな」みたいに評価して聞く子は誰もいないです。ふじ組の先生にはふじ組の先生が見せてくれる世界があって、ゆり組の先生にはゆり組の先生が見せてくれる世界がある。それを感じてもいいんだなあと思える場、響きあえる場を作ること。今、皆さん、だんだんに耳を澄ましてくださっていたじゃないですか。そういう場があれば、物語は生き生きするんだと思うんです。

## ② 小児病棟での読みあいから

私は今、<sup>きずな</sup>絆プログラムというものに関わっています。小児病棟に長期で入院している子どもとその御家族を対象にした、読みあいのプログラムです。その中でも、特に感染病棟の子どもたちは、面会が制限されています。大抵の場合にはお母さんが、そして週末にお父さんやおばあちゃんが交代して、ずーっと付き添っています。病室は狭くて、カーテンで仕切られた一人一人のスペースも幅があまりない。そこには長椅子があって、昼間

はその上に替えのバスタオルや荷物を置いていますが、夜はその荷物をよけて、付き添いのお母様がその細い長椅子で寝ておられるという状況です。お風呂もなかなか自由には入れず、大急ぎでシャワーを浴びていらっしゃいます。そのような状況だから、実は子どもも、すぐくお母さんに気を遣っている。そして他の家族はいろいろ我慢して家にいる。だから、そこをつなぐようなことをできないかなと思ったんです。

そこで、子どもが本を読んでくれて、それをお母さんや病室のみんなが聞いている様子を録画して、それを御家族に送る。もちろん、プロジェクト側では御家族の了承なしにはデータを公開しないという約束です。このプログラムでは、いつも何かをしてもらえばかりだった子どもが、自分が何かをしてあげられるんですね。読むことができない子の中には、兄弟が誕生日だけれどお母さんは自分のところに付き添いでいるからということで、私が本を読むときにその本のページを丁寧にめくってくれた子もいました。

その中で、この『さわらせて』を選んだ親子さんがいたんです。普段は本が決まったら、実物を持って行って、「どうやって読む?」「どこから映そう?」「パジャマはそれでいい?」って打合せするんですね。打合せすることも、ちょっと特別感があったいいじゃないですか。ところがその女の子は、点滴につながれていない方の手でぱっと絵本を持ちました。そしてすぐに「さわらせて」って読み始めて、「いぬさん ちょっとさわらせて」って、お母さんの方へずいっと顔を寄せていったんです。

そうしたらお母さんは次のページをめくって、「いいよ せなかさわっていいよ」って言って子どもの顔を見たの。

すると子どもは、その「いいよ」っていう言葉と一緒にお母さんが自分の方に体を寄せてきてくれた瞬間、照れたような甘えたような様子になって、すごくうれしそうだったんです。

ページをめくって、女の子が「ねこさん ちょっとさわらせて」って言ったとき、「じゃあ、これでもいい?」っていうふうに関心したんです。「ねこさんになったお母さんも、私のこと好き?」「私

7 前掲注(6), pp.29-30.

のそばにいるの、OK?」というふうに。そうしたらね、お母さんが、「くびなら いいわ ああ いいきもち」。それはまるで、ふわあってお母さんが背伸びしたみたいに聞こえました。そのときそこにいた誰もが、私も、もう一人いたボランティアの女の子も、そしてもちろん娘さんも、お母さんがまるで光のシャワーを浴びたみたいに感じました。病院のシャワーは浴びられなくても、世界一美しいシャワーを浴びているような、そんなふうに「ああ いいきもち」って聞こえたので、とっても安心したの。

そうしたら女の子が、もうどんどん聞いていったんです。「ちょっと さわらせて」って。そしてお母さんは、何を聞いても、「いいよいいよ」「どうぞ」って言うの。それをずっと聞いていると、女の子が「母さん、こんなに窮屈だけど、私のそばでいい?」「母さん、私何もしてあげられないけれど、いい?」って言っているように聞こえて。お母さんもそれに対して、「もちろんよ、あなたが生きていますもの。そんなこと何でもないのよ。うれしいのよ」って答えているように聞こえたの。

そして最後に、「さらさら ほわほわ…」女の子はここをすごく早く読みました。その後、女の子はお母さんを肩でつついて、「さわってみるとたのしいな」って言ったの。それは、「注射もあるし検査もあるし、いろいろあって嫌だけれど、でも母さんと一緒なら楽しいな」っていうふうに聞こえたの。そうしたらお母さんが、子どもをひゅっと抱きしめて、「触られるのも楽しいよ」って言ったの。この本にはないんです、そんな文章は。それはどういうことかという、この本は触る側の人間が主人公で物語が描かれているので、「さわってみると たのしいな」で終了なんです。でも、実際の読みあいの場になってみたら、触る側と触られる側は対等なんですよね。あなたがいるからこそその喜びがそれぞれにあり、それを伝えないわけにはいかなかったのがお母さんの言葉でしょう。だから、愛する娘の「さわってみるとたのしいな」というメッセージに、お母さんが「触られるのも楽しいよ」と答えた。それで終了して、よかったなあと思ったんです。

本に書かれているのは作者が考え抜いた言葉だから、書いてある以外の言葉は読んではいけませんとよく言われます。けれども、プライベートなそれぞれの読みあいの中ではそれも許されるんじゃないかなと思います。公共図書館で読む場合のお約束事とはちょっと違って、読みあいというとても個人的な場所の場合はそれでもいいんじゃないかなって。どちらが良い悪いではなくて、両方素敵だなと思います。だから、母さんの声があつて良かったね、子どもの声があつて良かったねって思ったんです。

読みあいってどういうことか、なんとなく理解していただけましたか。本を交換して読むということではなくて、相手の今この場でまなざしを受けながら、自分を差し出して行って、それが響きあって、読みの空間が育っていく。これを読みあいと言っているんです。

そう考えていくと、いろいろなことが風通し良く見えてくることがあります。

### 3. 絵本の特質を考え直す

#### ① ペーパーバックとハードカバー

例えば、ここに『てじな』という本があります。手品師のおじさんが手品を見せてくれるという絵本ですね。

これは最初、1998年に、年少版の「こどものとも」で出ました<sup>8</sup>。そのときはペーパーバックでした。その後、2007年になってハードカバーで再登場しました<sup>9</sup>。皆さん御存じですか？御存じの方、元気よく手を挙げて。

これ、現場で読む場合、どちらで読まれます？ペーパーバックで読むのとハードカバーで読むのが違うってことは意識されます？実は随分違うんです。今からお話ししますが、どちらが良いというのではなく、どっちがより生きるかというのが作品によって違うんです。それを大切にしたいなと思います。この絵本はその違いがとても面白いので、ちょっとペーパーバックで読んでみましょう。

8 土屋富士夫「てじな」『こどものとも、年少版』通号 254号、1998.5.

9 土屋富士夫 作『てじな』(幼児絵本シリーズ) 福音館書店、2007.

(『てじな』読み聞かせ)

最後に裏表紙を見せると、こどもたちから「おっちゃん！もいっぺん手品やって！おっちゃん！おっちゃん！」っておじさんに声がかかる。私でなくて。

でも、ハードカバーで読むと違うんです。御存じのように、ペーパーバックはページ周りが切り落としです。でもハードカバーの場合は、中のページより表紙が一回り大きい。ページの周りを、表紙のはみ出した部分が額縁のように囲んでいます。この額縁の中にお話が納まっていますから、読み手が手品のお話を読んでいることが強調されるんです。内容も、ページのサイズも一緒です。でも、読む側も、この固くてかっちりしたものを持っていますから、私は本を読む人だという意識が強くなります。ハードカバーで読んで、最後に裏表紙を見せたら、子どもたちは「おもしろかった！李衣さんもう一回読んで」って言います。でもペーパーバックで読んだときには「おっちゃん、もう一回やって！」と、読み手の私ではなく作中のおじさんに頼みたくなる。子どもたちが教えてくれた分かりやすい例です。子どもたちと直に結びあえるお話のときには、どちらかといえば、ペーパーバックの方が向いている。ハードカバーは逆に、その枠の中でお話を楽しんでいるということが意識される場合にいいんじゃないかなと思うんですね。

また『ぐりとぐら』<sup>10</sup>のお話ですけど、初めて読んだときにとても楽しかったですね。そしてあの卵、自分でも抱えきれないくらい大きいように思いませんでしたか？あれを読むとき、冷静に、「ははあん、この卵はノネズミの等身大だから、まあ、普通の卵と変わらないな。Lサイズの卵1個分だな。そうすると、これでカステラを作って全員が食べられるか？」なんて思う人はいないですよ。それは、私たちが等身大マジックにかかって、ノネズミのサイズから世界を見上げるような感覚でお話にすっと入っていけるからで、それは物語と直に結びあえるというペーパーバックの力

が強かったんだと思うんです。

この間イギリスに行ったら、この『はなをくんくん』<sup>11</sup>が、ペーパーバックで平積みされていました。向こうはペーパーバックが主流ですよ。でもこの『はなをくんくん』は、ハードカバーだからいいんです。なぜでしょうか。この本は御存じのように、中はずっと冬で、色のない世界が続きます。それが、だんだん春の気配ができて、それは匂いで嗅ぎ取られて、みんながその匂いに誘われて集まっていくと、最後に真ん中にボンと春の喜びの花が咲いている、というお話ですよ。ハードカバーだと、このページの外に見える表紙の縁が黄色でしょう？だから、中がずーっと冬のモノトーンの世界であっても、縁から、「待っていてね、もうすぐ春が来るよ」という思いが色で感じられる。だから私たちは、この中のモノトーンの世界を、この黄色い額縁で春の気配を感じながら、読み手に支えられて読むことができる。この黄色があるとないとは大違いですよ。だからこの作品は、やっぱり日本でハードカバーで出ていることに意味があるなあと思います。聞いている方もだけれど、語る方にも意味があるなと思うんです。あまり言及されないことですが、大切にされた方がいいかなと思います。

## ② 大型絵本の問題

それから、大型絵本について。保育や幼児教育を学んでいる学生たちを見ていると、実習先に大型の絵本があると必ずそちらを使おうとするんですが、これもたくさん問題があると思うんです。

以前、実習に行った学生がこんなことを言ったんです。

「先生、私『からすのパンやさん』<sup>12</sup>大好きだったんです。だから実習のとき、食育と兼ねて『からすのパンやさん』を読んだんですけど、大型絵本<sup>13</sup>を使って読んだら、いつもよりめっちゃ疲れたんやけど」って。

11 ルース・クラウス 文、マーク・サイモント 絵、木島始 訳『はなをくんくん』福音館書店、1967。(Ruth Krauss, illustrated by Marc Simont, *The happy day*, New York: Harper & Row, 1949)

12 加古里子 作『からすのパンやさん』(かこさとしおはなしのほん7) 偕成社、1973.

13 加古里子 作『からすのパンやさん』(ビッグブック) 偕成社、1997.

10 前掲注(2)

皆さんもそんな御経験がないですか。同じ作品でも、大型絵本になると、目で捉える情報量が大きすぎるために疲れてしまうんです。『からのパンやさん』は、画面からあふれるほどのパンの焼けた匂いや、いろいろな種類のパンに目が回るような気持ち、あのサイズだからこそちょうどエネルギーの出し入れのつじつまが合うんです。でも、大型絵本になると、画面に繰り広げられる絵のエネルギーが大きすぎて、全部読んでると疲れるんですよ。

じゃあ『ねずみくんのチョコッキ』<sup>14 15</sup>はどうでしょう。比べて御覧になったことがありますか。びっくりしますよね。今日は両方の資料を、ちょっと見てみたいと思います。

表紙を開きます。皆さん、内表紙にチョコッキは何枚ある？オリジナルは、タイトルの「チ」の字にかかっている1枚だけですよ。そしてここには誰がいる？いないよね。ところが大型絵本は、チョコッキは何枚ある？「チ」にかかっているのと、ここにもう出てきているねずみくんが着ているので、2枚。

次めくります。オリジナルは左から右に開いていきますが、大型絵本は右から左。向きが逆なんです。

めくって、

おかあさんが あんで くれた  
ぼくの チョッキ  
ぴったり にあうでしょう<sup>16</sup>

オリジナルの方は、主人公は一人です。一つの舞台に一人の登場人物がいるでしょう。これは、自分が主人公になるところが、人生の中で1回あるということ。でも大型絵本は、舞台下手から次の登場人物が出ていますから、最初から二人。

ページをめくると、オリジナルはもう一人来て二人になりました。大型絵本も二人。つまり、オリジナルは一、二となって、大型本は二、二とな

る。

次のページ (pp.6-7)。オリジナルは、次はあひるさんが主人公になって、自分が主人公になる機会が1回ある。大型絵本は、もう舞台下手からサルさんが現れていますからやっぱり二。

めくると、オリジナルは二人いまして、一、二、一、二と進んでいきますが、大型本はずっと二、二、二、二。オリジナルでは、それぞれの人物が1回だけ、一人になって「すこし きついがにあうかな？」と言う場面がありますが、大型絵本にはないんです。

そして、想像がつくかと思いますが、舞台の下手から現れる動物は次第に大きくなっていきますから、目線はどんどん、下手から次に出てくる人物に集まっていくんですね。

少し飛ばして、大型本の方で次に出てくるのは、もうどう見てもライオンですよ (pp.14-15)。でも、オリジナルの方は、この場面の主人公であるアシカがいます。

さらに進むと、ぞうさんが出てきました (pp.22-23)。オリジナルはこの場面の主人公であるうまがいますが、大型絵本の方はぞうがページの端からはみ出ています。ここでこんなに大きく出ている。ここから次のページをめくるときの子どもたちの驚きが違うというのは分かりますか。オリジナルの方だと、突然大きなぞうが現れるから「わあ」って驚きますけれど、大型絵本はページをめくる前からもう「わあ」なんですよ。

そして見てください、大型絵本の方では誰かが出てきました。舞台上手から、ねずみくんが出てきたんです。そして、ここでもうチョコッキがどんな有様になっているか見ているんですよ。一方のオリジナルは、ぞうさん以外誰も出てきていないでしょう。

オリジナルの方をめくると、ねずみくんが、

うわー  
ぼくの チョッキだ！<sup>17</sup>

そりゃあ驚きますよね。でも大型絵本の方は、

14 中江嘉男 文、上野紀子 絵『ねずみくんのチョコッキ』(絵本のひろば5) ポプラ社、1974。

15 中江嘉男 文、上野紀子 絵『ねずみくんのチョコッキ』(ポプラ社のよみかせ大型絵本) ポプラ社、2004。

16 前掲注(14)(15)、pp.2-3。

17 前掲注(14)、pp.28-29。

うわー  
ぼくのチョッキだ！<sup>18</sup>

あんたさっきから見とったやん。ここで驚くのはおかしいでしょうと、突っ込みを入れたくなりますよね。

次のページへ行くと、大型絵本では

ぼっ ぼくのチョッキ…<sup>19</sup>

とせりふが付いていますね。オリジナルは、伸びきったチョッキを引きずりながら、言葉もなくうなだれている。

そして、最後にめくると、オリジナルの方では奥付の上に、ねずみくんがいます。ぞうさんが、伸びてしまったチョッキを鼻に引っかけてぶらんこにして、ねずみくんを乗せてあげているんです。一方の大型絵本には、このイラストの隣に

よかったね  
ねずみくん！<sup>20</sup>

と書いてあります。いやいや、良くない。これは、奥付のページの上に、「ねずみくんへのせめてものおわびにこんなこともあったんだって」と、小さく無言の絵が置かれることによって、物語がデクレッシェンドしていくんです。でも、最後にぼーんと「よかったね ねずみくん！」と出てくると、「いや、良くはないだろう」と思ってしまう。

以前、ある方が大型絵本で読み聞かせをされたときに、「よかったね ねずみくん！」って読んだら、聞いていた子どもが「あ！分かった！」って言ったんです。続けて、「チョッキもう1枚あるもんね！」って。どういうことかお分かりですか？その子は、これはどうして「よかったね」なのかなって不思議だったんだと思うんです。そこで、ハッと内表紙の絵を思い出したんですね。絵の中にチョッキは2枚あったから、1枚は伸びてもいいんじゃないかなとその子は思った。

皆さんはこれをどう受け止められますか。子どもがそう考えて自分に取まりを付けようとしたことは理解できるけれど、それは作品の本意ではないですよ。たった1枚の母さんが編んでくれた大事なチョッキ、でもみんなで着回していくうちにくしゃくしゃになってしまった。これは別にチョッキじゃなくてもおもちゃでもあることだよ。子どもは、そういうことを繰り返しながら、「たった一つ」ということの意味を覚えていくし、心に残していくということですよ。それを「2枚あったから良かった」にしてはいけない。この大型絵本の作りや構成が、期せずしてそんなことを招いてしまったということを感じておきたいなと思ったんです。

だから、何でも大型にしたらいいというものではない。宮西達也の『おっばい』<sup>21</sup>も、あの小さいサイズで肩のところで開いていくからこそ、母さんのおっばいのことを思い出してちょっとくすぐったくて、ああ、ぼく（わたし）にも母さんの思い出があったよねって思えるんですね。それが、大型絵本<sup>22</sup>になって顔の真下に来ると、子どもがその有様を見上げて「大きすぎ。怖い」と思ってしまうようなこともあります。ですから、とても大切な作品であればこそ、その一冊がその形でそこにあることの意味を考えたいですし、それをしてくださるのも皆さんの力だなあとと思います。くれぐれも、「読みやすいように」「見やすいように」ということだけで大型絵本の方に走らないように、気にかけていただきたいなと思います。

### ③ めくる手・支える手が伝えるもの

次は「めくる手」「支える手」についてお話しします。

もちろん本を読むときには、表紙の書誌事項を必ず紹介するというのは大切なことだと思っています。それが小さい子どもさんたちの本であろうと、作者に敬意を払うという意味もあるし、子どもが大きくなったときに、何度も繰り返して聞いていた同じ作者の名前があるなと耳に留めること

18 前掲注(15), pp.28-29.

19 同上, pp.30-31.

20 同上, pp.32-33.

21 宮西達也 作『おっばい』(たんぼぼえほんシリーズ) 鈴木出版, 1990.

22 宮西達也 作『おっばい』(大きな絵本) 鈴木出版, 2005.

もありますから。

ですが、例えば、『ねこガム』<sup>23</sup>のように、そのことに縛られすぎない方が良い絵本もあります。ちなみにこれは最初ペーパーバックで出たのが<sup>24</sup>、そのときは裏表紙の魔法のねこガムの絵は一つだけだったんです。でもハードカバーになったときにガムの数が増えました。これは、ちょっとまずい。このガム、包みから出そうになっていますね。それをつまみ出して口に入れるところから、物語が始まっているんだと思うんです。

となれば、この『ねこガム』、「ねこガム、きむらよしお作」と表紙を読んでから、「クチャクチャ…」と本文に進んでいくよりも、裏表紙に描かれたガムを包みから抜いて表紙に戻し、そのまま表紙絵の男の子の口の中にガムを入れて、「クチャクチャ クチャクチャ… プー」って読んだ方がいいよね。一度最後まで読み終わって、裏表紙をみんなの方へ向け、そこにあるガムを見ながら「もう1枚、いく？」って尋ねてみる。そして聞き手と呼吸を合わせながらまた最初から「クチャクチャ クチャクチャ…」。全部読み終わったときに、ああ面白かったねって言って、最後に「『ねこガム』、きむらよしお作でした」と書誌情報を伝えるのもいいと思っているんです。何が何でも最初に作者の名前を読まなきゃいけないって考えるより、それが本当に作者に敬意を払うことかなと考えることも大事なかなと思います。

それは『ねこガム』もそうだし、『がたんごとんがたんごとん』<sup>25</sup>もそうです。「『がたんごとんがたんごとん』、安西水丸さく」っていうのは、最後に言ってもいいんじゃないかなって思います。絶対じゃないですよ。読み方次第であると言いたいのです。「がたんごとんがたんごとん」の表紙では、三両編成の汽車が背表紙につながっていますよね。ところが、表紙をめくると、汽車の先頭が表紙のときより少し前に出ているんです。そして、汽車の顔にぐっと力が入っているんです。だから、多分これは、表紙のタイトルを「がたん

ごとん がたん ごとん」と読んで、一呼吸置いてから表紙をめくって、「がたん！ ごとん がたん ごとん」と続けるのが良いのであって、その間に「安西水丸 さく」と言うことが、果たして必要でしょうか？最後まで汽車が走り終わった後に「この汽車は〇〇駅から発車したね」というふうに表紙に戻ってから、改めて表紙の書誌事項を言ってもいいんじゃないかなと思っています。

#### 4. 最近の仕事を通して学んだこと

さあ、それでは、実際に読みあいがどんなふうに生かされているのか、皆さんにお話ししたようなことを大事にすることで、現場でどのような読みあいが展開されているのか、それをお話したいと思います。

##### ① 小学校での読みあいワークショップ

私は読みあいのワークショップを全国でやっています。幼稚園でも、小学校でもやっています。やり方は至ってシンプルです。誰かと誰かがペアになって、「相手の人に似合うだろうな」そして「自分が読むならこれを読むといいかな」という両方の思いで、相手のために絵本を選んであげて、それを二人で読みあう。ただこれだけのことなんです。でも、子どもたちは絵本の探偵になって、たくさん並んだ絵本の中から、その人に似合いそうな本はどれかなと考えて、内緒で絵本を選びます。そして、一、二の三で、あなたのために選んだ絵本はこれよって紹介しあい、その後は二人で似合う場所で読みあいます。

以前1年生と6年生のペアで読みあいをしたことがあります。1年生にとってみれば6年生は神様みたいな存在のようで、ある子は、お兄ちゃんにはうんと難しい本がいいと思って、図書室で探すときに「一番難しい本はどれ」って司書の先生に聞いたんだそうです。その子が最終的に選んだのは国語辞典だったんです。どうやって読むのかわかって思っていたら、6年生のお兄ちゃんが「すごい選んでくれたな」って言って、二人で目を閉じて、ぱっと開いたところに指さして、その文字をお兄ちゃんが読んであげていた。こんな読み

23 木村良雄 作『ねこガム』福音館書店、2009。

24 木村良雄「ねこガム」『こどものとも、年少版』通号 334 号、2005.1。

25 安西水丸 作『がたんごとんがたんごとん』（福音館あかちゃんの絵本）福音館書店、1987。

あいもいいなあって思いました。

思春期でいろいろなことが苦しい子どもたちも読みあいにチャレンジしていますし、お年寄りと子どもがペアになって読みあうということもやっています。親御さんと子どもで読みあうときには、親子でペアになると、親御さんがすぐに読みの指導に入って、「かぎかっこがきっちり読めていない」とか言い出しかねません。ですからなるべく、自分の親ではない大人と組むんです。そうすると、その子のいいところが全部見つかって、それを思わずおうちの人に伝えてあげたくなって、そうすると子どもがすごくうれしくなったりして。そのような活動をしています。

## ② 少年更生施設での読みあいワークショップ

このようなワークショップを背景に、他の場所でも読みあいのワークショップを行っています。ここでは、マレットファンというタイで教育支援をしている NGO と共に取り組んだ、入所している少年同士の読みあいのプログラムを見ていただきます。

### (動画視聴)

どうですか。

この講座の最初、1分間の冒険の中で、お互いの気持ちが同じではないけれど響きあって一つの空間を作っていたように、それから、「声の道」をやってみたら、声そのものが思いを届ける大切な道を通して相手に届くものであって、それをないがしろにして形だけにこだわる必要はないだろうと思ったように。形も大切だけれど、なぜその形ができたのかなって考えると、彼らの幸せな読みあいの姿に行き着くのかもかもしれませんね。

彼らはいろいろな困難があった子どもたちですがけれども、だからこそ、愛おしい声や思いを受け取れるのだなとも思いました。この施設の職員の方たちにとってもそれは、「大きな発見だった、また来てほしい」と言われていました。自分が善いことをするのと同じくらい、自分がいることが認められることや、何でもないことで誰かに喜ばれたり、自分も喜べたりすることも大切なんです。

だから、本が手の届かない遠い存在になってしまうのではなく、だんだんみんなの胸の中に育つといいなと思います。いろんな場所で少しずつ絵本を介したコミュニケーションが広がるように、読みあいを広げていきたいと思っています。

## 5. おわりに

『保育をゆたかに絵本でコミュニケーション』<sup>26</sup>という本の最後に、私が今まで聞かれたことのある、いろいろな質問が出ています。

例えば、「集団で読んでいる途中で勝手に動き出しちゃう子がいるけれど、どうしたらいいですか」とか、「年齢の違う子どもたちが集まって絵本を読むときは、どういうコツがありますか」とか、「どうしてもテンポが合わないんですが、書いてあるとおりに読まないとだめですか」とか。

一つずつになるべく具体的に答えています。詰まるころ、さっきからずっとお話ししているように、絵本は生き物であって、その中にだけ答えがあるんじゃないということです。その生き物をどう育てるかというのが、絵本を読む人と読まれる人の響きあいなんだということ。そして私たちは、現実の世界をよく知っているつもりでいるのだけれども、本を開いた瞬間から、本の中ではどんなふうにも生きられるし、あなたがその中に入ってくるなら一緒に本気で物語の中を生きるよという覚悟を伝えられること。そして、どんなに物語の中が楽しくても、ずっとその中で生きていくわけにはいかなくて、やがては外の世界に戻って来なければいけないんだよということ。でも、また入りたいときにはいつでも喜んで、あなたの傍らの人として一緒に入っていくよという覚悟。その覚悟が、本をしっかり閉じて表紙を前に向けるときにできていれば、途中で何か言われたときにも、大抵の質問の答えは出てくる。この本を読んでもらうと、大方のことはそこに行き着くな、矛盾しないなと分かってもらえると思います。

それから、今日の講座ではちょっと不思議なワークをしたけれど、そんなワークを通して、これから本の学びに入っていきたいっていう方がい

<sup>26</sup> 村中李衣 著『保育をゆたかに絵本でコミュニケーション』かもがわ出版、2018。



らしたら、『ワークで学ぶ児童文化』<sup>27</sup>をお使いいただけたらと思っています。

最後になりますが、私たちが今立っているこの場所は、過去を未来につなげる場所です。国立国

会図書館という場所、子どもと本を結ぶ場所、そして、この道を選んだ「わたし」という場所、大事に大事に歩いていきましょう。

---

27 村中李衣 編著『ワークで学ぶ児童文化：感じあう伝えあう』金子書房、2015。

## 「絵本を読みあい育ちあう」紹介資料リスト

(東京本館) → 国立国会図書館東京本館で所蔵

(デジタル化) → 「国立国会図書館デジタルコレクション」(館内・図書館送信対象館内限定公開)

注: デジタル化図書については、原則として原本は御利用いただけません。なお、一部の図書については、別途所蔵している複本を御利用いただける場合があります。

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
1	保育をゆたかに絵本でコミュニケーション	村中李衣 著	かがわ出版, 2018	FC32-L1545
2	絵本を読みあいからみえてくるもの	村中李衣 著	ぶどう社, 2005	UG71-H85
3	ワークで学ぶ児童文化: 感じあう伝えあう	村中李衣 編著	金子書房, 2015	FA35-L57 (東京本館)
4	さわらせて	みやまつともみ さく	アリス館, 2014	Y17-N15-L42
5	ねずみくんのチョッキ	なかえよしを 作, 上野紀子 絵	ポプラ社, 昭和 49	Y17-4254
6	てじな	土屋富士夫 作	福音館書店, 2007	Y17-N07-H656
7	はなをくんくん	ルース・クラウド 文, マーク・サイモント 絵, きじまはじめ 訳	福音館書店, 昭和 42	Y17-248 (デジタル化)
8	ねこガム	きむらよしお 作	福音館書店, 2009	Y17-N09-J376

レジュメ

絵本と子どもをつなぐ国際子ども図書館の実践

福島 清裕

1. 成長段階に合わせた年齢層別のプログラム

- ① ちいさな子どものためのわらべうたと絵本の会
  - (1) わらべうたから絵本へ
  - (2) 実演プログラム例
  - (3) 絵本 1：【0～1 歳】
  - (4) 絵本 2：【1～2 歳】
  - (5) 絵本 3：【3～4 歳】
- ② 子どものためのおはなし会
  - (1) 特色
  - (2) 実演プログラム例
  - (3) 絵本の選び方 1：形・大きさ
  - (4) 絵本の選び方 2：内容
  - (5) 絵本の選び方 3：組立

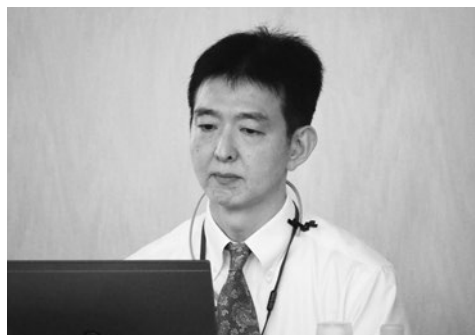
2. 専門機関等との連携イベント

- ① 上野動物園との連携「おたのしみ会」
- ② 東京文化会館との連携「子どものための音楽会」
- ③ 各国大使館等との共催イベント

3. 様々な視点からの絵本紹介

- ① 子どものへやの小展示
- ② 国立国会図書館キッズページ「よんでみる？」
- ③ 夏休み読書キャンペーン

## 絵本と子どもをつなぐ 国際子ども図書館の実践 福島 清裕



国立国会図書館国際子ども図書館児童サービス課の福島と申します。これから、絵本をどのように子どもたちに届けているのか、国際子ども図書館の実践についてお話しします。内容は大きく分けて「成長段階に合わせた年齢層別のプログラム」、「専門機関等との連携イベント」、「様々な視点からの絵本紹介」の三つになります。

### 1. 成長段階に合わせた年齢層別のプログラム

国際子ども図書館では、子どもの成長段階に合わせたプログラムを実施しています。

6か月から4歳未満までの乳幼児向けには、将来、本に興味を持つきっかけとなるよう、親子で楽しめるわらべうたや手遊びを組み合わせた「ちいさな子どものためのわらべうたと絵本の会」を実施しています。家庭でも親子で楽しんでもらうことを目指しています。

4歳以上向けには、本の楽しさを伝え、本や図書館に親しむきっかけとなるよう、おはなし会を実施しています。小学校1年生までは保護者に促されて、どうかやっと一人で参加できる子いますが、2年生以上になると自分から進んで参加してくれています。

高学年向けにはおはなし会とは違った取組があるべきと考えていますが、この年代向けのプログラムは、当館ではまだ実施できていません。

中高生向けには2016年4月から「調べもの体験プログラム」を実施しています。六つのコースのうちの一つに外国語の絵本を見てストーリーを考えるコースを設けています。

### ① ちいさな子どものためのわらべうたと絵本の会

最初に乳幼児向けの「ちいさな子どものためのわらべうたと絵本の会」を御紹介します。対象は6か月以上4歳未満の子どもとその保護者で、15組までの事前申込制です。わらべうた、手遊び、絵本の読み聞かせを組み合わせ、親子で楽しんでいただくプログラムです。

#### (1) わらべうたから絵本へ

わらべうたは日本で昔から歌い継がれてきた子どものための歌です。節やリズムが単純で短く、誰でもすぐに楽しめます。

わらべうたで言葉の響きやリズムを楽しみ、人の声の心地良さが分かった子どもは、絵本を読む声にも耳を傾けるようになります。

国際子ども図書館では「わらべうたは絵本への架け橋」と位置付けて、わらべうたと絵本の会を行っています。

#### (2) 実演プログラム例

この表は当館で実際に行っているプログラムの一例です。

	種類	タイトル
1	わらべうた	にぎりばっちり
2	わらべうた	めんめんすーすー
3	絵本	『でてこいでてこい』
4	わらべうた	ねずみねずみ
5	絵本	『どうぶつのおかあさん』
6	わらべうた	いちりにり
7	わらべうた	おふねがぎつちらこ
8	絵本	『おおきなかぶ』

9	わらべうた	ふくすけさん
10	わらべうた	さよならあんころもち

わらべうたと絵本を交互に組み合わせて、子どもが飽きずに楽しめるようにしています。

### (3) 絵本1：【0～1歳】

次に年齢ごとにどんな絵本を選んでいるかについてお話しします。

0歳児から1歳児は最後まで読むことにこだわらず、好きなページを繰り返し見て、「絵本は楽しいという体験を親子で一緒に積み重ねる」ことが大切だと考えています。

0歳児はまだ視力が発達の途中段階のため、輪郭線がはっきりしていて、1ページに1対象物の絵本をよく見えています。そのような絵本の例として『たまごのあかちゃん』、『でてこいでてこい』等があります。

そして、擬音語や擬態語、短い言葉の繰り返しが効果的に用いられ、リズムがよい絵本の例として『がちゃがちゃどんどん』等があります。

また、絵本をおもちゃと同じように扱い、絵本をなめたり破ったりすることもあるので、破れにくく、めくりやすいボードブックもおすすめです。

### (4) 絵本2：【1～2歳】

1歳から2歳になると食べ物、動物、生活の絵本など身近なものを写實的に描いた「認識絵本」をよく見えています。例えば『くだもの』、『どうぶつのおかあさん』等です。

個人差はありますが、2歳頃から一人で絵本のページをめくるようになります。また、話に始まりと終わりがある、「ストーリー性のある絵本」を楽しめるようになります。例としては、『おつきさまこんばんは』、『もこもこもこ』、『のせてのせて』等です。

### (5) 絵本3：【3～4歳】

3歳から4歳になると、読み聞かせを通じて、昔話絵本や起承転結のある短い物語絵本を楽しめるようになります。昔話絵本の例として『おおき

なかぶ』、『てぶくろ』等、起承転結のある短い物語絵本の例として『わたしのワンピース』、『ちいさなねこ』等があります。事前申込みのお子さんの年齢構成を見て、当日読む絵本を選んでいきます。

## ② 子どものためのおはなし会

次に「子どものためのおはなし会」を御紹介します。子どもたちに本の世界の楽しさを伝え、子どもたちが図書館や本に親しむきっかけとなるよう、おはなし会を行っています。夏休み期間を除く毎週土曜日、4歳以上の子どもを対象に行っているプログラムで、時間は30分程度です。

### (1) 特色

国際子ども図書館で行っているおはなし会の特色として次の3点があります。

1点目、子どもの対象年齢を「4歳から小学1年生までの会」と「小学2年生以上の会」に分けて、年齢別に行っています。それぞれ30分程度です。子どもたちが年齢に合ったおはなしや絵本を楽しむことができるような内容にしています。

2点目、ストーリーテリングを入れています。子どもは語られる言葉を聞いて自分の心の中におはなしの世界を思い描き、想像を膨らませていきます。この体験を繰り返すうちに本の世界を深く味わうことができるようになっていわれています。一例として「ホットケーキ」<sup>1</sup>という同じパターンが繰り返し展開していくおはなしがありますが、「4歳から小学1年生までの会」で語ると子どもは前半の褒め言葉を重ねていく部分は静かなままで、後半の面白フレーズを繰り返す部分からようやく笑い始めるのに対し、「小学2年生以上の会」では前半から既に笑い始めます。年齢によって楽しめるものが違うということがよく分かるおはなしです。

3点目、参加できるのは子どものみです。子どもたちにおはなしの世界を集中して楽しんでもらうために、保護者の方の参加は御遠慮いただいています。おはなしを子ども同士で共有することで、一人で本を読む時とは違った世界が広がります。

1 東京子ども図書館 編『おはなしのろうそく 18』（東京子ども図書館、1990）所収

す。

## (2) 実演プログラム例

次に当館で実際に行っているプログラムの一例として、ある日の「4歳から小学1年生までの会」のプログラムを御紹介します。

わらべうた	どんぐりごろちゃん
おはなし	『鳥呑翁』*
絵本の読み聞かせ (メインの絵本)	『サリーのこけももつみ』
絵本の読み聞かせ (おまけの絵本)	『やさいのおなか』
わらべうた	さよならあんころもち

\* 稲田浩二、稲田和子 編著『日本昔話百選』(三省堂, 2003) 所収

おはなし会では絵本を2冊入れています。当館では最初に読む絵本を通称「メインの絵本」、2冊目に読む絵本を通称「おまけの絵本」と呼んでいます。

絵本の特色としてメインの絵本はしっかりした内容の長めの絵本から1冊、おまけの絵本は気軽に楽しめる短めの絵本やことばあそび・詩の本から1冊選んでいます。

メインの絵本はおはなしと時間(長い・短い等)、内容(楽しい・怖い・悲しい・重い・軽い等)、地域(日本・外国等)、主人公(動物・人等)が類似しないことや、おまけの絵本は全体のバランスや時間調整を考慮しています。また、季節や行事を意識した本を選ぶよう心がけています。

## (3) 絵本の選び方1: 形・大きさ

ここでは主に、国際子ども図書館のおはなし会など、集団への読み聞かせで使用している絵本についてお話しします。

おはなし会に正解はありませんが、当館のおはなし会で得た経験により、良いと思われる方法をいくつか御紹介します。

初めておはなし会に取り組む職員でも半年ほどの研修で、一人でのおはなし会を開催できるようにしています。

まず、メインの絵本の選び方を中心にお話しします。

最初は「形・大きさ」についてです。

一つ目は本自体にある程度の大きさがあること。良い例として『どろんこハリー』という絵本があります。

二つ目は絵が見やすく、遠くからでも絵の輪郭と色がはっきり分かること。色が鮮やかであればいいというのではなく、単色でも遠目が利くものもあります。良い例として『かもさんおとおり』という単色の絵本があります。

## (4) 絵本の選び方2: 内容

次は「内容」についてです。

一つ目は対象年齢が合っていること。子どもの発達には段階があり、絵本もいろいろあるので、年齢にふさわしい絵本を選んでいきます。そのため、おはなし会では「4歳から小学1年生までの会」と「小学2年生以上の会」に分けています。

二つ目はSWIHがはっきりしていること。子どもに分かりやすい展開があるものは、子どもがストーリーに入りやすく、子どもにも納得しやすい結末が望めます。例えば最後にハッピーエンドになる『おおきなかぶ』、勸善懲悪ものとして『三びきのやぎのがらがらどん』等があり、子どもが読み終えた後、「ああ、よかった」とホッとできます。

三つ目は季節や行事を考慮することです。『どろんこハリー』のシリーズ本で、夏なら『うみべのハリー』、冬のクリスマス前なら『ハリーのセーター』、また、『くんちゃん』のシリーズ本では、春なら『くんちゃんのにじ』、夏なら『くんちゃんのもりのキャンプ』<sup>2</sup>、秋なら『くんちゃんはおおいそがし』<sup>3</sup>、冬なら『くんちゃんのだいらよこう』<sup>4</sup>といった具合です。

四つ目は絵と文のバランスが合っていること。具体的には次の3点です。

1点目、1冊の中で、一つの絵に対して文章が極端に長すぎたりしないこと。絵に対して文章が多

2 ドロシー・マリノ 作、間崎ルリ子 訳『くんちゃんのもりのキャンプ』ペンギン社, 1983.

3 ドロシー・マリノ 作、間崎ルリ子 訳『くんちゃんはおおいそがし』ペンギン社, 1983.

4 ドロシー・マリノ 作、石井桃子 訳『くんちゃんのだいらよこう』岩波書店, 1977.

いとバランスが悪くなります。

2点目、絵と文章が前後していないこと。前ページに絵、次ページに文章だと、文章をコピーして読むなどの工夫が必要になります。

3点目、絵が文章を正しく伝えていること。文章と絵（もしくは絵の雰囲気）が合っているか？また、場面の様子や登場人物や出てくるものの数、色などが文章と絵で食い違ってないか？等を確認します。良い例として、どのページにも11匹の猫が出てくる『11匹きのねこ』、文章と絵が合っている『まあちゃんのながいかみ』等があります。

### (5) 絵本の選び方3：組立

最後はプログラム内容の「組立」に当たって気を付けていることについてお話しします。

一つ目として、子どもの年齢やレベルに差がある場合は年齢の低い子の方に合わせています。「4歳から小学1年生までの会」の中でも、4歳と小学1年生の子どもではレベルが全然違うので、なるべく低い年齢の子のレベルに合うようにしています。

二つ目として、2冊目に読むおまけの絵本についても御紹介します。子どもの集中力は長くは続かず、1冊目で疲れたり、飽きたりする場合もあるので、2冊目は1冊目より軽めの内容にしています。違う種類のを何冊か用意しておいて、参加者の人数や雰囲気を見て、読む絵本を決めることもあります。おまけの絵本の例として、物語の本では『きよだいなきよだいな』、『よかったねネッドくん』、ことばあそび・詩の本では、『もけらもけら』、『かぞえうたのほん』、クイズの本では、『やさいのおなか』、『どうぶつのおしごとかん』等があります。

## 2. 専門機関等との連携イベント

おはなし会のほか、専門機関等との連携イベントも行っています。上野公園に隣接する土地柄を活かして、近くの専門機関と連携しています。

### ① 上野動物園との連携「おたのしみ会」

一つ目の、動物をテーマに行う「おたのしみ会」は、上野動物園との連携イベントです。

年ごとにテーマとなる動物を決めて職員がその動物に関する絵本を読み、その後、上野動物園の飼育員さんがその動物の生態などを紹介します。2017年はヤギ、2018年はパンダをテーマに開催しました。このおたのしみ会では、動画のほか、動物の本物の頭骨や餌も見せて、子どもたちの科学的な関心につなげたいと考えています。

### ② 東京文化会館との連携「子どものための音楽会」

二つ目の「子どものための音楽会」は、東京文化会館との連携イベントです。

新進演奏家によるコンサートの後に、職員による音楽に関する本を紹介するブックトークをします。聞いたばかりの楽器の音色がどうして出るのか、本に書かれた説明を紹介すると、子どもたちは興味深そうに聞いています。また、ブックトークを聞かれた演奏家の方が、自分が演奏する楽器を扱った子どもの本があることに興味を持たれ、子どものへやへ本を読み立ち寄られたこともありました。子どもたちやその保護者だけではなく、さまざまな方を子どもの本とつなぐことができるのも連携イベントの効果の一つだと思います。

### ③ 各国大使館等との共催イベント

その他、各国大使館等との連携イベントも行っています。

2017年6月には、在日フランス大使館／アンスティチュ・フランセ日本との共催で、フランスの絵本を紹介するイベント「ボンジュール！フランス絵本のひろば 2017」を開催しました。その一環として、フランス在住の絵本作家であるステファニー・ブレイク(Stephanie Blake)氏とオリヴィエ・タレック(Olivier Tallec)氏を講師に招き、小学生向けのワークショップを2回実施しました。

また、2017年10月には、カナダ建国150周年を記念し、在日カナダ大使館との共催で、英語と日本語による絵本の読み聞かせ等の小学生向け文化交流イベント「カナダは150歳！絵本で知る「カナダってどんな国？」」を開催しました。ブックトークでは、カナダの国旗の話から始まり、『赤毛

のアン』や、「カナダの森」の出てくる本を紹介する等、カナダの本につなげ、子どもたちは集中して聞いていました。

### 3. 様々な視点からの絵本紹介

最後に、当館が行っている、様々な視点からの絵本紹介についてお話しします。

#### ① 子どものへやの小展示

最初に子どものへやの小展示について御紹介します。国際子ども図書館の子どものへやでは、いくつかの場所を展示コーナーとしています。

その一つは時事問題など、世の中で話題になっている事柄に関する本や新聞記事を紹介するニュースのコーナーで、1~2週間ごとに5点程度紹介しています。

もう一つは2か月ごとにテーマを決めて行っているテーマ展示で、2018年の11月と12月はお風呂をテーマとした「お風呂の本」です。テーマを決めたら、絵本、物語、昔話、知識の本、詩など様々なジャンルの本を組み合わせ、計15タイトルを展示します。

いずれも展示の際には、本の表紙が見えるように展示しています。大人は本の背表紙を見れば、その本の内容についてある程度の判断ができますが、これは子どもにはなかなか難しいことです。本の表紙を見せて展示することで、子どもたちが自分で本に手を伸ばすきっかけになればと考えています。

小展示のうち、テーマ展示のブックリストは国際子ども図書館ホームページで公開しています。

「小展示」のページ<sup>5</sup>では、開催中と過去の展示のブックリストを掲載しています。

また、「展示から広がる本の世界—「子どものへや」における展示の工夫」のページ<sup>6</sup>ではテーマ設定や、選書方法等も紹介していますので、こちらも併せて御覧ください。

5 「小展示」国際子ども図書館ウェブサイト <<https://www.kodomo.go.jp/use/room/childroom/month.html>>

6 「展示から広がる本の世界—「子どものへや」における展示の工夫」国際子ども図書館ウェブサイト <<https://www.kodomo.go.jp/promote/activity/exhibition/index.html>>

#### ② 国立国会図書館キッズページ「よんでみる？」



次に国立国会図書館キッズページ「よんでみる？」<sup>7</sup>を御紹介します。

子どもたちが興味を持ったものを調べ、更に興味を広げることができる本や、世界に興味や関心を持ち、国際理解を深めることができる本も紹介しています。このページは小学校3年生程度の子どもたちを主な対象としています。紹介している資料には絵本以外のものも含まれますが、こちらも是非御覧ください。

#### ③ 夏休み読書キャンペーン

最後に「夏休み読書キャンペーン」について御紹介します。これは本を読んでクイズに答える子ども向けのキャンペーンです。

毎年、夏休み期間に「子どものへや」で開催しています。2018年は7月20日から9月2日まで開催しました。

4歳から参加可能ですが、まだ字が読めない子もいるので、大人が手伝ってもいいことにしています。

問題は初級編・中級編・上級編の3コースがあり、各コースの問題数は5問です。日本と外国のものを取り混ぜた読み物や昔話、知識の本、夏らしい季節感のある本から出題しています。

初級編は小さい子どもも参加できるように、絵本中心の問題です。その5問目は好きな本を読んで(もしくは読んでもらって)その書名を記入してもらう問題にしています。

3コースとも、子どもたちが出題された問題の

7 国際子ども図書館キッズページ「よんでみる？」 <<https://www.kodomo.go.jp/kids/research/book/index.html>>



本を子どものへや内で自分で探して読み、1問につき三つの選択肢の中から正解だと思う番号に○を付け、全問解き終えたらゴール地点に行って、自分で答え合わせをします。全問正解者には本に挟む短冊状のしおりをプレゼントしています。

何を読もうか迷っている子どもに、本に親しむきっかけを見つけてもらい、いつもは手に取らないような本を手にとってもらう機会でもありま

す。

国立国会図書館ホームページの国立国会図書館デジタルコレクション掲載の『国立国会図書館月報』2014年5月号<sup>8</sup>にその事例紹介を掲載しています。

以上、絵本と子どもをつなぐ国際子ども図書館の取組について御紹介しました。

---

8 「国際子ども図書館・夏のイベントの事例紹介 夏休み読書キャンペーン」『国立国会図書館月報』638号, 2014.5, pp.20-21. <[http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo\\_8655922\\_po\\_geppo1405.pdf?contentNo=1&alternativeNo=>](http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_8655922_po_geppo1405.pdf?contentNo=1&alternativeNo=>)

## 「絵本と子どもをつなぐ国際子ども図書館の実践」紹介資料リスト

(デジタル化) → 「国立国会図書館デジタルコレクション」(館内・図書館送信対象館内限定公開)

注: デジタル化図書については、原則として原本は御利用いただけません。なお、一部の図書については、別途所蔵している複本を御利用いただける場合があります。

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
1	たまごのあかちゃん	かんざわとしこ ぶん, やぎゅうげんいちろう え	福音館書店, 1993	Y18-7562
2	でてこいでてこい	はやしあきこ さく	福音館書店, 1998	Y17-M98-730
3	がちゃがちゃどんどん	元永定正 さく	福音館書店, 1990	Y18-4735
4	まるまる	中辻悦子 さく	福音館書店, 1998	Y17-M98-585
5	くだもの	平山和子 さく	福音館書店, 1981	Y17-8012
6	どうぶつのおかあさん	小森厚 ぶん, 藪内正幸 え	福音館書店, 1981	Y17-8010
7	おつきさまこんばんは	林明子 さく	福音館書店, 1986	Y18-1997
8	もこもこもこ	たにかわしゅんたるう さく, もとながさだまさ え	文研出版, [1977]	Y17-5294
9	のせてのせて	松谷みよ子 文, 東光寺啓 絵	童心社, 昭和 44	Y17-492
10	おおきなかぶ	A.トルストイ 再話, 内田莉沙子 訳, 佐藤忠良 画	福音館書店, 1966	Y18-M98-330
11	てぶくる: ウクライナ民話	エフゲーニ・M.ラチョフ 絵, うちだりさこ 訳	福音館書店, 昭和 40	Y17-62 (デジタル化)
12	わたしのワンピース	西巻茅子 著	こぐま社, 1969	Y17-609
13	ちいさなねこ	石井桃子 さく, 横内襄 え	福音館書店, 1967	Y17-M99-215
14	サリーのこけももつみ	ロバート・マックロスキー 文・絵, 石井桃子 訳	岩波書店, 1976	Y17-5097
15	どろんこハリー	ジーン・ジオン 文, マーガレット・ブロイ・グレアム 絵, わたなべしげお 訳	福音館書店, 昭和 39	Y17-26 (デジタル化)
16	三びきのやぎのがらがらどん	マーシャ・ブラウン 絵, 瀬田貞二 訳	福音館書店, 昭和 40	Y17-48 (デジタル化)
17	まあちゃんのながいかみ	たかどのほうこ さく	福音館書店, 1995	Y18-10529
18	くんちゃんといじ	ドロシー・マリノ さく, まさきりこ やく	ペンギン社, 1984	Y18-N00-126

絵本と子どもをつなぐ国際子ども図書館の実践

19	うみべのハリー	ジーン・ジオン 文, マーガレット・ブロイ・グレアム 絵, わたなべしげお 訳	福音館書店, 昭和 42	Y17-254 (デジタル化)
20	ハリーのセーター	ジーン・ジオン ぶん, マーガレット・ブロイ・グレアム え, わたなべしげお やく	福音館書店, 1983	Y17-9445
21	やさいのおなか	きうちかつ さく・え	福音館書店, 1997	Y18-12512
22	きよだいなきよだいな	長谷川摂子 作, 降矢なな 絵	福音館書店, 1994	Y18-9400
23	もけらもけら	山下洋輔 ぶん, 元永定正 え	福音館書店, 1990	Y18-5268
24	どうぶつのあしがたずかん	加藤由子 文, ヒサクニヒコ 絵	岩崎書店, 1989	Y11-3548
25	かもさんおとおり	ロバート・マックロスキー 文・絵, わたなべしげお 訳	福音館書店, 昭和 40	Y7-240 (デジタル化)
26	11 びきのねこ	馬場のぼる 著	こぐま社, 昭和 42	Y17-259 (デジタル化)
27	ものぐさトミー	ペーン・デュボア 文・絵, 松岡享子 訳	岩波書店, 1977	Y17-5394
28	よかったねネッドくん 改訂版	レミー・チャーリップ さく, やぎたよしこ やく	偕成社, 1997	Y18-M98-322
29	かぞえうたのほん	岸田衿子 作, スズキコージ え	福音館書店, 1990	Y18-4944
30	ことばのこぼこ	和田誠 さく・え	瑞雲舎, 1995	Y18-11181

## おわりに

### 石井 光恵

二日間通して四つの講義がございました。それぞれに趣の異なる講座であったかと思えます。

今回のテーマの中心は、子どもの成長発達を「絵本の核」として考えるということでした。絵本というのは、様々な表現方式、表現形態を持っていますし、表現の可能性も幅広くあります。ですから、子どもから離れる絵本という方向性もあります。また、最初に申しましたとおり、大人の気持ちをくすぐるものでないと手に取ってもらえないという側面もあります。加えて、絵本は商品としての側面も持っていますから、売れなければいけません。これは、「えっ」と眉をひそめようとひそめまいと、事実です。売れないものは市場から無くなってしまいます。そのような本の中でも、良いものはしっかり揃えておくことができるのが、図書館の仕事の一つかなと思います。

ですので、今回は原点に戻って、子どもと絵本の関係性を突き詰めて考えていきたいと思ったのです。それぞれの先生方にも、この軸をしっかり持ってお話していただけたのではないのでしょうか。

今、時代の流れとして、世界的に自然科学への関心が高まり、子どもたちにも科学的思考を育んでほしいという方向に動いていると思います。そういう意味ではとてもいい時代で、科学絵本に限らず、科学的な視点の入った絵本がいろいろ出てきています。一方で、受講者の皆さんは女性が多く、中には、「理科って苦手」とか「虫、苦手！やだー！」という苦手意識がある方もいらっしゃるかと思います。けれども、科学絵本によく目を通していただくと、様々な良いものが有ります。真鍋先生も、子どもの頃に『せいめいのれきし』を読んで、今では恐竜学者になられていますし、そのように、絵本から科学の世界に目覚めていく子

どもたちもいるわけです。そういう意味では、科学絵本へのまなざしというのも、これから大切な視点としてお持ちいただければと思います。それらの絵本の中には、従来のように知識を中心に語るのではなくて、この世界を物語るという意味合いのものも出ています。

また、今日お話しされた秋田先生は、様々な研究をされてデータを集められ、いろいろな方と出会って情報を得ていらっしゃる。行政の中心的なところにも関わっておられ、第四次「子供の読書活動の推進に関する基本的な計画」（以下「第四次計画」という。）の策定にも、「子供の読書活動推進に関する有識者会議」の座長として携わっていらっしゃいます。そのような先生からお話を伺って、計画のどこにポイントがあるのか、よく分かったのではないかと思います。第四次計画では、大人が子どもに絵本を手渡すというだけではなく、友人同士で本を紹介しあうなど、子どもが主体となって読書活動の推進に関わるという方向性が打ち出されています。これは大事なことだと思います。司書の方たちは非常に真面目なのですが、だからこそ自分の責任ばかり考えがちです。子ども同士が育ちあうということも考慮に入れて、「どんな本が好き？」「じゃあ今度〇〇さんに紹介しようね」といった方向も模索していただけると良いかと思えます。

最後の村中先生は、文字どおり会場を巻き込んだ講義でした。村中先生がおっしゃっていることのあるものは、身体です。先生は、絵本が人間の体に起こす感動、喜び、ドキドキ感といった身体性の問題をとても深く考えておられます。また、絵本を読む・読まれるということは、ただ物語や知識を伝えるだけではなく、読む人、読まれる人の鼓動が生まれ、それが互いに響きあうのだということをおっしゃっています。本は「もの」ですが、それを媒介としたときに、人と人との出会い、人間と人間との接触があるという講義であったかと思えます。そのことを様々なワークで体験していただきましたが、その中で自分の体を感じたことを、大切に持ち帰っていただければと思います。

繰り返しになりますが、今回の講義では子ども

おわりに

の成長発達との関係を「絵本の核」として捉えたいという希望がございました。それぞれの先生方が御講義で示された「絵本の核」は、その一つ一つが、皆さんに伝わっているものと思います。今

回の講義で皆さんが受け取った思いを大切に、これからもお仕事に励んでいただけたらと思います。

The Foundation of the Relation  
between Children's Development and Picture Books  
Transcript of the ILCL Lecture Series on  
Children's Literature, 2018

Contents

Foreword .....	Ken'ichi Terakura .....	1
Introductory Notes .....		2
Contents .....		3
Lecture Programs .....		4
About the Speakers .....		5
Introduction .....	Mitsue Ishii .....	6
Picture Books Link Children with Culture .....	Mitsue Ishii .....	8
Picture Books to Stimulate Children's Interest in Nature and Natural History .....	Makoto Manabe .....	31
Children's Development and Picture Books/Reading .....	Kiyomi Akita .....	50
Read Picture Books Together and Develop Together .....	Rie Muranaka .....	65
The ILCL Practice of Connecting Children with Picture Books .....	Kiyohiro Fukushima .....	82
Conclusion .....	Mitsue Ishii .....	91



平成30年度国立国会図書館国際子ども図書館児童文学連続講座講義録  
「絵本と子どもの原点を見つめる—子どもの成長発達と絵本」

---

令和元年9月15日 発行

発行 国立国会図書館  
編集 国立国会図書館国際子ども図書館  
〒110-0007 東京都台東区上野公園12-49  
電話 03-3827-2053 FAX 03-3827-2043  
印刷 株式会社 丸井工文社  
〒107-0062 東京都港区南青山7-1-5

---

I S B N 9 7 8 - 4 - 8 7 5 8 2 - 8 4 2 - 6

本誌に掲載された記事を全文又は長文にわたり抜粋して転載する場合は、事前に国立国会図書館国際子ども図書館企画協力課協力係に連絡してください。

本誌のPDF版を国立国会図書館国際子ども図書館ホームページ (<https://www.kodomo.go.jp/>)で御覧いただけます。なお、訂正があった場合は、ホームページ上に掲載いたします。







リサイクル適性 **B**

この印刷物は、板紙へ  
リサイクルできます。